学部長裁量経費　平成 21 年度　教員養成学部フレンドシップ事業　報告書
授業科目名「社会体験実習」「社会教育演習」

「信大YOU遊世間（ワールド）」の教師教育学研究　第16集

16th Annual Report on Shinshu University Project "You-you World" in practice (2009)
Pedagogical Research for Teachers

2010 年（平成 22 年）3 月
信州大学教育学部

はじめに

信州大学教育学部長　**岩永恭雄**

平成 21 年度フレンドシップ事業の一環として実施された信大 YOU 遊世間（ワールド）が1年間の活動を終えるにあたり、その報告書『信大 YOU 遊世間の教師教育学研究』（第16集）を刊行する運びになりました。

今年度の特色は、信州大学創立 60 周年記念教育学部事業として、11 月に第8回 YOU 遊フェスティバルを開催したことです。50 周年記念の時にはキャンパスに 1,700 本の苗木を植えましたが、その間伐作業も併せて実施することができました。また、信州大学と長野市との連携事業の一環として、今年初めて『信大茂菅農業義塾』が長野市農業公社との連携のもとに実施されました。その他にも継続して実施されてきたプラザが7件あり、中でも『信大茂菅ふるさと農場』は 10 年目を迎えた長期のものになっています。これらの企画を盛況のうちに実施出来たのは、これまでと同様に本事業の趣旨に賛同されて、様々な企画・イベントにおいて御協力いただいた多くの地域住民の方達と連携団体の支援のお陰です、この機会を借りて感謝申し上げます。

大学卒業後は学校教員になることを目指して勉学に励んでいる教育学部学生にとって、地域の大人や子供達との共同作業を通じた交流経験が、学校現場で教員として活動する際に役立つことは言うまでもありません。学校教員という極めて知的な職業に付く人が持つべき資質として実践的指導力と学問的素養が重要で、双方がバランス良く備わっていることが教員の必須条件でありましょう。後者を身に付ける場は大学ですが、前者は学校で児童・生徒と接していく過程で、また地域住民との交流を重ねていく過程で養われます。このフレンドシップ事業に参加することによって得られた経験と素養には、ボランティア活動の精神、共同作業の進め方、環境問題に対する知識等多くのものがあったと思います。どれもが学校現場での活動に役立つもので、フレンドシップ事業での体験が十分生かされればこの事業の存在意義があるというものです。

本フレンドシップ事業の継続には、今後参加する学生諸君による新しいアイデアが提案されることも重要で、学問的知識・素養に基づいた活動計画を立てて実行してほしいと思います。それこそが信州大学教育学部が掲げる『臨床の知』の精神を実現することになるのです。これを目標とした今後の実りある活動を期待いたします。

もくじ

はじめに　岩永恭雄　信州大学教育学部長……1
もくじ／凡　例……2
第16期「信大YOU遊世間」　東野千尋　第16期「信大YOU遊世間」運営委員長……4
第16期「信大YOU遊世間」の出来事　土井　進　「信大YOU遊世間」指導教員……5
太陽と土と若いおとなとこどもと―「信大茂菅ふるさと農場」参加保護者のひとりとして―
山本亮介　信州大学教育学部准教授……8
「茂菅ふるさと農場」にみられる＜社会関係＞　橋本政晴　信州大学教育学部……9

1．信大茂菅ふるさと農場（10年目）……10
◇実践から得た「臨床の知」
かけがえのない私の1年間・茂菅が与えてくれたもの・「もすげ体操」と私
飯島理沙・鈴木祐香・藤田裕介……17
◇地域協力者からの評価　林部信造　農業……20
小池　健　JAながの営農指導部……21
◇卒業生21名に問う　「アンケート調査」にみる「信大茂菅ふるさと農場」……22
2．信大茂菅農業義塾（1年目）……26
◇実践から得た「臨床の知」
はじめるということ　肥野沙也加・飯村昌史・藤田裕介……27
◇参加者の声　小野塚敏枝……27
3．あっぷるず（10年目）……28
◇実践から得た「臨床の知」
等身大のあっぷるず～スタッフの声から～　宮川はるな……29
4．湯谷小子どもランド（8年目）……34
◇実践から得た「臨床の知」
みんなの居場所・笑顔あふれる湯谷小子どもランド・副プラザ長を終えて
鈴木　梢・岩本芙美・早川和宏……41
◇地域の保護者からの評価　中谷隆秀　湯谷小学校子どもランド　保護者代表……43
5．青木村えがおクラブ（5年目）……45
◇他大学から見た「青木村えがおクラブ」……51
◇実践から得た「臨床の知」
“再会の喜び”が“絆”を生む　市川香織・中村恵理・宮尾　亘……52
◇地域の方からの評価　髙田玲子　青木村児童センター所長……53
◇青木村教育委員会からの評価　上原博信　青木村教育委員会事務局……54
6．麻績村dE遊ぼう！（5年目）……55
◇実践から得た「臨床の知」
子どもの主体的な姿を大切に　布山朋和・田畑隆太郎……56
◇麻績小学校の先生方からの評価　橋渡久美子　麻績小学校司書……62
谷口ゆかり　おみ子ども教室、石田恵子　麻績村G-kid's わくわくクラブ代表……63

7．信州すざか農業小学校豊丘校（4年目）……65
◇実践から得た「臨床の知」
信州すざか農業小学校豊丘校の実態　西澤直城・鈴木　梢……66
◇学生の感想・反省……69
◇地域の協力者・須坂園芸高校の先生・同校生徒の感想と反省
友田一江　信州すざか農業小学校豊丘校事務局……71
長野県須坂園芸高等学校生徒、北原昌司　同校野菜クラブ顧問……72
8．信州大岡ふるさとランド（2年目）……74
◇実践から得た「臨床の知」
挑戦することから見えた伝えることの大切さ・大岡の魅力・大岡プラザを経験して
宮尾　亘・市川香織・藤田裕介……80
◇連携団体からの評価　金澤　仁　大岡子どもプラザ施設長……81
小岩井彰　長野市立大岡小学校長……82
9．信州大学60周年記念事業　第8回YOU遊フェスティバル（講座内容）……83
1．クリスマスリースをつくろう　2．あがれ！ボクの気球、わたしの気球
3．トレジャーハンター　4．本日開店！ミニパンやさん♡
5．HEROES ～とらわれの姫を救え～　6．冬でもできる!! 流し○○メン
7．はりがねカンパニー　8．冬のドタバタ大運動会！！
9．日本縦断!! グル巡り　10．いざ、ソーラン節 ～大漁目指して～
11．あそび屋　わにわに　12．旭山に登って秋を描こう
◇実践から得た「臨床の知」
人と人のつながりの中で　早川和宏……100
「第9回全国フレンドシップ活動」（報告）切磋琢磨し、感動を共有しあった第9回「全フレ」土井　進……104
「第9回全国フレンドシップ活動 in 信州」を終えて　笠井悠太……107

「信大YOU遊世間」にご協力いただいている団体・個人のご紹介……108
編集委員会規程……109
第17期「信大YOU遊世間」へ向けて！　片原範子……110
おわりに／編集後記……111
表紙解説／第16集編集委員会……112

☆ — ☆ — ☆

凡　例

執筆者が信大生の場合、適宜、専攻名と学年を略記した。以下に「例」と「略称」を示す。
例：「実3」＝教育実践科学専攻3年、「言2」＝言語教育専攻2年、「心2」＝心理臨床専攻2年
専攻名とその略称

実：教育実践科学専攻	言：言語教育専攻	社：社会科学教育専攻	理：理数科学教育専攻
芸：芸術教育専攻	保：保健体育専攻	生：生活科学教育専攻	障：障害児教育専攻
地：地域スポーツ専攻	野：野外教育専攻	心：心理臨床専攻	院：大学院生

なお、他大学等の参加者についても下記略称を用いた場合もある。
上：上越教育大学、横：横浜国立大学、茨：茨城大学、文：文教大学、岐聖：岐阜聖徳大学、長：長野大学、松：松本大学、武蔵：武蔵野大学、県短：長野県短期大学、清短：清泉女学院短期大学、飯短：飯田女子短期大学

第16期「信大YOU遊世間」

第16期「信大YOU遊世間」運営委員長
東野千尋（芸術教育専攻３年）

１．第16期のはじまり

今年度の「信大 YOU 遊世間」は、発足前、ある問題を抱えていました。それは、「プラザ長が決まらない」ということ。このプラザは続いてほしいという声、副プラザ長なら、やってもいいという声はあっても、なかなかプラザ長に立候補してくれる人がいないという状況が、春休み中続きました。

このままプラザ長が決まらないで、発足式を迎えてしまうのではないか、プラザ長をやると言ったが、１年間務められるのかといった、さまざまな不安がありました。しかし、みんなでやれば大丈夫、という信念のもと、今ある７つのプラザのリーダーが決まり、平成 21 年４月４日に信州大学にて、発足式が行われ「第16期信大YOU遊世間」が発足しました。

２．今期の特色

今期から、信州大学教育学部のホームページ上に、特色のある活動として、「信大 YOU 遊世間」のウェブログが始まりました。初めての試みということで、どんなことを書けばいいのか分からなかったり、更新がうまくいかなかったりと、困ったことは何度もありましたが、ホームページの担当である、高崎禎子先生のサポートのお陰をもちまして、何とか最初の１年を終えることが出来ました。

３．１年間の活動を終えて

私がこの１年間でやりたいと思ったことは、「いろいろな人と、いろいろな活動に参加したい」ということでした。そのように思ったのは、去年の 12 月に、私たちの代に引き継ぎをするときに、自分の参加した活動を振り返って、１つのプラザの活動にしか参加していないことに気付いたからです。

昨年度、初めて「YOU 遊世間」の活動に参加して、人と関わることが苦手であった私は、積極的に知らない人の輪に入っていくことができませんでした。そこで、全体長をやって、まず自分自身がいろいろなプラザの活動に参加してみようと思いました。

引き継ぎをしてみて、活動を作り上げる大変さ、人に仕事を頼む難しさを痛感しました。不慣れな作業に私は、１人で悩んでいました。その時に、周りの人たちが手を差し伸べてくれ、「１人で抱え込まないで、みんなでやればいいんだよ」と、言ってくれました。そこで、人と人とのつながりが素晴らしいものだということに気付きました。

この１年間でみんなに迷惑を掛けた数は計り知れないくらいあります。しかし、それと同じくらいの充実感があります。来期の「信大 YOU 遊世間」を引き継ぐ人たちにも、この充実感を味わってほしいと願っています。

第16期「信大YOU遊世間（ワールド）」の出来事

「信大YOU遊世間」指導教員
土井　進（教育科学講座教授）

1．第16期の運営組織

第16期の運営は、次の表にあげた学生によって実施されました。

運営委員長　　東野千尋（芸術教育専攻３年）
副運営委員長　市川香織（教育実践科学専攻３年）
副運営委員長　早川和宏（理数科学教育専攻３年）
副運営委員長　宮尾　亘（教育実践科学専攻３年）

（◎プラザ長　○副プラザ長）

プラザ名	連携団体・協力者	役員	専攻・学年
信大茂菅ふるさと農場（10年目）	JAながの 長野市茂菅地区農家	◎飯島　理沙 ○鈴木　祐香 ○藤田　裕介	理数科学教育専攻３年 理数科学教育専攻３年 社会科学教育専攻３年
信大茂菅農業義塾（１年目）	長野市農業公社	◎肥野沙也加	野外教育専攻３年
あっぷるず（10年目）	林部信造・幸子夫妻	◎宮川はるな	言語教育専攻４年
湯谷小子どもランド（８年目）	長野市立湯谷小学校保護者 長野県短期大学	◎鈴木　梢 ○岩本　芙美 ○早川　和宏	理数科学教育専攻３年 障害児教育専攻３年 理数科学教育専攻３年
信州すざか農業小学校豊丘校（４年目）	須坂市教育委員会	◎西澤　直城 ○鈴木　梢	理数科学教育専攻３年 理数科学教育専攻３年
麻績村dE遊ぼう！（５年目）	麻績村教育委員会 おみ図書館	◎布山　朋和 ○田端隆太郎	教育実践科学専攻３年 教育実践科学専攻３年
青木村えがおクラブ（５年目）	青木村教育委員会 青木村地球クラブ	◎市川　香織 ○中村　恵理 ○宮尾　亘	教育実践科学専攻３年 芸術教育専攻３年 教育実践科学専攻３年
第８回YOU遊フェスティバル	長野市PTA連合会 教育学部附属長野小学校ほか	◎早川　和宏 ○肥野沙也加 ○太田　香子 ○小賀坂佳子 ○藤浦　修司 ○松井　遥 ○三石　梨沙	理数科学教育専攻３年 野外活動専攻３年 社会科学教育専攻２年 理数科学教育専攻２年 社会科学教育専攻２年 理数科学教育専攻２年 理数科学教育専攻２年
信州大岡ふるさとランド（２年目）	長野市大岡支所・大岡小学校 大岡農村女性ネットワークほか	◎宮尾　亘 ○市川　香織 ○藤田　裕介	教育実践科学専攻３年 教育実践科学専攻３年 社会科学教育専攻３年

16年目の「信大YOU遊世間」を無事、大成功で成し遂げた学生の皆さん！本当にごくろうさまでした。様々な困難な場面を皆さんは連帯して乗り越え、友情を深めるとともに、教職への使命感を深めることができたことと思います。本当におめでとうございます。

今期の特色の一つに、音楽教育分野３年の東野千尋さんが勇気を出して運営委員長の大役を

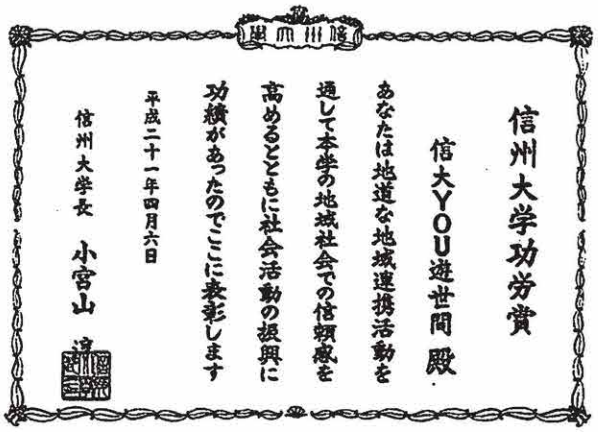
担って立ち上がってくれたことがあげられます。芸術教育専攻の学生は、例年、土曜日や日曜日には発表会や練習があります。そのため、これまでは「YOU 遊世間」の活動に参加する学生は極めて小数でした。しかし、16 年目にして東野さんがこの流れを変えて、運営委員長として立候補してくれた意義はとても大きいと思います。

2．今期の主な出来事

今期の主な出来事をあげると、次の５点になると思います。

（1）「信州大学功労賞」の受賞

平成 21 年度入学式の折りに、15 期運営委員長の原耕平君が、次のような表彰を受けました。


信州大学功労賞

信大YOU遊世間 殿

あなたは地道な地域連携活動を通して本学の地域社会での信頼感を高めるとともに社会活動の振興に功績があったのでここに表彰します

平成二十一年四月六日

信州大学長 小宮山 淳

「信大 YOU 遊世間」が長年にわたって地域連携活動を積み重ねてきたことを評価していただき、「信州大学功労賞」を受賞することができました。皆様とともに喜び、感謝したいと思います。

16 年間の「YOU 遊」の活動は、次のように名称が変わってきています。

私は、学生の皆さんの主体的な地域連携活動がこれからも継続されるように、今後とも陰の力になりたいと思います。

平成６年４月～ 「信大 YOU 遊サタデー」 （７年間）	平成 13 年４月～ 「信大 YOU 遊広場」 （２年間）	平成 15 年４月～ 「信大 YOU 遊世間」 （７年間）

（2） 教育学部ホームページに掲載

教育学部の広報部会から要望があり、学部のホームページの「特色ある実践」のコーナーに、「信大 YOU 遊世間」が紹介されることになりました。運営委員長や各プラザ長が記事を更新しています。

（3） 地域連携フォーラムでの実践報告

工学部を会場として開催された「地域連携フォーラム（2009)」(平成 21 年 11 月 24 日)のパネルディスカッション「地域連携による研究教育活動の現状と地域貢献への課題」に、パネリストとして学生６名と筆者が参加しました。パワーポイントによって、各プラザの活動状況を提示しました。元気よく自信をもって発表した学生諸君の取り組みに、高い評価が寄せられました。

（4） 信州大学創立 60 周年記念教育学部事業

平成 21 年 11 月 21 日、22 日に、「第８回 YOU 遊フェスティバル」が教育学部キャンパスで開催されました。この取り組みは信州大学創立 60 周年記念教育学部事業の一環として実施されたもので、創立 50 周年の折りにキャンパスに植樹した 1,700 本の苗木が大きく育ち、間伐が必要になってきました。この間伐作業に、約 200 名の学生が参加しました。

（5）「信大茂菅ふるさと農場」10周年記念祝賀会

「茂菅ふるさと農場」は10年目を迎えることができました。この間、ご支援を賜ってきた地主さん、茂菅地区農家の方々、JA ながの営農指導部の方々などに感謝を捧げる機会となりました。これまでの 10 年間の卒業生、在校生が約 70 名出席して下さり、林部信造氏が「信大茂菅ふるさと農場と私」という演題で講演してくださいました。林部氏は歴代農場長について、「明るく朗らかである」「チャレンジ精神がある」「困難を乗り越える情熱を持っている」「喜び悲しみを感じることができる人である」と評価して下さいました。

また、林部氏から農場 10 周年を記念して「信大 YOU 遊世間」にテント一式が寄贈されました。

（6） 第10回全国フレンドシップ活動

今年度の全国フレンドシップは、横浜国立大学を会場として３月３日～８日に開催されます。本学部からは９名が参加します。

10 大学 70 名の学生の皆さんの参加による「第９回全国フレンドシップ活動 in 信州」を、無事、大成功で終了することができました。参加された 70 名の皆さんの５泊６日にわたる激闘とご活躍による大成功に対し、私は心からおめでとう、そして、ありがとうと申しあげます。

私も青木村文化会館で５泊し、麻績村体育館、長野市檀田地区センターの３か所で実施された皆さんの活動を楽しく参観させていただきました。どの場所においても皆さんと地域の子どもたちとの間に、まさに一期一会のフレンドシップ（友情）が形成されているのを感じました。また、70 名の学生同士のフレンドシップの形成は、平成 21 年３月４日（水）の長野駅へのお出迎えから始まり、３月９日（月）の記念植樹を終えたあとの感動のお見送りまで続きました。

ここに、フレンドシップ事業の本質と、全国の学生が集い合って切磋琢磨しあう意義がある、と認識を新たにしました。第９回を本学で無事実施できましたことに、関係各大学の皆様のご理解とご協力に対し、心から感謝申しあげます。

太陽と土と若いおとなとこどもと
――「信大茂菅ふるさと農場」参加保護者のひとりとして――

山本亮介（信州大学教育学部准教授）

あらためて言うまでもないことですが、こどもってのは本当にげんきんなヤツです。

幼いころは、用事が何であろうと家から外に行けるだけでラッキー、それがだんだん、外で遊べることを喜びの‘条件’とするようになり、小学生となったいまや、かなり即物的なメリットなしには誘っても外へ出ようとしません。パパとオソトに行けるだけでうれしい、なんてずいぶん昔のことになりました。

そんなこどもも、「茂菅ふるさと農場」に行くのが楽しみでしかたないようです。いや、行く前はけっこうしり込みをしていました。生まれ育った神奈川県から引っ越してきて三年目。たとえば、向こうにいるあいだに培ってきた昆虫類への苦手意識は、すでにりっぱなコンプレックスへと昇華（しているらしい）。せっかく長野県に住むのだから、ぜひとも‘シゼン’と触れ合ってすくすくと……、なんて浅はかな親ゴコロも見え見えで、彼の警戒心はいやでも高まっていたのです。それが回を追うごとに、次の活動日を心待ちにするようになり――。

そりゃ、茂菅に行けば、若くて優しい〈おねえさん／おにいさん〉たちが、まちがいなく一緒に遊んでくれるわけです。動きもしゃべりもまだまだ軽快な彼らが、イヤな顔ひとつせず付き合ってくれるこのうれしさ。‘若いおとな’たちとのポップでスピーディでハートウォーミングな触れ合いが、親の気まぐれなつまらんチョッカイに比べて、どれほどヤツのテンションを上げるにふさわしいものか。

いささか愚痴っぽくなりました。そう、ちょっと嫉妬しているのかもしれません。「茂菅ふるさと農場」と、そこで待っている彼らに。おっかなびっくりではあれ、土を掘り起こし、草を刈り、カエルを手に乗せ、バッタを追いかけるこどもの姿に目を細めつつも……。くやしいけれど、負けました。だけど、じゃなくてだから、こどもを参加させて、本当に良かったと思っています。

さて、こんな情けない父親も、大学キャンパスに入ればひとりの教員です。教育学部の学生たちが、正規の授業日のほか、たいへん過密なスケジュールをすごしているのを日々目のあたりにしています。教育実習の準備や集中授業などもあって、おそらくは、一般的な大学生に比べ休日が極端に少なくなっているはずです。そうした状況にもかかわらず、学生たちは、「茂菅ふるさと農場」の活動にたくさんの時間を割いています。その途方もない努力と志の高さに、頭が下がるばかりなのは、直接の恩恵を受けているわたし（たち）だけではないでしょう。大学の印刷室で一緒になった運営スタッフから、内部資料（？）である参加学生のリフレクションシートを見せてもらったことがあります。「茂菅ふるさと農場」に関わる学生たちの真摯な態度が、ひしひしと伝わってくる内容でした。いち保護者、いち教員として、彼らの思いと活動が、それぞれの人生で実を結ぶことを願ってやみません。

最後になりましたが、活動を支えてくださった林部さん、小池さん、そして土井先生に深く感謝申し上げます（個人的に農地をお借りしました！）。来年もぜひ、こどもと一緒に「茂菅ふるさと農場」へ参加したいと思っています。

「茂菅ふるさと農場」にみられる＜社会関係＞

橋本政晴（信州大学教育学部）

○「も」うこんなに大きくなったんだ。

農場に行く度に思うことである。行く度にとはいっても、月に一度。それでも稲や野菜は、いつのまにぐんぐん伸びている。食べ物をつくるということを、専門家に依存し、非日常化してきた私たちにとっては、それは驚き以外の何ものでもない。何か特別なことをしたわけではなく、ただ植えただけ。それでも「食べ物たち」は、永い年月を経て豊かに整えられてきた「土」から、ふんだんの栄養を吸収し、花を咲かせ、実を結ぶ。実った野菜は、時にはそのまま、時には調理された料理となって、私たちの胃袋へと吸収される。

こうした【自然と取り結ばれる社会関係】は、農場の醍醐味である。大正生まれの私の祖母は、晩年までとにかく「食べ物」をつくっていた。つくり過ぎだといわれるぐらい、たくさんの「食べ物」をつくっていた。それが時代の生き方だったといえばそれまでかもしれないが、まさしく【自然と取り結ぶ社会関係】が日常化されていたのだ。月に一度とはいえ、子どもたちが土に触れ、近いうちに「食べ物」となる苗に手で触れ、実を食べること。それは【自然との社会関係の取り結びの姿】であり、この農場の面白さだと思う。

○「す」ごくたいへんだったけど、楽しかった。

数時間の農作業を終えて、帰路の途中で子どもたちが発する感想。とてもありきたりな物言いかもしれないが、この農場の雰囲気はこの一言につきる。ここでの楽しさとは、何よりも農場に集まった人びとの間でうまれた楽しさである。農場には乳飲み子から保育園児、小学生、大学生、お父さん・お母さん、そして「長野のお父さん」と「茂菅の先生」までがおられる。これだけ多様な年代の人たちが、一同に作業できるのは、それが農作業だからである。もちろん月に一度なので、全員がすべからく親しい関係にあるわけではない。それでも「食べ物」をつくるためには、協同で作業をしなければならない。そこに会話はなくとも、一緒に土を触り、苗を植え、収穫をし、実をほおばる。こうした【農場に集う人びととの社会関係】が、農場の楽しさになっている。現在、とかくコミュニケーション能力を向上するための様々なプログラムが開発されているが、この農場には、そんな崇高なプログラムは不要だ。「野菜がとれて～」と歌に合わせて体操し、ただただ一緒に作業すること。そのこと自体が【農場に集う人びとの社会関係】を醸成してくれている。通常は子どもが中心になって作業は行われるのだが、作業によっては大人が必要になり、内容によっては「長野のお父さん」と「茂菅の先生」が登場してくれる。子どもたちはそれを見て真似ようとする。こうした作業の共同性は、いつの間にか【農場に集う人びとの「顔の見える社会関係」】をつくり上げてくれている。

○「げ」んきな姿が見られてよかった。

農場の「10 周年記念祝賀会」にお招きいただいたとき、「長野のお父さん」と「茂菅の先生」が発せられた言葉。10 年分の思いが詰まった重みに加えて、とてもアットホームな祝賀会だった。それは、互いに顔こそは知らないかもしれないが、【農場に集ってきた人びとの「歴史的な社会関係」】の姿だった。「茂菅の先生」の企画、「長野のお父さん」の講演、その傍らで聞こえる乳飲み子の泣き声。そして、尽きることのない語らいの時間。どれもが【農場に集ってきた人びとの「歴史的な社会関係」】から生まれたものだと思う。

「も・す・げ」農場は、こうした社会関係が醸成・維持されてきた場所のように思う。

信大茂菅ふるさと農場（10年目）

農 場 長　飯島理沙（理数科学教育専攻３年）
副農場長　鈴木祐香（理数科学教育専攻３年）
藤田裕介（社会科学教育専攻３年）

○学生スタッフ名

飯島　理沙（理３）	鈴木　祐香（理３）	藤田　裕介（社３）	宮川はるな（言４）
原　　卓也（理４）	中川　　茜（生４）	高池　亮輔（保４）	市川　香織（実３）
渋谷美奈子（実３）	田畑隆太郎（実３）	布山　朋和（実３）	宮尾　　亘（実３）
小出明日美（言３）	中村　幸恵（言３）	井出　優貴（社３）	降旗みなみ（社３）
片桐　清史（理３）	小林　　愛（理３）	島田英一郎（理３）	鈴木　　梢（理３）
滝澤雄太郎（理３）	西尾　聡美（理３）	阿部　由季（芸３）	島崎　涼子（芸３）
田中　聖人（芸３）	中村　恵里（芸３）	東野　千尋（芸３）	井上　知洋（障３）
小松　　静（障３）	肥野沙也加（地３）	廣田　杏奈（地３）	柴田　　計（実２）
登内　恭平（言２）	太田　香子（社２）	山越　　俊（社２）	宇賀地由里（理２）
加瀬　智晴（理２）	片原　範子（理２）	田澤　岳哉（理２）	土屋　克明（理２）
服部　直幸（理２）	三石　梨沙（理２）	峯村　和裕（理２）	中村　静香（芸２）
志村　友紀（生２）	平澤　里恵（生２）	井出　愛香（実１）	町田　香帆（実１）
岡澤　沙季（県２）	矢澤ひかり（清短２）	上田　雄介（ＯＢ）	洞出　直美（ＯＧ）

○参加者数　　子ども41名（29家族）　地域協力者４名　学生50名　卒業生２名

○連携団体

地域協力者：林部信造・幸子ご夫妻

JAながの：小池　健

○プラザの概要

１．「信大茂菅ふるさと農場」とは

今年で 10 年目を迎えた歴史のある活動である。農場は、信州大学教育学部から鬼無里方面へ自転車で約 10 分のところにある、自然豊かな場所にある。近くには裾花川があり、農場にはとても多くの虫たちがいる。畑と田んぼは約 12 アールの広さで、今年はお米と野菜９種類を育てた。

２．10代目の活動目標と年間計画

活動目標

「茂菅という自然に恵まれた土地で遊び、作物を育てることの大変さ・楽しさを体感する中で、物事を素直に感じることができる心を養う。」

○年間計画

第１回目	４月18日（土）	じゃがいも植え
第２回目	５月16日（土）	ゴーヤー・きゅうり・ピーマン・スイカ・ミニトマト・とうもろこし・さつまいも・ソーメンかぼちゃ植え
第３回目	６月６日（土）	田植え、大豆植え

第４回目	７月18日（土） ⇒７月20日（月）	（＊雨天のため延期）染色、かかし作り、じゃがいも収穫
第５回目	８月８日（土）	川遊び、とうもろこし・ソーメンかぼちゃ・スイカ・枝豆収穫
第６回目	９月27日（日） ⇒９月26日（土）	稲刈り、はぜかけ
第７回目	10月17日（土）	脱穀、さつまいも収穫
第８回目	11月14日（土） ⇒11月28日（土）	わら細工、大豆収穫、農場活動締め （＊11月28日（土）保護者との懇親会を行う。）
第９回目	12月19日（土） ⇒12月12日（土）	おもちつき

３．各活動内容

今年の活動では、だいたい以下のようなスケジュールで活動を行ってきた。

9:00-9:20　受付	
9:20-9:40　始めの会	11:00-11:40　活動②
9:40-10:30　活動①	11:40-12:00　リフレクション（絵日記）記入
10:30-11:00　トイレ休憩	12:00-12:10　帰りの会

早く農場に来た子たちは農場を駆け回り、学生と触れ合いながら、茂菅の自然を感じていた。今年は第１回目から「もすげのうじょうのうた」、第２回目から10代目バージョンの茂菅体操を取り入れた。１年間を通して取り組んだものだったので、活動を重ねていくにつれ、歌も体操も定着していった。また、トイレ休憩は、昨年までと同様、林部さんの家のトイレをお借りさせていただくことになった。農場から林部さんの家まで、林部さんのケートラの荷台にみんなで乗り、楽しくトイレに行く。子どもたちは「トイレ」よりも、ケートラの荷台に乗りたくて、それを楽しみにトイレに行くというようにも見えるくらい毎回楽しそうだった。トイレに行かない子どもたちは、水分補給を少ししたら、すぐに農場の中を駆け回り、虫を捕まえ、学生と触れ合っていた。これも毎回のことで、休憩時間を楽しみにしている子どももいた（休憩時間が早く終わってしまうと、もっと遊びたいと言って泣いてしまう子もいた）。そして、最後には子どもたちのリフレクションとして、今年は絵日記風の紙に記入してもらうという形をとった。この絵日記風の紙だが、これを書くのがとても楽しみだという子どももいて、いつも「時間だよー」というと「えー！」という声が聞かれるほど、夢中になって書いていた。その日楽しかったことを絵と文字で記入するのだが、茂菅には小さい子（保育園児・幼稚園児、または２歳）がいるので、この方式をとることで、小さい子も書くことが出来たので良かったなと思った。

第１回　４月18日：じゃがいも植え・看板づくり

第１回目、４月18日（土）。いよいよ今年の活動が始まる。「第16期YOU遊世間」全体でも最初の活動。多くの人がこの茂菅に参加してくれた。第１回目の内容は、じゃがいも植えと看板作り。じゃがいも植えは、子どもがくわを使って畝を作るところからはじめた。子どもと学生、そして保護者さんが協力して畝を作っていく。そのあと、林部さんとJA長野の小池さ

んが手直しをして、じゃがいもが植えられる立派な畝が完成した。じゃがいもを切って、班ごとに大切に植えました。最後に、やさしく土をかぶせて、じゃがいもが元気に大きく育ってくれることを願って、完了。

トイレ休憩後は、今年植える予定の野菜たちの看板作り。班ごとに決められた看板を折り、紙やペンを使って上手に看板を作り上げることが出来た。これで今年の野菜たちの看板は完璧だ。

参加した学生は、「もっと子どもたちとフレンドリーに遊べるように、子どもにかえる!!」(宇賀地)、「子どもの興味を引く方法を身につける!!名前を覚える。」(三石) と、子どもたちのことを一番に考えて、子どもたちとの距離を縮めるためにはどうしたらいいか考えながら活動した。また、子どもたちと一緒に活動したことで、「子どもは自然で遊ぶとすごいな！って思った。夢中になって虫を追いかける姿とか、草に興味津々な姿とか、印象に残った。」(中村恵理)、「土井先生に『もっと子ども目線で』と言われ、はっとした。自分が素でいることは時によくないことだ、と…演じることも必要だ、と思った。(特に、２歳～小２くらいの子どもとかかわる時など…久々だったので)」(市川) などと、気づきを得ていた。

第２回　5月16日：野菜８種類植え

第２回目は、野菜８種類植え。企画の段階で、時間内にどう植えていこうかと悩んだ。子どもたちにはなるべく多くの野菜を植えてもらいたい。でも、植える作物にも数に限りがあるし、時間制限もあるし…。班ごと決めてしまったら、「私はあっちの野菜を植えたかった」と、いうかもしれない。話し合いを重ねた結論は、班ごと植えるものを決めて、ローテーションをしながら時間内に全てを植えきる、というものだった。

当日は、とてもスムーズに活動することができていた。班付き学生のおかげである。子どもたちも、盛りだくさんの活動だったが、一生懸命活動していたので、時間内に終えることが出来たのだと思う。ただ、始めの会や終わりの会などがしっかりしていなかったため、全体のまとまりが薄かったように感じた。参加した学生は、「みんなと一言ずつ話をすることができた。子どもたちを動かすこと、子どもに『～ちゃんよんできて』とたのむことで、子ども同士も仲良く過ごしてくれたと思う。」(宮尾) と、自分なりに班の子どもたちと仲良く活動していた。また、「班の子が女の子ばかりでした。女の子と話すのは、男の子に話しかけるより難しいなと思いました。学年が上がるごとに難しくなると思いました。」(井上) と、自分の中での課題に気づきながらも、「楽しかったです。外で子どもと遊ぶっていいなと思いました。」(井上) と、茂菅で活動したことの楽しさを感じていた。

第３回　6月6日：田植え・大豆植え

いよいよ田植えの時期である。田植えと大豆植えを行った。まずは、大豆植えから。大豆はくわを使ってみぞを作り、そこに種をまくものと、田んぼの畦に穴を掘ってそこにまくものの２種類を植えた。枝豆になる大豆と、12 月の「おもちつき」でのきなこになる大豆とである。大豆植えの場所は狭くて全員が同じ作業を一度に行うのは困難だったので、交代で草取りも行った。今年は草取りの活動にも力を入れていて、第２回目の活動のときも、じゃがいも畑に生えていた雑草を夢中になって抜く子どもの姿があったが、今回の活動でもみんな熱心に雑草を抜く姿を見ることができた。「家ではお手伝い（草取り）しない子が『草取りって楽しい♪』

と言っていて、すごいなと思った。」（宮川）というくらいであった。

今回の目玉の活動、田植えは、トイレ休憩をはさんで行われた。みんな田んぼに入れる格好になり、田んぼに入ると泥の感触にみな声をあげていた。子どもも学生も保護者も、みんなが協力して、予定していたところまで、時間内に植え終わることができた。保護者のみなさんも積極的に田んぼの中に入り、活動してくださったのがとても印象的だった。参加した学生は、「元気をもらった。」（島田）、「とてもたのしかった。元気になれた。てんしのようでした。」（鈴木梢）、「すごく元気で、いつも全力!!どっかへいっちゃったりするけど、一緒にいるとすごく楽しい。」（阿部）、「いつでも、見たもの全てが新しい感じでたのしそうだね」（原）と、子どもたちと行った大豆植えや草取り、田植えを通して、子どもたちから元気をもらい、楽しむことができた。

第4回　7月20日：じゃがいも掘り・草木染め・かかし作り

今回の活動では、初めての試みとなる、草木染めを行った。草木染めは、大学の教授、福田先生にやり方を教えてもらい、アドバイスをいただき、何度も練習を重ね本番を迎えた。かかし作りでは、竹を地域の林部さんから提供していただき、丈夫なかかしができるよう準備をした。

予定していた日には雨が降ってしまい、20 日（月）に変更したため、参加者はいつもより少なかったが、その中でも楽しく活動することができたように感じた。参加した学生が、「とても楽しかったです。初めて参加しましたが、また参加したいなと思いました。」（小林）、「私自身も夢中になって、一緒にはしゃいでいました。」（渋谷）、「子どもたちが、何においても楽しそうに作業していてよかったと思います。」（志村）、「親も子どもも学生も楽しめて、とてもいい活動でした。」（廣田）、「暑い中の活動でしたが、暑さを気にする間もないくらい、楽しく過ごせました。」（肥野）と、リフレクションに書いているように、今回の活動では子どもだけが楽しむということではなく、参加者全員が楽しむということが、特にできたのではないかと思う。何度も練習を重ねた草木染めは、今回収穫するじゃがいもの葉を使って行ったのだが、子どもたちはとても興味津々で、鍋の中でどのように葉が煮えていくのかを覗き込んでいた。また、かかしづくりでは、ひもで竹を十文字に縛って結びつけ、子どもたちが家から持ってきた服をかぶせ、顔を書いたり、絵を描いたりして、その班ならではのかかしを作った。みんなが一生懸命ひもを結んでくれたおかげで、丈夫なかかしを作ることができた。そして、じゃがいもの収穫。今年初めての茂菅での収穫。土の中から出てくるじゃがいもは、子どもたちだけではなく、学生や保護者にとっても宝物だった。じゃがいもが少し見えると近くにいる子どもたちは、1個のじゃがいもをとり合う。しかし、とり合いの中で、譲り合いの姿も見られた。このじゃがいもの収穫では、「チームを超えてみんな仲良くできていた。」（東野）というように、班の中だけでなく、茂菅に来ている参加者がみんなで協力している姿が見受けられたと思う。そして、大事に掘ったじゃがいもをゆでて食べた。これは多いかな？と思っていたけれど、用意しておいたじゃがいもはほぼ完食。1つ食べては、次から次へ持っていく。やはり農場でとれたじゃがいもは、みんなで一生懸命草とりをしてお世話をしたじゃがいもは、味も格別だった。

第5回　8月8日：川遊び→とうもろこしなどの収穫・スイカ割り

「信大茂菅ふるさと農場」の隣を流れている川で、川遊びをする、これが今年の目玉の活動だった。夏の時期、いちばん野菜が取れる時期だ。とうもろこし・ソーメンかぼちゃ・きゅうり・ミニトマト・ピーマン…それらを、川で遊びながら、おなかがすいたら食べる、そんな計画をしていた。今年はスイカも育て、そのスイカでスイカ割りをしようとしていた。時間配分や、場所の下見、川では魚取りもできると教えてもらい、その魚を食べる方法も考えた。川遊びは楽しいけれど、一歩間違えると危険だから、たくさんの目で子どもたちを見られるように学生スタッフもたくさん集めた。準備は万端。しかし、今年は夏の雨が多すぎた。その結果、川は大氾濫。前日も雨が降り、今年楽しみにしていた川遊びはできなくなってしまった。本当に残念だった。川遊びを中止するという決断をするのはとても悔しかったけれど、子どもたちの安全を第一に考えたら決断せざるを得なかった。川遊びができないと決まったときは、もう活動日の前日の昼過ぎ。このときから、農場で活動する企画を考え始めた。とうもろこしの収穫をして、さつまいも畑の草とり。そして、農場で収穫できる野菜を食べ、最後にスイカ割り。スイカは今年育てていたのだが、うまく育たず、農場で育てたものを使うことはできなかった。作物を育てることの大変さを痛感した出来事であった。

当日は、真夏ということでとても暑かった。今年、10 周年を迎えたということで、林部さんから 10 周年記念品としていただいたテントが大活躍だった。真夏の暑い時間に農場で活動。頭がおかしくなるのではないかと思った。しかし、子どもたちはすごい。休憩だよ、と言っても草とりをする手を止めない。何度言ってもやめずにもくもくと、ただ草がなくなることだけを目指し、汗をだらだらかきながら活動していた。私は、どうしてもその光景が忘れられない。草とりにこんなに夢中になれるんだ、とすごく感動したし、子どもたちの力にとても驚いた。しかし、これには学生スタッフの心がけがあったのだと、「草取りなど、子どもが進んで行うために、いかに楽しくできるか試してみました」（布山）、「草取りの時に、『競争しながらやろ！』と子どもに言ってから作業しました。意外とのりがよくて、作業がはかどりました。」（田澤）、「草取りで、草をむしらなくても、運ぶという仕事を見つけて一生懸命頑張っている子がいました。その子の役割というものを見つけてあげることも大切だと思いました。」（服部）というリフレクションを見て気がついた。そして、こんな暑い中で活動した後のスイカは、最高においしかった。さらに、ゆでたとれたてのとうもろこしも最高で、人生で初めて食べたソーメンかぼちゃもよかった。もぎたてのきゅうりやミニトマトもおいしかった。参加した学生も、「子どもたちの笑顔はホントにステキだと思いました。」（加瀬）、「子どもたちがとてもかわいかったです!!」（中村幸恵）、「子どもがとても元気でよかった。」（片桐）、「子どもたちが元気いっぱいでとても楽しかったです。」「子どもたちも元気いっぱいで、スイカや野菜をすごくおいしそうに食べていた姿が印象的でした。」（岡澤）と、子どもたちのことをよく見ていてくれて、子どもたちからパワーをもらっていた。「ぜひ、もっといろんな活動をさせてあげたいと思いました。」（太田）、「学校では味わえない自由な体験を、子どもたちが元気に行っていてよかった!!」（上田）などのリフレクションもいただき、これからも子どもたちとともに活動していきたいと思った。

第6回　9月26：稲刈り・はぜかけ

ここのところ毎回、茂菅でとれた野菜を収穫して食べるという活動が続いていたが、今回の

活動は、稲刈りのみ。ただひたすらに稲刈りをする。６月にみんなで田植えをし、学生スタッフが水のお世話をしたり、網張りをしたりして、お世話してきたお米だ。カマの説明をして、班ごと列を決め、いざ稲刈り。途中に休憩をはさんだものの、子どもたちは稲を刈って、束ねて、はぜかけをするというところまで、集中して活動できていた。予定していた範囲も時間どおりに終えることができた。

参加した学生は、「子どもにとっても、新鮮な活動のようで、みんな楽しそうに最後まで飽きることなく活動に参加していた。私自身も、子どもと一緒にやることで、また一段と楽しめた。」（片原）、「初めて活動に参加しましたが、子どもたちがすごく自由に動いていて、楽しそうにしている印象を受けました。学生スタッフも、それぞれがとても良く目配りをしていて、一人になっているような子もおらず、見習いたいと思いました。」（峯村）と、稲刈りだけという活動の中でも子どもだけでなく学生も楽しめたという指摘もあった。また、この稲刈りの活動を通して、「給食残したり、好き嫌いする子どもたちに、稲刈りみたいな体験をさせたらごはんの大切さに気付かせれるなって思った。」（西尾）と、学んでいた学生もいて、楽しみながら学ぶこともできる茂菅はいいなと思った。

第７回　10月17日：脱穀・さつまいも掘り

今年度最後の農場での活動…と、いうことで、学生スタッフがとてもたくさん来てくれ、賑やかな活動となった。学生スタッフが多すぎて、手持無沙汰になってしまう学生もいるかもしれないな、と少し不安を抱えていたが、実際は自分からやることを探してみんなが動いてくれたおかげで、機械や火を使った危険の多かった活動であったけど、とても楽しく事故なく、活動が出来たのだと思う。

さつまいも掘りでは、夢中になってさつまいもを掘る姿があった。予定していた時間内では終わらないほどだったが、「イモ掘りに意外と時間がかかっていたけど、農場で楽しく過ごせている様子が見られたので良かったと思います。」（小松）と、農場での最後の活動で子どもたちが、学生が、保護者さんが、楽しんでいた。脱穀では、機械の脱穀だけではなく、千羽こき、足踏み脱穀機の２つも持ってきて、子どもたちに昔の脱穀の仕方を体験してもらうような場を設けた。参加した学生も、「足踏み脱穀楽しかった。」（山越）、「脱穀が楽しかった！」（中村静香）と、率直に感想を述べた。また、「脱穀する機会は学生にとっても新鮮な活動で、子どものくいつきがすごかったように思います。目がキラキラだった。」（布山）と、学生だけでなく子どもたちも楽しんでいた。今回の活動でとったさつまいもは、農場でやきいもにして食べた。自分たちで育てたさつまいもだったので、「さつまいもを食べる子どもの笑顔がとても良かった。鼻の穴にさつまいもがつまるほど食べていた。」（田澤）、「さつまいもがおいしくてうれしかった。」（登内）と、子どもも学生もおいしく食べていた。この活動に来て、「子どもたちと楽しく活動が出来ました。保護者の方ともたくさんの話が出来てよかったです。」（島崎）、「この活動に参加することで、子どもたちだけでなく保護者の方々とおはなしする機会をたくさんいただけて、とても勉強になりました。」（町田）、「こんなにやきいもや脱穀が楽しかったのも初めてで、また参加したいです。」（井出愛香）と、それぞれに学んでいることがあるのだなと感じた。

第8回　11月28日：わらであそぼう

なわないの活動。この活動を企画しようと思ったのは、お米を収穫した時にできるわらをつかって何かできないか、と考えたからだった。なわないの方法は、まずは本から探し、実際にやってみて、土井先生に実際に教わり、子どもたちに自分たちで教えられるように練習した。今までなわないはやったことがなかった私たち学生にとっても、とても新鮮な活動だった。

なわないは、わらすぐり→わらうち→なわないという順番で行う。私たちはなわないに時間をとって企画していたのだが、実際の子どもたちは、わらすぐりやわらうちにとても興味を示した。そして、学生が教えながらのなわない。小さい子には少し難しかったかもしれないが、毎年茂菅に参加してくれている子どもにとっても初めての体験だったので、楽しめている子どももいた。そして、休憩の時間には、前回脱穀したお米を塩むすびにしてみんなで食べた。お米がつやつやで、みんな美味しそうに食べていた。子どもたちも、「もういっこいい？」と何度も聞いてきた程人気だった。休憩後には、みんなで作った縄を使って電車ごっこをした。校庭にでて、班ごと競争だ。子どもも学生も保護者も、みんな一緒になって走った。大学での活動で、いつもとは少し違った雰囲気だったけど、わらを使った活動が出来てよかったなと思う。なわないにはまった子どもたちもいて、余っていたわらを持ち帰って家でやる、という子もいた。初めて企画した活動だったけれど、なわに興味を示してくれた子どもたちが多かったことがうれしかった。

※11月28日：保護者懇親会

昨年もあった保護者懇親会を、今年は11月28日（土）の午後行うことにした。行うと決めたのは本当に急だったのにもかかわらず、6家庭の保護者さんに参加していただくことができ、本当にうれしかった。ここでは、普段私たちが企画している活動で、「子どもたちはどう思っているのか」ということを具体的に教えてもらえたすごくいい機会だった。農場に参加することで、「子どもの中にあるなにか1つの問題が解決されていた」り、「学生でしかできないことをしていたのだ」ということだったりを教えていただけたのは、「私たちが活動しているだけでは分からないこと」だったので、本当にうれしかった。やはり茂菅はすごいな、と改めて実感した場面でもあった。

第9回　12月12日：おもちつき

今年度最後の活動は「おもちつき」。杵と臼でつく。私たちも、家や学校で杵と臼でおもちをついたことはあるけれど、そこまでの準備をしたことがない。どんなふうについて、どんなふうに食べようか、最後だからいつもより活動時間を延ばそうか…いつも以上に企画をするのが大変だった。おもちつきの練習もした。

当日、おもちをつく班、きなこやごま、大根おろし、納豆を作る班に分かれて活動が行われた。おもちは全部で4升。子どもたちがだいたいどれくらい食べるのか予想できなくて、余ったら学生が食べようと決意して行ったのだが、当日はなんと4升があっという間になくなってしまった。私たちの予想をはるかに超える食べっぷりだった。きなこは自分たちで作った大豆から作り（昔ながらの石臼でひくものと、ミキサーでひく方法を用意した。これが用意できたのは宮尾君のおかげだった。）、あんこは信大茂菅農業義塾で活動している小野塚さんからいただいた。また、大根は信州大岡ふるさとランドからいただいたものだった。

最後に１年間参加してくれた子どもたちに感謝の気持ちを込めて、今まで活動の最後に書いてきた絵日記風のリフレクションシートをまとめ、渡した。また、茂菅の１年を振り返るDVD も作成した。１年間の活動の中で、子どもの成長を肌で感じることができ、とてもうれしかった。子どもたちは自分たちで育てたものを食べるとき、こぼれるような笑顔で、「おいしい！」と言っている。そんな姿に今回のおもちつきの活動でも出会えることができた。１年間事故なく、楽しく活動できて本当によかった。

◇実践から得た「臨床の知」

かけがえのない私の１年間

飯島理沙（理数科学教育専攻３年）

大学２年生の 12 月。「信大 YOU 遊世間」の引き継ぎの話が来た。今までの大学生活をそのまま送っていたら、大学を卒業した時に何も残らないと思っていた時のことだった。また、茂菅は憧れの先輩が農場長をしていたこともあり、来年は茂菅に関わっていきたいなと思っていた。いろんな思いがつまって、茂菅をやる、と決めた。そして、鈴木さんと藤田君と誰が農場長をやるのかという話し合いをした。茂菅をやりたいという気持ちは３人とも一緒。誰がやってもよかった。そんな中で私は農場長になり、茂菅の１年が始まった。

４月の活動。いよいよ始まる。「うまく出来るのかな」、「声通るかな」、「集まってきた子どもたちは私の話聞いてくれるかな」…。自分のことで、いっぱいいっぱいだった。とにかく、スムーズに活動が進むように、戸惑っている班がないように、ずっと必死だった。５月、６月と回を重ねていっても、不安はなくなったものの、必死さは変わらなかった。

８月の初め、鈴木さんと藤田君と、茂菅のことで話をしたことがあった。私はずっと、学生スタッフにどう接したらいいかとても迷っていた。なんとなく私の中で、「来てもらっている」という感じがあった。「準備や片づけをさせてしまっては申し訳ない」、「活動が終わったらすぐに帰ってもらった方がいいのではないか」…。４回の活動を重ねて思ってきたことだった。しかし、鈴木さんは、「学生スタッフは来たくて来てるんじゃないの。私は茂菅で活動しているとすごく楽しいから、みんなに来てほしくて誘ってるんだよ」と、言った。正直、この気持ちがうらやましかった。今までの私は、自分に必死すぎて楽しむことを忘れていた。そこから、「どうしたら楽しめるのか」…考え始めた。私はどんなときに「楽しい」と感じるのか…そんなことまで考えた。そしたら、いままでの必死さは、回を重ねるにつれ薄れていった。子どもたちと向き合って触れ合える時間も増えていった。

１年を終えた今、この１年間を振り返ってみると、「楽しかった」と自信をもって言える。それはもしかしたら、「充実していた」ということと同じなのかもしれない。「楽しい」と感じなかった初めの頃さえも、「楽しかった」と、今なら言える。それは、私が今できる全てを茂菅にかけたからだったと思う。今できること全てを一つのことにかけられることは、そうできるものではない。本当に幸せな１年間だったと思う。子どもが好きで、茂菅の雰囲気が好きで、あの農場で笑顔の子どもたちが見たくて、大変なことも頑張ると決めて駆け抜けてきた１年。この１年は、「一生の宝物」になると確信している。

最後に、いつもそばで支えてくれた鈴木さんと藤田君に、本当に感謝の気持ちでいっぱいだということを伝えたい。私が気付かないところにも気付く鈴木さん、どんなことでも嫌な顔せ

ず動いてくれる藤田君、そんな２人と共に活動できて本当にうれしかった。土井先生は、私たちがどんな活動を企画してもいつも温かく見守ってくださり、問題が起こればいつも相談に乗ってくださった。こんなに心強いことはなかった。私たちが好きなように活動し通せたのは、土井先生のおかげだと思っている。そして、林部さんはいつでもどんなときでも、私たち学生がやりたいことができるよう力をかしてくださった。林部さんがおられなければ、この活動はできなかった。JA ながのの小池さんには、私たちのわがままを本当に聞いてくださり、アドバイスもしていただいた。小池さんと活動を一緒にすることができてうれしかった。参加してくださった全ての学生スタッフには、本当に力を貸していただいた。スタッフがいなかったら、私たちが「こうしたい」という毎回の願いをかなえることは不可能だった。準備も片付けも何一つ嫌な顔せず、むしろ、「手伝わせて！」と言ってくれて、本当に助かった。私にこんなに素晴らしい経験をさせてくださった、茂菅の活動に参加してくださった全ての方に感謝をしたい。今年は、茂菅の活動だけでなく、10 周年記念式典の運営もさせていただいたが、その全ての活動をすることで、私は人生の宝物をまた１つ得ることができた。１つのものをやり通す楽しさや、人に感謝する心を学ぶことができた。本気になって活動してきて、本当によかったと思う。

１年間、本当にありがとうございました。

茂菅が与えてくれたもの

鈴木祐香（理数科学教育専攻３年）

私は、この１年間茂菅の農場で活動してきた中で、多くのことを感じ、また多くのことを学ばせてもらった。その中でも、特に感じたことが２つあるので、そのことについて書きたいと思う。

一つ目は、農業を通して関わるということの凄さである。私は、小学校時代を含めてこれまでに農業をするという経験は皆無に等しかった。正直言えば、今年１年この「信大茂菅ふるさと農場」に関わっていこうと決めたのも、農業が好きだからという訳でもなかった。もすげのなんともいえない雰囲気の魅力に圧倒されたことと、今までにやったことがなかったという新鮮さに憧れたというのが正直な気持ちだったのかもしれない。そのため、活動が始まる４月当初、農業がこんなにも凄い力を持っているなんて予想もしていなかった。自分たちの手で野菜やお米を育てることの大変さを味わうこと、収穫の喜びを味わうこと、それが何にも変えがたい経験になるのだろうとは思っていた。しかし、農業が与えてくれたことは、それだけではなかったのだ。４月、５月、６月、７月と活動の回数を重ねていく中で、徐々に感じ始めたことがある。それは、子ども・学生・保護者・地域の方との“一体感”である。なぜこのような一体感が生まれたのだろうか。その理由は、農業をするということにある。農業をするということにおいては、子どもも大人も関係がないのではないかと思う。もすげの農場に集う一人一人が、一人の人間として存在し、その中で農業活動を共にしてきたからこそ、この一体感が得られたのだと感じる。こちらから働きかけたわけでもなく、自然と触れ合う子どもたちの姿、一緒に汗を流しながら作業をする保護者さんの姿、収穫した野菜をおいしそうに食べるみんなの笑顔、そのすべてがこのことを物語っている。

２つ目は、「できそうにないからやらない」のではなく、「できそうにないけどやってみる」

ということの大切さである。それは、決してなんでもかんでも無謀なことに挑戦するという意味ではない。もすげの活動を企画運営する中で、認めたくない自分自身の姿というのがあった。それは、「できそうにないことはやろうとしない」という後ろ向きな姿勢である。なにか困難な問題が立ちはだかった時に、「大丈夫、できるはず」と口では言いつつも、「やはり無理なのかな」と心の中では逃げていることが多かったのではないかと思う。しかし、この1年間もすげの企画運営をしていく中で、「できないからやらない」のではなくて、「できないかもしれないけどやってみよう」という思いが本当に大切であると感じた。当初から私がやりたいと言っていた、草木染めがいい例である。やりたいとはいったものの草木染めの方法を調べてみたら、かなりの時間を要するということが分かった。その時の私の心には、「もすげの活動時間の中で草木染めをすることは、やはり無理なのかな」というものであった。しかし、どうしても草木染めをやりたいという思いは消えなかった。そのため、家庭科の先生の協力を得て何度も練習させてもらい、活動の中に取り入れることができたのだ。他の人にとっては、草木染めをしたというただそれだけのことかもしれないが、私にとっては大きなことであった。「できないかもしれない」と不安に思っていたことが、できたことの嬉しさは忘れない。そして、やってみなくては、できるかできないかなんて分からない。“できそうにないから、そこで諦めてやらないのではなく、できないかもしれないけど、できるように最善を尽くすこと”。これは、私が1年間もすげに関わってきたことで得た大きな学びの一つである。

「もすげ体操」と私

藤田裕介（社会科学教育専攻3年）

私は今年度と昨年度、合わせて2回、「もすげ体操」の作成に携わりました。昨年度は副農場長と友人とで作成し、今年度は私一人で作成することになりました。昨年度の「もすげ体操」は、屈伸や跳躍、関節を伸ばすといった準備運動を農作業に見立てて行えるよう考えていきました。鍬で畑を耕す、種を植える、大きくなるようおまじないをする、生えてきた芽が大きくなる、実る野菜を表現する、収穫する、喜びをみんなで分かち合う、という農作業を体操に取り入れ、「いちに、モスモス、にぃに、モスモス、さんに、モスモス、よんに、モスゲ！」という掛け声とともに体操を行い、体をほぐしていきました。

今年度の「もすげ体操」は、今年から歌うことになった「もすげ農場の歌」に合わせてできる体操を目指し、作成していきました。屈伸や関節を伸ばすことができる動きを歌詞を参考に考え、歌に合わせて体操ができるようにしていきました。歌詞の中には生き物や自然、収穫した野菜などが出て来ます。その歌詞を体で表現する時に、体操と同じ効果が得られるのではないかと思ったのです。しかし、今年から歌うことになった「もすげ農場の歌」と新しく作成した「もすげ体操」、月に1度の活動だけで2つのことを覚えることは子どもたちにとってとても難しいことでした。子どもたちの間に浸透させていくことができず、意識も向いていない状態であったため、体操としての機能をしっかりと果たしていなかったと思います。また、歌に合わせてできるようにするということに固執してしまい、体操本来の目的である「十分に体をほぐす」ということができず、踊りのようになってしまいました。保護者の方からも似たような意見をいただきました。このことから、「どんなことをするにしろ物事の本来の目的を見失うことがないように目的を常に意識して行動していかなければいけない」と、いうことに改め

て気付くことができました。この経験を無駄にせず、今後の活動に活かしていこうと思います。

おそらく、今回で「もすげ体操」の作成に携わることは最後となります。次代の農場長、副農場長がどのような「もすげ体操」を作っていくのか、とても楽しみにしています。

◇地域協力者からの評価

「信大茂菅ふるさと農場」10周年に思う

農業　林部信造

1．はじめに

10 周年を迎えた「信大茂菅ふるさと農場」の記念事業として、講演会、祝賀会が土井先生はじめ、実行委員の皆さんの企画により、平成 21 年 10 月 10 日、信大教育学部に於いて盛大に開催されました。

会場には信大教育学部長先生はじめ、JA、地主さん等、大勢の皆さんが参加されました。特に歴代農場にたずさわり、開墾から稲作り、野菜作りに汗を流し、現在教員として、社会人として県内外で活躍されている大勢の先輩の皆さんの、ご出席をいただき、それぞれ久しぶりの再会に談笑が続く。私達も、当時をしのびながら、今は社会人として、それぞれの風格を持ち、立派になられた姿に接し、大変うれしく頼もしく感じられました。これも土井先生のご指導のもと、「ふるさと農場」で培った大きな力であると思います。また結婚し、お子様と同席された同志の皆さんの参加は、この農場ならではのほほえましい姿であり、10 周年にふさわしい記念事業となり心からお喜び申し上げます。

私も期しくも 80 歳の傘寿と重なり家内ともどもお招きいただき、身に余る御言葉と記念品を賜り心から感謝申し上げ、厚く御礼申し上げます。

10 年間元気に「ふるさと農場」に携わることができたのも、土井先生はじめ、学生の皆さん、JA のご指導や参加された大勢の子供達との楽しい出会いと交流があり、共に作る育てるの楽しさを味わい、たくさんのパワーをいただいたおかげと思います。

これからも「ふるさと農場」の「土づくりは人づくり」の理念を守り、記念事業として開設した「信大茂菅農業義塾」も共に一歩一歩確実に前進することを願っています。

2．農場との出会い

職場も定年退職し、第２の職場も 65 歳で退任、町の公職も 70 歳で総て終わり、後は残された余生を気楽に好きな事に生き甲斐を求め、楽しみをあれこれと計画をしていた折の平成 12 年、信大の土井先生、JA の北村さん（営農技術員）、学生の杉山さんがお見えになり、茂菅に教育学部の学生の皆さんによる実体験農場を開設したいとのこと、地元農家としての協力依頼がありましたが、高齢、大学生の皆さんとの交流、我が家の農作業、更なる過重労働、農場に対する知識には自信が無いことを考えて、ご辞退いたしました。お話が進む中で、

イ）学生の皆さんには学問は知識だけでなく体で覚え、知ることが大切であり、体験農場として開設したい。

ロ）学生の皆さんの自主的な協同の活動の場として、企画、立案、実践はすべて行う。

ハ）休耕田、耕作放棄地を復元することにより、開拓魂を養い、労働の尊さを学び、人間形成を計る。

ニ）自然とのふれ合い、土とのふれ合い、作物を育てることを体験し、良い教師、社会人と

して成長することを願っている。

以上のようなお話から、及ばずながら協力の約束をして今日に至りました。

今、私が元気でいられるのは、すばらしい出会いと、学生の皆さんからいただいたパワーのお陰と感謝しています。

3.「ふるさと農場」の特徴

この農場は学生の皆さんの課外活動として自主的に運営管理され、実践を通じて自ら学び育てる体験農場です。また、子供達への農業体験を受け入れ、食と農の理解を深める実践農場でもあります。農場長は立候補制で民主的に運営、管理され、農場に携わる教育学部のスタッフの皆さんが農という未知の世界に飛び込み、苦を伴う肉体労働に挑戦し、汗を流し、土に親しむ。これらによって培われる強い忍耐力と情熱が、農場の伝統として 10 年間引き継がれてきた由縁ではないでしょうか。

教職を目指す学生の皆さんには、良い教場であり、育てるということは人も植物も同じです。手ぬきせず愛をもって育てれば総て豊作となり、人もまた、感性豊かな人となる。学生の皆さんの一人でも多くの参加を望みます。

4. りんご作りと交流

りんご園には、現在、50 年以上の老木と更新による３年～７年生の幼木が混植されています。その中で労働の配分上、中世種の秋映、陽光、シナノゴールド（９月下旬～10 月下旬収穫）と晩生種のサンふじ（10 月下旬～11 月下旬収穫）の４種類を 15 アール栽培し、それぞれの味覚を持ち、順次収穫されます。これに伴う農作業も順次始まり、１月の剪定から消毒、花つみ、授粉、摘果、葉つみ、玉まわし、主柱立て、収穫へと進みます。色づいたりんごを１個１個取る喜びは、格別です。

また、「信大茂菅ふるさと農場」の出会いから交流が深まり、学生の皆さんの好意により、「あっぷるず」が誕生し、学生の皆さんが都合できる日程、時間帯でお手伝いをしていただいています。心から感謝とお礼を申し上げます。

これからも「信大茂菅ふるさと農場」を通して、若い皆さんのエネルギーをいただきながら健康に留意し、終生現役であることを願っています。

「茂菅ふるさと農場」の活動について

JA ながの営農指導部　**小池　健**

「信大茂菅ふるさと農場」10 周年という記念の年に、「茂菅ふるさと農場」の活動をお手伝いさせていただきました。私にとって「ふるさと農場」にどのように取り組んでいくのか全くわからない中のスタートでありましたが、土井先生をはじめ、正副農場長、そして地元協力者の林部さん等の話を聞く中で、活動に取り組むことができました。活動が始まるまでは１年間の活動スケジュールを見て様々な取り組みが毎月あり、全てが順調にできるのか不安がありましたが、活動が全て終わった今に至っては全くの取り越し苦労であったと感じています。悪天候などにより計画していた全ての活動が実施できたわけではありませんが、それを差し引いても、飯島農場長をはじめとした信大スタッフの皆さんの熱意と努力により、最後まで取り組みできたのだと実感しています。

「ふるさと農場」での毎月の活動では、信大スタッフが当日の活動内容について子どもたち

に身振り手振りで説明したり、絵を用いたり、時には寸劇だったりと様々な手法で説明しており、信大スタッフ皆さんの発想力の豊かさと創意工夫に感心しました。子どもたちは、ジャガイモやトウモロコシの種まきや田植えなどを信大スタッフとともに実際に行い、泥だらけになりながらも笑顔で楽しそうに参加していました。こうした活動の度に、農場の野菜は大きく生長し様子が変わっていきます。その中で、子どもたちは自分たちが植えた野菜を見て喜んだり、保護者の方も一緒に楽しそうにしていたことが印象的でした。

今年度は天候不順により水稲の生育が悪く、お米の収穫量は多くはありませんでしたが、農業は天候や病害虫との戦いなのだと感じることができたのではないでしょうか。私は JA に身をおいていますので、作物の収量だとか品質に目が行きがちですが、「ふるさと農場」では、農業を体験すると共に、土の感触や水の冷たさ、農場の生き物など、自然とのふれあい、人と人とのつながりに主点がおかれてとても新鮮に感じました。こうした中で、これから教職に就かれる学生の皆さんのより良い感性が醸成されていくのだと感じました。

最後に過日、「信大茂菅ふるさと農場 10 周年記念式典」では、10 代目のスタッフをはじめ、これまで農場に携わられた大勢の方々がみえられ盛大に開催されました。林部さんの記念講演では、農場の開墾から現在に至るまでの様々なお話を聞くことができました。10 年間という長きにわたり農場が続いて来たことは、ひとえに土井先生の熱意と歴代信大スタッフの情熱、そして林部さんのバックアップによるものであると、あらためて「茂菅ふるさと農場」の「絆」の大きさと深さを知ることができました。このような「信大茂菅ふるさと農場」に私自身携わることができましたことに感謝するとともに、笑顔あふれる農場の活動に、来年度も微力ながらもお手伝いしたいと思います。

卒業生 21 名に問う　2009 (平成 21). 10. 10

「アンケート調査」にみる「信大茂菅ふるさと農場」

問う、その１：学生時代に「信大茂菅ふるさと農場」で学んだことは何ですか。

問う、その２：そのことが、「現在の教育実践」にどのように生きていますか。

土　井　　進

「信大茂菅ふるさと農場」10 周年記念式典〔平成 21 年 10 月 10 日（土）開催〕には、卒業生 21 名をはじめ、70 名の関係者の出席があった。

出席した卒業生に対し、「学生時代に信大茂菅ふるさと農場で学んだことは何か。」、また、「そのことが現在の教育実践にどのように生きているか。」について、〈自由記述のアンケート調査〉を行い、この調査結果から、学生時代の農作業体験のもつ教師教育上の意義を考察してみた。

1．アンケート調査（自由記述）

卒業生 21 名の振り返りは、以下のとおりであった。

① 「教員になって早速低学年を担当し、畑で野菜を育てる活動を始めました。子どもたち

が育ててみたい、と言った野菜は育てにくい面や難しい面がありましたが、何とかして実行しようという気持ちが持てたこと。1年間農作業の授業を続けられたことは、学生の頃の経験のお陰です。」（小学校教諭）

② 「子どもたちだけでなく、学生同士や林部さんをはじめとする地域の方々との交流でコミュニケーションの大切さを学ぶことができた。今ではなかなかできない農業体験は本当に貴重な経験でした。」（小学校教諭）

③ 「世代を越えた交流の大切さ。多様な世代が集う茂菅農場だからこそ多様な学びが生まれるのだと思います。農場では決断力、判断力、自分を相手や自然に合わせることの大切さ。自分勝手では農作業はできないことを学生時代に学びました。このことは、今学校において同じです。常に決断力、判断力が必要とされます。その時、教師の勝手ではなく生徒の立場に立って考えることが大切です。人づくりは土づくりと同じだなあとつくづく感じています。生徒と一歩一歩共に歩んで行きたいと思います。頑張っていきます。」（中学校教諭）

④ 「農場からも多くのことを学びましたが、林部さんより農業をするということの素晴らしさ、地域と手を取り合い、学生と地域の人がつながれるということを学びました。農業を通して苦労した先にある子どもたちや学生の笑顔が今でも忘れられません。

生活や総合で農業を行うときも、ただやるのではなく、学生時代の発想を生かした導入の工夫、作物との出会わせ方を考えています。また、地域の方にも積極的に声をかけ、たくさん知恵をいただき、共に学んでいます。」（小学校教諭）

⑤ 「農作業は人と力を合わせないとできないし、人と力をあわせてやると楽しいということ。給食のときなどでは、食べ物の大切さを熱意をもって指導できています。」（小学校教諭）

⑥ 「子どもたちと一緒に農業をしていくことは、初めての経験でした。子どもたちがどのように農業と関わっていくのかをみることができたことが学んだことです。また、地域の方や保護者、学生、先生と出会ったことが今の自分に生きていると思いました。来年から小学校の教員になるので、そこから生きてくると思います。」（中学校講師）

⑦ 「人と人とのつながりが一番大きいと思います。茂菅で多くの地域の方に学び、話をしました。学校に勤めてからも地域の方との関わりを大切にして学んでいます。また、農業から学んだ何事にもチャレンジしていく精神を大切にして、教材研究や子どものとらえに生かしています。（小学校教諭）

⑧ 「今思えば反省ばかりですが、何でも一生懸命に頑張れば助けてくれる人がいることを学びました。このことから、新しいことに挑戦していく姿勢を大切にしています。職場の中堅となり若い教員の挑戦する姿勢を受け止め、支えていくことの大切さを感じています。」（幼稚園教諭）

⑨ 「1年間、自分が農場長として活動させていただいた事すべてが学びでした。それまでには味わったことのないような仲間たちとの関わりの大切さ、ありがたさなどです。そして、体を動かして子どもたちと農作業をすることで、人間関係が広がり、自分の人生がとても豊かになったと思います。年代を越えたつながりができたことは、自分にとってのとても大きな学びの一つになりました。

子どもたちとの関わり方が自分の中にあるので、生徒指導主任としてのたくさんの子ど

もたちとの関わり方に生きていると思います。また、基本的な田んぼの作業は分かるので、５年生の田んぼではいろいろな作業ができました。アイガモ農法や田鯉を飼うなどの応用もできました。」（小学校教諭）

⑩「農作業では一つ一つ手をかけてこそ美味しい作物ができるのだと学びました。教育においても一人ひとりと丁寧に向き合って、心を寄せていくことが大事であると思います。そんな教育ができたらいいなと思っています。」（小学校教諭）

⑪「農作業に関する知識や技能を学びましたが、それ以上に大きかったことは、何かをやろうと考えたときに、何をどう進めていくのか、たくさんのアイデアを出し合いながら仲間と協力したことです。

簡単なことですが、畝の作り方、サツマイモの苗の植え方を経験していたので直ぐに対応できましたが、きっと初めて教える立場になったら困ったと思います。」（小学校教諭）

⑫「農は人づくり、を実感できた。これまで農業体験のない人生を送っていたので、とても助かった。子どもたちと一緒に畑を耕す大変さ、それを喜びとするプロセスの大切さ等を実感している。昨年作った落花生の種から今年も落花生に挑戦している。」（小学校教諭）

⑬「野菜、お米、子どもたちとの関わり、そして、林部さん、土井先生をはじめとした協力してくださる方々との関わり、仲間との関わり。どれもすてきな出会いでした。

今の生活の中でも出会い、関わりを大切にすることにつながっています。新しく切り開いていく力が知らないうちにものすごく身に付いていました。先生が茂菅農場を開拓したねらいはそこだったのですね、今日気づきました。」（小学校教諭）

⑭「自分で考えて計画を立てる。子どもたちの反応を想像して何をどのようにしたら楽しくまなべるかなどの考える力。子どもたち、地域の方と活動できたことで新しい人間関係を築くことができたと思います。多くの学生や子どもたちとの出会い、地域の方との出会いから、一緒にいることで仲間との信頼関係、助け合いの精神、チャレンジするエネルギーを学んだ。」（小学校教諭）

⑮「みんなで関わる楽しさ、よき仲間に出会うことができました。直接企画を立てて実践したわけではありませんが、農場に参加し、子どもにどう接するのがよいのか、安全についても考えることができました。植物を育てることは無心になり夢中になることができる楽しさがあると思います。それに気付き、今では家で野菜栽培をしています。

自分では実感がないのですが、子どもを引きつける力があると多の先生に言われます。きっと信大茂菅ふるさと農場の活動の賜物かと思っています。」（小学校教諭）

⑯「農作業では事前の準備が大切であることを学びました。今、お米づくりを授業でやっています。直接、学生時代の経験が生きていると感じています。事前準備の大切さは日々感じています。」（小学校教諭）

⑰「農場にいたからこそ、学生時代に地域の方、子ども、保護者などいろんな方と出会うことができました。私の中で、いろんな方と出会い、関わり方を学んだことが、今一番生きていると思います。教師になってからも保護者や地域の方とすっとなじむことができました。大学の教育実習では子どもとの出会いは学べますが、保護者や地域の方と出会う機会はないので。」（小学校教諭）

⑱「人の温かさ、つながることの大切さを学びました。一人では決してできないことも仲

間や温かく見守ってくださる方がいるからこそできる。また、そこに来て下さる人がいるからこそつながっていきたいという思いになり、力になるのだと思いました。農場という場が社交場となり、自分の出次第でつながれる、温かいところと感じられた。そのことが今でもどんな場でも人の温かさを感じることのできる私になれたと感じています。

子どもとの関わり方だけでなく、農作業の一つ一つが今に生きています。多くのいろんな年、いろんな子との関わりがあり、クラス一人一人の個性への対応も落ち着いてみることができる自分があると思います。まだまだの私ですが、茂菅での経験とそこで出会えた方の存在そのものが今の私の支えです。」(小学校教諭)

⑲ 「活動を通して仲間や支えて下さる多くの人とのつながりをとても感じました。自分一人よりも仲間と共に活動することで楽しさも喜びも倍になり、辛さや苦しみを分け合うことを何度も活動を通して実感しました。

色々ありますが、まずは行動してみる。考えるだけでなく体を動かして行動することが生きています。日々多くのことを学んでいます。」(小学校教諭)

⑳ 「農場で学んだことは、仲間です。苦労と思いやりです。この２点は今も大切にしています。農場での経験や林部さんのお話の中で学ばせていただきました。」(小学校教諭)

㉑ 「新しいことに勇気を持って挑戦すること。友と協力すること。よい仲間ができたこと。後輩に伝えること。大人との接し方。あいさつ。自ら出ていくこと。そして、林部さんご夫妻から温かい夫婦の在り方、人への愛の注ぎ方を教えていただきました。

現在生きて働いていることは、A がだめでも B ならどうだ！！とアイデアを出してみること。人前で話をすること（下手ですが)。楽しさの中から学ぶこと。」(中学校講師)

2．考　察 ― 「信大茂菅ふるさと農場」の教師教育上の意義 ―

卒業生 21 名が異口同音に述べたことは、次の４点にまとめられるであろう。

① 自発的な農作業体験を通して、新しいことに挑戦していく力を身につけている。

② 仲間と協力することによって課題を成し遂げる楽しさを味わい、掛け替えのない仲間を得ている。

③ 地域の人々とのふれあいを通して、視野の拡大を図るとともに、人としての生き方について深く学んでいる。

④ 異年齢の子どもや保護者、地域の方と関わることによって、コミュニケーション力を身につけている。

「信大茂菅ふるさと農場」において、「土づくり」を通して上述のような貴重な「人づくり」の成果が見られるようになってきた。今後さらに一層、教材開発に務めていきたい。

信大茂菅農業義塾（1年目）

プラザ長　肥野沙也加（野外教育専攻３年）
副プラザ長　飯村　昌史（大学院臨床心理学専修２年）
藤田　裕介（社会科学教育専攻３年）

○学生協力スタッフ

信大茂菅ふるさと農場スタッフ　　YOU 遊世間スタッフ

○参加者

小野塚敏枝さん（ふるさと農場への参加、小豆の栽培など）
塩入幸夫さん（とうもろこし・枝豆の栽培）
宮脇博子さん（チョウの研究に関わる植物栽培）
橋本政晴先生ご家族（ふるさと農場への参加、さつまいもの栽培など）
山本亮介先生ご家族（ふるさと農場への参加、さつまいもの栽培など）

○連携団体

信大茂菅ふるさと農場　長野市農業公社　JA ながの

○後援

長野県教育委員会　長野市教育委員会

○協力

長野市茂菅地区農家　林部信造さん
中央児童相談所　宮澤秀一さん
長野市教育委員会　髙野直樹さん

○プラザの概要

1．不登校で悩んでいる子どもと親御さん、定年退職されたご年配の方々、学生が農業を通して交流し、お互いの背景を活かしながら温かい居場所をつくる。
2．土と触れ合うことによって自然とのつながりに気づき、生きることへの意欲や喜びを感じる。

不登校で悩む子どもが参加する活動として始まったため、活動日は設定せず、参加者に委ねた自由活動で一年間行ってきた。なお、地域から参加していただいた皆さんの活動については、上記のとおりです。

◇実践から得た「臨床の知」

はじめるということ

肥野沙也加（野外教育専攻３年）

私がこの一年間、「信大茂菅農業義塾」と関わって最も強く感じたのは、自分の小ささ・社会で生きていくことの大変さです。今年度から始まった義塾は不登校で悩む子どもと定年退職されたご年配の方が主役の活動という主旨はありましたが、どんな活動にすれば良いのか、どんなふうに参加者を集めれば良いのか、悩み続けて結局、納得のいくかたちをつくることができぬまま初年を終えてしまいました。振り返ってみると、失敗や反省ばかりです。

まず動き出した段階では、わかりやすい配布資料を作成し、長野市に８つある中間教室（学校へ行けなかったり行きにくくなっている子どもが通う教室）へ郵送しました。温かみを出すために手書きにしたり、色を塗ったりと工夫を凝らしました。しかし、その配布資料が中間教室から親御さんの手に渡ることはなかったそうです。きっと、私の勉強不足が原因でしょう。当時の私は「こんな活動にしていくんだ」という願いのほうが先走ってしまい、不登校で悩んでいる子どもや親御さんの立場を深く考えていなかったように思います。

◇参加者の声

「信大茂菅農業義塾」・「ふるさと農場」に関わって

小野塚敏枝

農家に生まれたにも関わらず、つい最近まで農業ということに関心を持たず、実家からもらう野菜・果物を感謝して食卓にのせていなかった私ですが、この４～５年、自分で作るということはなんとぜいたくなことかと思うようになりました。また、子どもというのは社会の子どもだという気持ちから、都合よく、「農業義塾」・「ふるさと農場」のことを知り、参加しました。理想的な一年間でした。

小豆を作りましたが、「ふるさと農場」の最後のおもちつきの時に“あんこ”にして皆さんに提供でき、喜んでいただけたようです。来年度は小豆の量を増やして、全量提供できたらと思っています。

また、作業の時、子どもさんを預からせてもらったのですが、その成長ぶりをそばで実感できたのも理想的でした。昔は、近所の子をお子守しましたよ。最初は人見知りをしていた子が、なついてくれて本当にかわいかったです。

いつか小豆の他に綿（わた）なども作り、紡いで糸にして織るということも、子どもたちとやってみたいですね。

楽しく、充実した「農業義塾」・「ふるさと農場」でした。皆様に感謝しています。

あっぷるず（10年目）

リーダー　宮川はるな（言語教育専攻４年）

○学生スタッフ名

宮川はるな（言４）	見村　友里（言４）	唐木　　希（社４）	小川　　彩（生４）
小池　沙知（生４）	中川　　茜（生４）	髙池　亮輔（保４）	布山　朋和（実３）
藤田　裕介（社３）	飯島　理沙（理３）	鈴木　祐香（理３）	西尾　聡美（理３）
早川　和宏（理３）	阿部　由季（芸３）	島崎　涼子（芸３）	中村　恵理（芸３）
東野　千尋（芸３）	肥野沙也加（地３）	田澤　岳哉（理２）	土屋　克明（理２）
峯村　和裕（理２）	松井　　遥（地２）	竹中麻由子（生２）	井出　愛香（実１）
町田　香帆（実１）	池田　彩井（ＯＧ）	落合　静香（ＯＧ）	

○参加者数

地域協力者２名　　学生 25 名　　卒業生２名

○連携団体

地域協力者：林部信造・幸子ご夫妻

○「あっぷるず」成立にあたって

茂菅地区で活動するもう一つのプラザ「信大茂菅ふるさと農場」を通して、地域のりんご農家である林部さんと交流を持つようになる。次第にお宅のお手伝いをするようになり、数年前には「林部農園支援隊」として活動する。「あっぷるず」という名で親しまれるようになったのは、ごく最近である。

○プラザの概要

林部さんのお手伝いをする。これをモットーとして活動するのが「あっぷるず」である。ただ、この「お手伝い」というのが、じつに幅広い。「あっぷるず」というプラザ名からもわかるとおり、基本的には、林部さんの所有するりんご畑で活動する。しかし、あるときは檀田地区にある田んぼで活動し、またあるときは庭で池掃除をする。先に挙げたモットーに則っていれば何でもしてしまうのが「あっぷるず」なのである。

近年は、「信大茂菅ふるさと農場」で農場長を務めた学生が、翌年「あっぷるず」の長を務めるというスタイルが定着している。活動日は、林部さんと連絡を取り合っておよそ１か月単位で決めていく。学生は、授業との兼ね合いやスケジュールを考慮して、自分のあいている時に好きなだけ参加する。参加者は学生のみである。

○年間活動内容

【りんご】

４・５月	…	花摘み（摘花）
６月	…	摘果、枝柱たて
10月	…	葉摘み
11月	…	玉まわし
11・12月	…	収穫

【お米】

４／26（日）	…	すじまき
５／30（土）	…	田植え
７／17（金）	…	あぜ草片づけ
７／19（日）	…	網はり
９／20（日）、21（月）	…	稲刈り
10／12（月）	…	脱穀

【その他】

池掃除、薪割り、桃の袋かけ、障子貼り、野沢菜漬け、餅つき etc.

◇実践から得た「臨床の知」

等身大のあっぷるず ～スタッフの声から～

宮川はるな（言語教育専攻４年）

「あっぷるず」…それは、とても一言で語ることはできないものである。

私自身、活動を通して感じたことは山ほどある。それでは、活動に参加してくれたスタッフのみんなは、どのような思いで活動していたのだろうか。また、活動を通してどのようなことを感じたのだろうか。このことが気になった私は、今年度参加してくれたスタッフにメールを送ることにした。

「あっぷるず」とは何か。その等身大の姿を、ここに見ることができる。

※以下、スタッフからのメールを原文のまま引用。誤字レベルの推敲あり。

※順番は、前記の【学生スタッフ名】の順による。但し、返信があったスタッフのみ掲載。

※質問項目は以下の３点とした。なお、回答形式には個人差があったが、そのままにしておいた。

活動に参加したスタッフのストレートな言葉に、「あっぷるず」に対する思いを感じてもらいたい。

【質問項目】

① 学んだこと、感じたこと

② 林部さんへの思い

③ 『あっぷるず』の魅力

◆見村友里

① あっぷるずはりんごを育てながら、林部さんご夫妻とも触れ合えるという二つの楽しみがありました。りんごといえばこれまで食べる一方でしたが、実際作ってみることで農家の方の思いや食育の意義も考えることができました。林部さんご夫妻は本当に素晴らしい方で、この先も繋がっていたいと思いました。

② 林部さんご夫妻の温かいもてなしがとても嬉しかったです。初対面でも明るく優しく接して下さって、林部さんのお家に行くといつも元気をもらえました。一人暮らしをしていると、なかなか年代が上の方や地域の方と触れ合う機会がないので、林部さんとの時間は本当に有意義なものでした。

③ りんごを育てるという経験は滅多に出来るものではありません。農地とりんごの木と、何より育て方を教えて下さる方が必要です。あっぷるずに参加させてもらい、りんごを育てるという貴重な経験をさせてもらいました。故郷長野の名産を自分で作ることで、故郷の良さを感じることが出来ました。

◆唐木　希

① 初めてやった作業だったので、楽しかったです。丁寧な作業をやらなければ実らないことを知りました。自然に私たちは生かされていて、それをつなぐ人がいるから私たちは食べていけると感じました。

② 初めてお会いしても、すごく優しく温かく接していただきました。人生の先輩というかんじがしました。

③ やることが新鮮。交流がもてる。あたたかい。

◆中川　茜

① 普段自分の生活がどれほど生命力の宿ってないものかということを思いました。りんごの木はいろんな表情を持ってて葉っぱ・実の色とか様子はどんどん変わってってる。枝は毎年ぐんぐんのびてく。お世話をしていく中ですぐに感じました。あぁこんなに日々変化してるんだ？作業をしていたら鳥の鳴き声が聞こえたり、風の涼しさを感じたり、太陽の照りつけるじりじりとした感覚を味わったり、体を通した発見の連続でほんとにおもしろい！！でも普段自分たちはテレビとか携帯とか見てて単調。それに比べ自然はなんてすげぇんだ♪作業を通して一緒に作業する人と自然と心の心境がせばまる不思議な感覚も味わった。

② おとうさんもおかあさんもほんとに優しくておっきい人。いつも温かく迎え入れてくださって嬉しかったです！！林部さんの日常生活の中に私を入れてもらったことで、自分になにが足りないか見えることがたくさんありました。ふつう他のおうちの日常生活に混じらせてもらえる体験なんて出来ないと思うから。だから自分が入ることで自分が持って生きてきた家庭イメージと違うことをたくさん発見できた♪世代をまたいで教育スタイルが受け継がれてっちゃうのは、家庭が閉鎖的なものでお互いの家庭を感じあうって機会がないからなんだろうな。おかあさんの料理を通じて、人に対して一生懸命することがどれほど相手の心に響くか、一生懸命することがどれほど大切か学びました。いつもいつでもどんなにいそがしくってもおいしいご飯を作ってくださるお母さん。すっごくありがたかったです。

③ 人との関わり！自然との関わり！自分の成長！

◆飯島理沙

① 農業をしているので、やっぱり農業のことを学びました。主に稲とりんごですが、本当に手をかけないといいものが作れないのだということ、手をかければかけるほどいいものが作られるということを、実際にお手伝いする中で実感することが出来ました。

② どんな人が来ても温かく迎えてくださるから、おいしいごはんとコーヒーがあるから、おもしろいお話ができるから、林部さんご夫妻の全てがあるから、私はあっぷるずに行きたいと思い、貴重な体験をさせていただけているのだと思います。大学に通いながら、こんな経験ができることに心から感謝しています。

③ まったりゆったりできる。元気になれる。パワーがたまる。行けば行くほど楽しい。（勇気はいるけど）一人でも楽しい。友達と行けばもっと楽しい。林部さんご夫妻と仲良くなれることが最大の魅力です。

◆鈴木祐香

あっぷるずの魅力は林部さんご夫妻の温かさにあると思います。わたしたちがお手伝い出来ることはほんの少しだけど、本当に毎回毎回温かいコーヒーと笑顔で迎えてくださります。人の温かさが人を呼ぶのだと感じます。だから行きたくなってしまうのだと思います。あっぷるずでは、りんごのお手伝いをする中で、林部さんと接する中で、人とのつながりを感じ

る場面が多くありました。わたしにとってあっぷるずは、そんな場所です。

◆阿部由季

① 私は林檎を育てたことがない。林檎の木は長野に来たとき初めて目の当たりにしたのだ。育て方なんて当然わからなかった。興味があったし、なんだか楽しそうだった。あっぷるずの活動に思い切って参加してみて育て方や大変なことがわかった。それよりも、なにより楽しかった。

② 林部さんはいつも明るくて、笑顔が素敵。とっても優しくて、初心者の私に丁寧にやり方を教えてくれた。あったかい雰囲気が大好きで、林部さんの為にも作業頑張るぞ！とやる気いっぱいになれた。いつも本当に感謝しきり。ありがとう。林部さん！

③ 林檎のお世話が楽しい！初心者でも安心して作業できる。林檎のことがわかる。学生の雰囲気が明るい。林部さんが素敵！林部さんとのひととき。皆の笑顔！

◆中村恵理

① りんごってとても手間のかかるものなんだって思いました。スーパーに売っているものを見ても、それができるまでにどれだけの手がかけられているかわからないけれど、作業をしてみるとりんごひとつひとつを本当に大切に育てていることがわかりました。こんな大変な手間がかけられているものを粗末にあつかうことなんてできないなぁと、リンゴをみるたびに思います。

② いつも温かく私たちを受け入れてくれるお父さん、お母さん。本当にありがたい存在だと思います。私たちがりんごの作業をやりたくて行っているのに、行くたびにごちそうを用意してくださったり、おふろまで入れてくださったり、本当にいたれりつくせりです。お話もたくさんできて、とっても楽しい時間をすごすことができるので、私は毎回行くのが楽しみでしかたありません。

③ 「茂菅であること。近くて自分のあいている時間に自分の好きなだけいられる」、「お父さんお母さんと話せる。普段は聞けないことを聞けたり、普段は考えないことを考えられる。お父さんとお母さんはお話の宝石箱や～」、「食べ物いっぱい。おやつとか、りんごとか、ご飯とか。いっぱいいっぱい食べられる」。

◆東野千尋

① 一度いくだけでも、林部お父さん、お母さんのお話がたくさん聞けて、りんごについても、その他長野県や他県について、詳しくなった。お母さんの手料理最高♪りんごの手伝いだけで、こんなにおいしいお料理をごちそうになれて、ありがたい！！

② ２人とも、お若いです。礼儀がなってない、私たち学生を、いつも温かく迎えいれてくださり、感謝しています。いつまでも、その若々しさとパワフルさが続くといいなぁ～って思います。長野のお父さん、お母さん！大好きです♪

③ 林部さんご夫妻が、いつでも優しく迎え入れてくださるので、気軽に行けるところ。りんごについて、詳しくなれるところ。

◆肥野沙也加

10 年も学生と交流されている林部さんは、教師を目指す学生の良き相談相手でもあります。農作業のお手伝いは力仕事ですが、林部さんとお話をしながらだとあっという間に時間が過ぎてしまいました。本当に温かく、貴重な時間です。

◆田澤岳哉

長野に来て大分たちましたが、四月当初は不安だらけでした。長野で行くところといえば、アパートか学校だけで何となく寂しい思いでした。でも、林部さんの家に行くとお父さん、お母さんの優しさに触れることができ、長野での居場所が見つけられた気がします。林部さんご夫妻には感謝の気持ちでいっぱいです。

◆土屋克明

① 林部さんのお家の農業のお手伝いをして、実際に体験することの大切さを学んだ気がします。やっぱり何事も経験しないとわからないことが多いと思いました。今まで実家のお手伝いでやったことがある作業でも、林部さんからたくさん新しいことを教えていただけてとても充実した活動でした。

② 林部さんは茂菅のお父さんということで、本当にいろいろ知っていて、尊敬できる方です！！

③ 林部のお父さん、お母さんとお話できること。農業の実体験ができること。お母さんの手作りのご飯の美味しさ。

◆峯村和裕

① 先輩の経験してきたこと（実習などの話）を聞けたり、林部さんがこの 10 年間で経験されたこと・感じられたこと（話）が聞けたりして、今まで無かった考えを与えられたり逆に自分の意見を聞いてもらえたりしたことが自分にとって貴重な経験でした。

② 活動の場を提供してくださるだけでなく、自宅の方にもお招きいただき、10 年の間にあった色々な話を聞かせてくださることがためになりました。

③ 普段経験できないような農業体験ができたり、地域の方との触れ合いがあったり、他学年他専攻の人たちとの交流ができることがとても大きな魅力だと思います。

◆井出愛香

① やっぱり一番はお父さんとお母さんの温かさです。数回おじゃましただけで私にとって第二の実家と言えるくらいの場所でした。また、リンゴ畑の仕事は良い経験になりました。長野で教師になりたいと思っているので、将来は子どもたちにリンゴの話をしたいと思います。

② 本当に素敵なご夫妻だなと思っています。お父さんはお話好きでいろいろな事を教えて下さって、お母さんはお料理がとても上手でこれからいろいろ教わりたいです。あっぷるずに初めて行った時でも、本当の子どもや孫であるかのように接して下さって、とても嬉しかったです。

③ 学校で勉強できない事が経験できることです。ほかの「YOU 遊」の活動は教師になるうえで良い経験になるけれど、あっぷるずは人として良い経験ができると思います。

◆町田香帆

① りんごってこんなに甘いんだ！！と感じました。おいしいりんごを作るために、たくさん手をかけて大切に育てていることを知りました。初めてのりんごの収穫は、すごくいい経験になりました。

② 学生の私たちに、とても優しくしてくださって本当に感謝しています。そして、林部さんのお話はいつも勉強になります。新しい発見もたくさんです。まだ1年なので、これからも一緒に頑張っていきたいです。

③ 地域の方のあたたかさに触れたり、一緒に活動できたり、りんごのおいしさを感じたり、幸せな気持ちになれる瞬間がたくさんあることです。

以上が、活動に参加したスタッフの声である。

スタッフの感想にたびたび出てくる「おとうさん、おかあさん」というのは、林部さんご夫妻のことである。今年度のスタッフの中には、たった一回しか参加していない学生も何人かいる。それでも皆、口をそろえて「参加してよかった」と言う。それは、一期一会の精神を大切にしている林部さんご夫妻の存在があるからではないだろうか。ちなみに、「一期一会」と同じような意味で「いちゃりばちょーでー」という沖縄語があるらしい。これは「一度会ったら、みな兄弟」という意味で、おかあさんの好きな言葉である。

おとうさん、おかあさんはいつも、「学生さんたちにパワーをいただいている」と言う。しかし、それは私たち学生も同じである。私たちは活動に行くたびにお二人から活力をいただき、また、癒されている。そして、おとうさん、おかあさんの姿を見ていると、若い私たちがぐうたらしていてはいけない、と気が引き締まるような思いがするのである。

おとうさんの逞しさ、おおらかさ。おかあさんの明るさ、やさしさ。活動に参加したことのあるスタッフの多くは、お二人のこういった姿に尊敬の念を抱きつつ、「自分もこうなりたい」という憧れにも似た感情を抱いていることであろう。

ところで、私には、活動に行くたびに不思議に感じていることがある。あっぷるずは、林部さんのお手伝いをするプラザである。にもかかわらず、なぜだか「やらされている」という感じがしない。どんな作業でも、それに没頭してしまうのである。私にはそれが不思議でたまらないのだが、一方で、これこそがあっぷるずの魅力であるとも感じている。

人は人を呼ぶ。おとうさん、おかあさんを見ていると、心からそう思う。いつだったか、おかあさんが言っていたことがある。「人が来ない家より、誰もが気軽に出入りできて、いつも賑わっている家庭ってステキじゃないかしら」と。林部さんご夫妻といっしょにいると、その意味を肌で感じる。そんなおとうさん、おかあさんを見ていて、私の夢が一つ増えた。

よし！私も将来、人のたくさん集まる家庭をつくろう。

湯谷小子どもランド（8年目）

プラザ長　鈴木　梢（理数科学教育専攻３年）
副プラザ長　岩本芙美（障害児教育専攻３年）
早川和宏（理数科学教育専攻３年）

○学生スタッフ名

笠井　悠太（理４）	髙池　亮輔（保４）	原　耕平（理４）	
飯島　理沙（理３）	鈴木　祐香（理３）	田畑隆太郎（実３）	中村　恵理（芸３）
西澤　直城（理３）	布山　朋和（実３）	宮尾　亘（実３）	宮尾　匠（社３）
井上　岳人（理２）	宇賀地由里（理２）	大井このみ（理２）	大田　香子（社２）
片原　範子（理２）	金箱　仁志（理２）	久保　朝夏（芸２）	小賀坂佳子（理２）
腰原　綾佳（理２）	柴田　計（実２）	髙見澤　誠（理２）	田澤　岳哉（理２）
土屋　克明（理２）	服部　直幸（理２）	松井　遥（理２）	三石　梨沙（理２）
峯村　和裕（理２）	湯本　哲（理２）		
小田切　学（松４）	二本松雄太（松４）		

○県短スタッフ名

倉島　喜子	菅原　千史	髙橋　真依	岡澤　沙季	木村　彩乃
熊谷　未希	熊谷　恵美	小林　佳奈	佐久由姫美	佐藤　梓
土井　嘉穂	長屋ちひろ	根石ゆり恵	野池　成子	藤沢かおり
降籏実貴子	本間瀬里奈	山口　葉月	渡辺じゅんこ	山本　りお

○参加者数

子ども約70名　中学生３名　保護者40名

○連携団体

湯谷小子どもランド保護者会　湯谷小学校　教職員　長野県短期大学　学生

○プラザの概要

「湯谷小子どもランド」は、湯谷小学校の１年生～６年生の子どもたちと、その保護者、湯谷小子どもランドを卒業した中学生スタッフ、信州大学の学生と長野県短期大学の学生が提携して活動している団体です。

活動の回数は月に１、２回程度で、主に土曜日の午前中の時間を使い、湯谷小学校の近くの檀田地区センターを利用させてもらい、１年間を通して様々な活動をしてきました。

「湯谷小子どもランド」の特徴は、子ども・保護者・学生が一緒になって活動を築き上げることです。そこで、「湯谷小子どもランド」では、次のようなことを主な目標としています。

子どもたちが異学年、異年齢の集団の中で友達や学生、保護者との関わりを通じて、集団の中で自分を豊かに表現する力や人と関わるためのコミュニケーション能力、異世代の存在する社会で強く生きるための社会力の形成・向上を目指すと共に、子ども・学生・保護者の三者間、または子ども・学生・保護者同士の交流を深め合い、互いを信頼して活動を築いていくこと。

この目標のもと、今年は子どもとの活動だけではなく、学生と保護者がもっと関わりを持てる場がほしいと思い、活動後の学生・保護者交流会も行いました。

また、「湯谷小子どもランド」は、小学校が週５日制になったことをきっかけに、土曜日の午前中に子どもの居場所を作る」という思いから始まりました。この思いを礎に、子ども、学生、保護者が輪になって関わり合い、ランドに参加することが楽しみになるように、今日も楽しかった、また来たいなと思えるような居場所にしていきたいと思い、一年間活動をさせていただきました。

○一年間の活動

今年の「湯谷小子どもランド」は、例年どおり４月から発足しました。湯谷小学校へ挨拶に行き、「湯谷小子どもランド」への子どもたちの参加を募るためにプリントを配布させていただきました。保護者の方々のご協力により、約 70 人の子どもが「湯谷小子どもランド」への参加を希望してくださり、第１回の活動を行うことができました。

以下、一年間の活動内容をまとめたものです。

日　程	内　容	場所と時間
５月16日	アイスブレイク＆名札づくり♪	檀田地区センター
５月30日	みんなで元気に遊ぼう！！	湯谷小体育館
６月27日	キャンプに向けて	壇田地区センター
７月11～12日	★湯谷の夏キャンプ★	妙高少年自然の家 １泊２日
７月25日	流しそうめん	壇田地区センター
８月４～５日	みんなで宿題をやっつけよう★	壇田地区センター
９月26日	BBQ&魚釣り★	フィッシングセンター北川遊魚 飯綱町
10月17日	みんなで山登りにチャレンジ★	地附山登山
11月14日	ゆやっこ大運動会★	湯谷小体育館
12月12日	メリーゆやスマス★ 世界で一つのケーキをつくろう	壇田地区センター
１月16日	冬まつり♪	壇田地区センター
２月６日	びっくり企画★	壇田地区センター
３月13日	思いでぽろぽろ	壇田地区センター

○活動内容

子どもの居場所をつくりあげるということ

鈴木　梢（理数科学教育専攻３年）

今年一年間、「湯谷小子どもランド」をどのように子どもたちの居心地の良い居場所にしていくかということを考えながら活動してきました。子どもたちの居場所を作ることができたのか、子ども、保護者さん、学生で輪になり活動してくることができたのかを振り返りながら、活動をいくつか取り上げて、子どもたちや保護者の方々、学生の感想を踏まえて、「湯谷小子どもランド」の活動を通して、子どもたちの土曜日の居場所を作ることができたのか、それぞれにどのような影響を与えていたのかを見つめなおしていきたいと思います。

1．活動例：（クリスマス企画）

メリーゆやスマス★ ―世界で一つだけのケーキをつくろう―

この活動は、子どもたちがクリスマスケーキを作って、みんなで食べるという活動です。班ごとにお金をもらい、自分たちで檀田地区センターの近くの西友に買い物に行ってクリスマスケーキの材料を買い、自分たちでオリジナルのケーキを作ります。学生は子どもたちの班に入り、子どもたちと一緒にケーキ作りをします。保護者さんは、保護者さんチームを作り、ケーキ作りをします。今年は子どもたちが８班、保護者さんが２班でケーキ作りを行いました。

○当日の活動の流れ

７時50分	学生　しなのき会館に集合
８時10分	檀田地区センター到着　県短生、松大生現地集合
８時15分	活動の準備
８時40分	学生流れの打ち合わせ
８時45分	子どもの受付開始
９時15分	はじめの会（導入の劇、活動内容、注意事項の説明）
９時30分	買い物に出発
10時00分	ケーキづくり開始★
11時05分	全員でいただきます
11時10分	サンタからのプレゼントを渡す
11時20分	ごちそうさま、片づけ開始
11時40分	リフレクションシート記入
12時00分	あいさつ、解散

○子どもの感想

・クリームをたっぷりぬって、チョコやビスケットでかざった。みんなで協力してケーキをつくったことがよかった。

・クリームをチョコレート味にしたところを工夫した！ケーキがとってもおいしかったし、クリスマスカードがうれしかった。

・中身をクリームで隠したり、いちごとアポロを順番にのせたりして工夫した。ケーキの上にサンタクロースをのせた。

・いちごを切って、上にも下にも使った！トッポを上にさした！いちごをまるまる上に乗せた！

・ケーキがとてもおいしかった。チョコレートを全体にぬったり、ポッキーの上にホワイトチョコをおいたりした。

・いろんなものをのせたりクッキーを粉々にしたりして、とても楽しかった。

子どもたちは、ケーキ作りに目をキラキラさせていました。毎年恒例の活動ですが、毎年子どもたちが本当に楽しみにしている活動の一つがこの活動でした。“ケーキを食べる”ということより、“自分が思い描いたケーキを作る”ということが本当に楽しいことなんだなぁと、子どもたちの感想から読み取ることができます。

また、自分一人だけの好みではなく、同じ班の友達と話し合って、みんなが作りたいケーキを作るということは、難しいことですが、子どもたちみんなで話し合い、全員が納得するケーキをどこの班も作ることができていて、自分たちのケーキを見つめる瞳が本当にキラキラして

いました。

○学生の感想

・色々な子どもと、色々な話ができたのでよかったです。子どもたちの８つの班が、それぞれおいしそうなケーキを作っていて、みんなが笑顔で作っていたので、みんな楽しそうでよかったです。(信大３年)

・子どもたちの笑顔が本当に楽しそうでした。みんなで作りたいと思ったケーキを作ることができてよかったと思います。(信大３年)

毎年恒例の企画でしたが、学生も、子どもたちも本当に楽しんでいる姿が見られました。初めて活動に参加した学生も何人かいましたが、初めてということを感じさせないくらい多くの子どもたちと笑顔で関わっている姿が見られました。食べ物を通しての活動というのは、人と人を結びつける効果があるのだなぁと感じられました。しかし、子どもたちがうれしさのあまりにヒートアップしてしまい、進行がうまく進まないことがありました。この活動から、学生が自分の班の子どもたちがルールを守った活動ができるように班の子どもたちの様子を見て、関わっていくことが、次の課題として残りました。

この「湯谷小子どもランド」の活動への参加が初めてという何人かの学生が、そのあと「楽しかった、また行きたい」という言葉や、「元気にしているかな」など、「湯谷小子どもランド」の子どもたちのことを気にかけている言葉を聞くことができました。初めての活動に緊張していた学生に、「もっと子どもたちとかかわっていきたい」、「また行きたい」という思いを持たせたことから、子どもたちは学生に常に影響を与えているのだということがわかります。

２．活動例：湯谷キャンプ

「湯谷小子どもランド」の一大イベント「湯谷小子どもランド　夏キャンプ」が今年行われました。この活動は、「湯谷小子どもランド」の活動の中で唯一、一泊二日で行われる活動です。「湯谷小子どもランド」の子どもたちがひとまわり成長できる２日間でもあります。企画を学生スタッフの２年生が行うため、２年生にとっても子どもとの関わり、企画すること、また仲間の大切さや感謝について学ぶことができる大きな機会です。また、保護者さんにも大きく協力していただき、子ども・保護者・学生が輪になってキャンプを作りあげることができるのだと思います。

今年のキャンプのテーマは、キラキラでした。

以下は、キャンプ長のキャンプのまとめです。

○湯谷キャンプのまとめ

〈キャンプの流れ〉

2009 年７月 11、12 日の２日間、新潟県妙高青少年自然の家にて「湯谷小子どもランドキャンプ」が行われました。参加者は、こども 71 名、保護者 25 名、学生スタッフ 35 名の計 131 名でした。

一日目は、朝７時に妙高青少年自然の家に行き、各係ごとの準備をしました。主には開会式の準備、解決トレジャーの準備、開会式の導入劇の打ち合わせ、受付の準備でした。子どもたちと保護者さんたちは、10 時ころから集まりはじめました。

11 時から開会式を行いました。内容は、簡単なあいさつや施設の方のあいさつ、施設の注意、班ごとのアイスブレイクです。班は全部で 10 班作り、一つの班に子どもと学生合わせて

9～10 人編成にしました。子どもたちに関してはなるべく学年がかぶらず、班にいる子どもたちの学年が1～6年までバランス良くなるように調整しました。その後、屋外で 12 時ころから班ごとに昼食。

13 時からプレイホールにて導入の劇。その後、班ごとに解決トレジャー（課題解決ハイキング）スタート。施設のオリエンテーションコースを回って制限時間内に課題をいくつ解決できるかというものでした。各課題があるポイントは、鬼に扮した3年生の学生スタッフや保護者さんに担当してもらいました。

17 時 20 分から夕食。

18 時 30 分からキャンプファイヤー開始。内容は簡単な劇、全員参加のゲーム（ライカバ・キングコング・妖怪退治に行こうよ・背中伝言ゲーム・トントンパ）、全員参加のダンス（1・2・3・4、マイムマイム）。20 時ころ終了。

希望者だけ 20 時からきも試し。希望者以外はプレイホールで遊んだり、部屋に戻って入浴、就寝。20 時 30 分終了。

21 時から 21 時 45 分まで入浴。

22 時就寝。22 時 30 分から学生スタッフはミーティング、翌日の準備。

二日目は、朝6時起床。身支度をしてから屋外広場で朝の集い（あいさつ、ラジオ体操）。

7時から7時 45 分まで朝食。そのあと部屋に戻り各部屋の掃除と荷物の移動。学生がチェックして退室。

9時からクラフト開始。内容は、木で作るストラップと竹で作る水鉄砲。班ごとに行動し、10 時 30 分まで制作の時間とした。10 時半からは作った自分の水鉄砲を使ったゲーム（ビーチボールころがし・的あて・パズルピース探し）。12 時終了。

終わり次第、班ごとに片付け、昼食。

13 時 15 分からフィナーレ開始。内容は劇、2日間をまとめたムービーの上映、最後のあいさつ。そのまま閉会式。14 時終了。

屋外で全員の集合写真と班ごとの写真撮影。

14 時 30 分に解散になり、学生スタッフは子どもと保護者さんをお見送り。全員ダッシュ。

その後、使った施設の掃除、片付け、機器の返却などの後片付けを済ませてから学生ミーティング。16 時ころ学生解散。

〈キャンプの様子〉

・開会式：

内容は簡単なあいさつとアイスブレイク。子どもたちは各班に分かれて座っていたが、普段あまり異学年とは交流しないようで、最初はとても緊張しているように見えました。それでもアイスブレイクをしたり、学生スタッフのほうからコミュニケーションをとることで、だんだん緊張もほぐれ班の中の雰囲気も良くなっていきました。

○子どもの感想

・人間知恵の輪が楽しかった。
・自分の班の旗がきれいに作れてよかった。
・もっと仲のいい人と同じ班がよかった。
・あんまり仲良くなれなかった。
・つまらなかった。

子どもの意見では楽しかったという意見が多かった。しかし、中には班のメンバーに対しての不満や企画に対しての不満があった。企画の内容に関しては仕方のない部分もあるが、メン

バーのことに関してはもっと学生側から働きかけてあげる必要があったと思います。

・解決トレジャー：

施設のオリエンテーリングコースを回って、チェックポイントにある問題、課題をクリアしていくという内容でした。子どもたちには、班のメンバーと協力して課題をクリアしようとする姿が見られました。

○子どもの感想

・鬼が出す問題を解くのが楽しかった。　・みんなと仲良くなれた。
・歩くのは疲れたけど楽しかった。　・全部回れてうれしかった。
・お母さんが鬼だった。その問題は結構楽でした。　・忍者と鬼の戦いが楽しかった。

子どもたち全員から「楽しかった」「うれしかった」という声を聞くことができました。中には歩くのが疲れてしまう子どももいたようですが、みんな達成感があったようで、施設に帰ってくるとすぐに保護者の方にこんなのがあったんだよ、と話している姿が見られました。導入の劇もたのしみながらみてくれていたようでした。

・キャンプファイヤー：

キャンプファイヤーを囲みながら、簡単なゲームやダンスをしました。課題解決ハイキングで疲れてしまっていた子どももいましたが、それでもしっかり参加して、楽しくゲームをしたり踊っている姿が見られました。

○子どもの感想

・ダンスがよかった。練習してあったから、踊れた。　・ゲーム面白かった。
・初めてでびっくりしたけど楽しかった。　・火が熱かった。

小さい子や低学年の子どもは疲れてしまってあんまり楽しんでくれないかも、とスタッフの中では不安に思っていましたが、感想を見ると、学年に関係なく楽しんでくれたようでした。火に関しては子どもがなるべく近づかないように配慮していたので、誰もけがややけどをしませんでした。保護者さんに火の管理をお願いしていたので、学生スタッフは安全注意に集中することができてよかったと思います。

・きもだめし：

施設の周りを使って行いました。参加者は「希望した子どもだけ」としたのでそこを振り分けるところがうまくいかず、時間がかかってしまいました。子どもたちはとても楽しみにしていた様子でした。

○子どもの感想

・とってもおもしろかった。　・待ってる時間が長くてつまらなかった。
・ちょー怖かった。　・一番楽しみにしていたんだけど、とっても楽しかった。

楽しかったという感想が多かったが、中には待ち時間が長くてつまらなかったという子や、「最初のグループ分けの時間がいやだった」という声がありました。もっとスムーズに進行したり、グループ分けを事前に済ませておくといった工夫が必要だったのかもしれないと思いました。しかし、中には「キャンプ中で一番よかった」という声もあり、内容的には良かったのではないかと思います。

・クラフト、レク：

本物の木と竹を使って、ストラップと水鉄砲を作りました。子どもたちも初めて作るようで、とても楽しそうにやっていました。保護者さんも昔作った人が多く、子どもたちと一緒に夢中

になって作っていました。その後のレクでは水鉄砲を使い、「的あて」などのゲームをしました。自分で作ったものということもあり、夢中になって遊んでいる姿が見られました。

○子どもの感想

・水鉄砲楽しかった。　　・遊ぶのが楽しかった。

・ストラップがきれいにできてよかった。　　・１位になれなくて残念だった。

みんな夢中になって遊んでくれて、「とても楽しかった」という感想がほとんどでした。子どもたちばかりでなく保護者の方からも「昔が懐かしくなって夢中になっちゃった」など、心から楽しんでくださったことがわかる声もありました。

・フィナーレ：

閉会式のまえに劇をやったり、２日間をまとめたムービーを流したりしました。子どもたちはいろいろ思い出していたようで、保護者さんや学生スタッフに向かって「○○が楽しかった」などと話しかけていました。

○子どもの感想

・劇が面白かった。　　・学生が泣いていた。　　・振り返りの映画がよかった。

・６年生だから、今年で最後のキャンプになってしまうことがさみしい。

最後の最後まで、子どもたちに楽しんでもらえたようでよかったです。子どもだけでなく保護者さんや学生スタッフも一緒になって劇やムービーを楽しんでいました。

○キャンプ長の感想　　高見澤誠（理数科学教育専攻２年）

全部１から自分たちで作るキャンプと聞いていたので楽しそうだと思いキャンプ長をやりましたが、実際にやってみると逆に、「１から作らなければいけない」という思いが強くなり逆に負担になりました。また、スタッフをまとめたり計画の会議の司会をしたりと、今までにしたことのない経験ばかりで戸惑ったり、周りのスタッフに迷惑をかけたりしました。

それでも周りの信大、県短の学生スタッフや先輩、副キャンプ長に支えられながら何とか計画、準備していくことができました。計画や準備でも周りのスタッフと納得のいくまで話し合ったり衝突したりしながら少しずつ、確実に進めていきました。全員のやり方、考え方は違いましたが、「子どもに楽しんでもらいたい」という気持ちはみんながもっていると感じました。

キャンプ当日も全員が自分のできること、すべきことを自分で考えて動くことができ、進行もスムーズで、企画もとても練られていたし、事前のスタッフの動きの確認も徹底できていたため、学生スタッフも動きやすいと感じる人が多かったようです。子どもたちもキャンプが始まる前はあまり乗り気ではなかった子がいましたが、キャンプが終わると「とってもおもしろかった！」と言ってくれました。

このキャンプで学んだことを言葉に表すというのはとても難しいのですが、間違いなく自分のこれからにプラスになった経験だと思います。このような素晴らしいキャンプをすべて自分たちにまかせて好きなようにやらせてくださった保護者さんたち、先輩方、またこういう機会を提供してくれた「YOU 遊世間」にはとても感謝しています。どうもありがとうございました。

○副キャンプ長の感想　　松井　遥（理数科学教育専攻２年）

まず、はじめに自分がこの企画に参加して本当に良かったと思う。副キャンプ長として立ち上がって、信大と県短の仲間と共に約１か月半というすばらしい準備期間を過ごすことができ

た。私たちの「湯谷キャン」は、土井先生や湯谷小の保護者の方、先輩方に全力で支えていただいて、仲間と協力して試行錯誤しながら出来上がったこの世にひとつしかない宝物である。1人1人の思いが積み上がって出来たものである。N303 教室で初めて顔を合わせた仲間が、少ない時間の中で一つ一つの企画を丁寧に考えていた。長いようで短い時間の中で妥協を許さずに企画を練ったり、準備を行っていたのが本当に最近のように思える。

「湯谷キャン」の企画を通して私が一番感じたことは、“信じる”ということだ。最初の方ではなかなか話し合いが進まなかったりした時期もあったけれど、みんなお互いにお互いのことを信じて活動できるようになったし、その結果が絆の深さとして表れていると思う。もちろん、意見の食い違いや意思の疎通がうまくいかなくて嫌な空気も流れたりもしたけれど、必ずその空気を変えてくれる仲間や、お互いに気持ちをぶつけ合って解決につなげられる仲間たちだった。本当に他人を尊重できる仲間が集まって、自分が今まで経験したことの無いような企画に作りあがっていたと思う。

当日は流れがうまくいかない場面もあったがお互いに連絡を取り合って対処できたし、何よりも子どもたちの笑顔がうれしかった。子どものパワーに勇気付けられ、不安とわくわくした気持ちを持ちながら子どものために頑張った2日間だった。子どもだけでなく学生のパワーも、とても大きかったと思う。

私は改めて「2009 湯谷キャン」のメンバーになれてよかったと心から思っている。学ぶことはたくさんあった。仲間の頑張る姿と、参加した子どものきらきらした姿を見て、今だからできることにたくさん挑戦したいと思った。

最後に、サポートの至らない副キャンプ長ですいません。まこっちゃんには本当に感謝しています。「湯谷キャン」を作り上げたメンバーとは最高の仲間として、これからも付き合って行きたいと思う。本当にありがとうございました。

◇実践から得た「臨床の知」

みんなの居場所

鈴木　梢（理数科学教育専攻3年）

私にとって第1回の活動は、初めて会う子どもたち、保護者の方々、初めての場所、初めての企画……本当に初めてばかりの「湯谷小子どもランド」の活動でした。

準備が終わり、後は当日を迎えるだけの私に、「湯谷小子どもランド」に深くかかわっていた先輩から、一通のメールが送られてきました。「緊張してると思うけれど、大丈夫、湯谷小子どもランドには不思議な力があって、どんなに失敗したと思っても…子どもや学生には、楽しさや感動が伝わる場で、必ず、みんなその場に戻ってくるんだよ」。この言葉は、私が1年間活動してくる中で、一本の柱でした。でも、「湯谷小子どもランド」の活動は本当に難しく、何度も悩み、泣き、感謝し…、その繰り返しでした。活動の中で、参加した先輩が学生のリフレクションシートに私たちの活動についての多くの意見をくださいました。それまでの私たちの活動は、どこか本気になりきれていない、何かのせいにしているような、そんな活動だったと思います。そのリフレクションシートを見てから、何度も、プラザ長を辞めたいと思いました。こんなに責任重大な仕事を、自分はやりきれないと、そう思いました。でも、考えると思い浮かぶのは子どもたちの笑顔でした。子どもたちの居場所を作ろうとしてきた活動が、逆に

私の居場所を子どもたちや、保護者さんに作ってもらっていたことに気がつきました。子どもたちや、保護者さんの笑顔にどれだけ救われ、支えられたか測り知れません。それから、やめようなどとは思わず、自分の居場所を作ってもらった恩返しをしようと、できる限りの準備をしようと思いました。

子どもたちの笑顔というのは、本当に大きな影響を与えるものだと感じました。「湯谷小子どもランド」は本当にみんなを笑顔にしてしまう、不思議な力のある場だということを心から感じました。

笑顔あふれる湯谷小子どもランド

岩本芙美（障害児教育専攻３年）

私が「湯谷小子どもランド」の副プラザ長をやろうと決めたのは、活動中の子どもたちの笑顔と保護者さんのあたたかさにひかれたからです。初めて活動に参加したときに子どもたちの楽しそうな笑顔を見て、このプラザが子どもたちにとって大切な居場所になっていると感じ、この居場所を守っていきたいと感じました。ランドの保護者さんは学生に対してとても明るく気軽に接してくれるので、保護者さんと話すのも大きな魅力でした。

企画を運営するにはなかなかうまくいかないことの方が多く、毎回反省の嵐でした。しかし、子どもの反応はストレートで、企画はやりがいのあるものでした。副プラザ長としてプラザ長を支えることができていたのか…迷惑ばかりかけていた気がしますが、ともに試行錯誤しながら企画を立てた経験は自分の大切な財産となりました。この１年間は「湯谷小子どもランド」の活動とともに過ぎていった気がします。それほど大きな存在で、この１年をとても濃いものにしてくれました。

私は副プラザ長として全体を見ていたため、子ども一人ひとりと接するという機会はあまりなく、自分が前に立って大勢に向かって話すという１対多の状況の方が多くありました。人前に立つのが好きではない自分ですが、このような立場を経験させていただいたことで、伝えることの大変さを感じるとともに、１対多になったときの接し方というのを考える良い機会になりました。

子どもにとっての居場所をつくっていたつもりが、いつの間にか自分にとっての大切な居場所になっていたように感じています。これからもずっと続いていくことを願います。

副プラザ長を終えて

早川和宏（理数科学教育専攻３年）

「湯谷小子どもランド」の子どもたちはとても元気です。活動中はもちろんですが、始まる前も終わった後も元気よく遊んでいます。そんな子どもたちと活動している中で、感じたことがいくつかありました。子どもたちは興味のある活動にはかなり積極的に関わっていくことです。工作ひとつをとっても、子どもたちは私たち学生の想像を超えた作品を作ります。子どもたちは、興味のあるときは目がキラキラしていて本当に楽しそうです。少しやんちゃな面もありますが、そんな子どもたちの笑顔が学生の元気の源でもあると感じました。また、「子どもランド」は他のプラザに比べて、保護者の方々との交流ができるプラザだと思います。大学生

活の中で子どもたちと関わる授業があっても保護者の方と関わる機会はなかなかありません。そんな中、保護者の方と一緒に活動したり、話し合いをしていくことで新たな考え方や、子どもたちを私たち学生に預けていただいている保護者の方の願いというものに気づけたと思います。この学生、子ども、保護者という関係を大切にしていけるプラザが、「湯谷小子どもランド」だと思います。

けれども、これから考えていくべき課題も活動の中からいろいろとあがってきました。子どもたちはとても元気で活発です。しかし、元気のあまり他の人にけがをさせてしまったということもあります。そんなとき、私たち学生はどう対応したらいいのでしょうか。子どもたちが楽しめる活動をしていきたいと思うということは、このようなことも考えて活動を企画し、活動中も考えていくことが必要なのだと思いました。「怒るのではなく、ちゃんと叱ってもらいたい」と保護者の方にも言われたことがあります。これからも楽しい企画の中にも最低限のマナーや他人のことも考えていけるように学生が意識して取り組んでいければいいなと思います。私自身も意識しながらこれからも子どもたちや保護者の方と一緒に楽しめる活動をしていきたいと思いました。

◇地域の保護者からの評価

きらきらの笑顔が集まる場所！子どもランドの輝き、いつまでも！！

湯谷小学校子どもランド　保護者代表　**中谷隆秀**

○湯谷小の子どもランドが始まって18年、変わらないもの「子ども達の笑顔」

子どもランドには、いつも必ず子どもたちと、学生と、そして保護者の笑顔がある。私が「子どもランド」と関わって9年間、ずっと大切にしてきたこと：「親の願い＝子ども達が元気に生き生きと成長すること。」これも変わらない願いです。「子ども達の笑顔」を中心にして、「学生スタッフ」と「保護者」が一緒にその活動を支え続けて今日の子どもランドがあるのです。

○学生スタッフ中心の運営になり、子どもランドは年々進化しています。

以前は保護者が企画、運営を行い、学生スタッフが「お手伝い」として参加してもらっていましたが、5年前からは企画運営の主体を学生スタッフ自身に任せてきました。学生自身が企画運営するようになって、子どもランドの活動は毎年毎年活動内容が充実してきています。任される学生スタッフはとても大変でしょうが、毎年保護者の期待を裏切らない充実ぶりです。その「若さ！」と「知恵！」が子どもランドの魅力でもあります。

○子どもランドの活動に不可欠なもの。学生スタッフと保護者の交流！

2008 年からは毎月のランドの日常運営にプラスして、保護者との懇談会も年間計画の中に組み込んで、学生スタッフと保護者が一緒に話し合う場面を増やしてきました。この「学生スタッフと保護者の懇談会」は、不思議な場です。普段は子どもたちを相手に元気に遊びまわっている「学生スタッフのお兄さん、お姉さん」が私たち保護者と一緒に語り合う場面は、ちょっと真面目に、ちょっと遠慮がちにお互いの想いを交流できる場面です。

学生スタッフ自身にとっても、「子ども達の笑顔」を中心にして、保護者と直接懇談をして、「親の想い」と「学生の気持ち」を率直に交流できる場は、大きな刺激と成長の場と思います。私たち保護者にとって「学生スタッフ」はかけがえのない仲間です。これからもその相互の関

係を大切にしていきたいと思っています。

○子どもランドの魅力、かけがえのない「場」

子どもランドでは学生スタッフもいろいろな活動にチャレンジできる、そのことの魅力は大きいですね。特に夏のキャンプは新２年生のメンバーがいつも試行錯誤しながらゼロから作り上げてくれます。このキャンプでは子どもたちも保護者も「学生スタッフのエネルギーと情熱」を全身で感じています。学生スタッフの「子どもたちに喜んで欲しい」、「素敵な夏キャンプを作りたい」という熱い想いを私たち保護者はとても強く感じるのです。多くの保護者はその純粋な想いを感じたときに、この子どもランドがかけがえのない素敵な「場」であると感じるのだと思います。またそのキャンプを一緒に作るパートナーとして参加できる喜びも同時に感じるのです。夏キャンプは子どもランドの大きな財産であり、魅力であります。

○学生スタッフの姿＝未来の自分＝「夢」の形

子どもランドは、異年齢の集団での様々な体験ができる場でもあり、友達作りの場でもあります。毎月の企画ではどの子も元気いっぱいに、学生スタッフのお兄さんやお姉さんたちにぶつかって行きます。いつも元気な湯谷っ子はみんな学生スタッフのお兄さん、お姉さんたちが大好きです。学生のお兄さんお姉さんは、子どもたちにとって、身近な友達であり、信頼でき、甘えられる大人なのです。自分の将来の姿＝「夢」と学生スタッフのお兄さんお姉さんの姿を重ねているようにも感じています。学生スタッフは子どもたちの憧れの的なのです。

○これからももっと素敵な活動を作っていきましょう！

このような子どもランドの活動がこれからもずっとずっと続けていけるように、保護者としてもしっかり学生スタッフと協力をして、子どもたちがいつまでも「夢」を持って明るく元気に過ごせるように活動を続けて行きたいと思います。本年度は特にリーダーの鈴木梢さん、副リーダーの岩本芙美さん、その他多くの学生スタッフの皆さんには大変お世話になりありがとうございました。また長野県短期大学のスタッフのみなさんにも大変お世話になりました。湯谷小の子どもたちは本当にこんなに素敵な学生スタッフにめぐり合えて、幸せだと思います。これからももっともっと素敵な子どもランドの活動を共に作っていきましょう。心から感謝を込めて、いつも子どもたちに「夢」をありがとう！

青木村えがおクラブ（5年目）

プラザ長　市川香織（教育実践科学専攻３年）
副プラザ長　中村恵理（芸術教育専攻３年）
宮尾　亘（教育実践科学専攻３年）

○学生スタッフ名

市川　香織（実３）	中村　恵理（芸３）	宮尾　亘（実３）	笠井　悠太（理４）
小西　舞（実４）	髙池　亮輔（保４）	田村　淳樹（芸４）	中出　智章（数４）
永谷　嘉浩（実４）	原　耕平（理４）	田畑隆太郎（実３）	藤田　裕介（社３）
布山　朋和（実３）	島崎　涼子（芸３）	東野　千尋（芸３）	渋谷美奈子（実３）
小林　智子（実３）	肥野沙也加（野３）	飯島　理沙（理３）	阿部　由季（芸３）
土屋　知穀（心３）	佐藤　悠司（心３）	柴田　計（実２）	荻原　知子（実２）
駒村　美代（実２）	服部　直幸（理２）	三森ありす（実２）	平澤　里恵（生２）
髙見澤　誠（理２）	竹中麻由子（生２）	三石　梨沙（理２）	峯村　和裕（理２）
山越　俊（社２）	井出　愛香（実１）	岡澤　沙季（県短）	矢澤ひかり（清短）
杉田　美香（清短）	髙橋イリヤ（清短）	佐藤　静香（長大）	小出　智博（長大）
原田　圭祐（長大）	児玉　直樹（長大）	宮田　千尋（長大）	斉藤真奈美（長大）

○参加者数　子ども約80名

○連携団体　青木村教育委員会

○プラザの概要

青木村は、上田市の隣に位置する人口5,000人弱の村です。また、全国で唯一の国宝（大法寺）を持つ村としても有名です。“子ども一人を育てるには村一つが必要”という理念の下、村内には青木村教育委員会を中心とした、子どもに関係するグループ「子どもはつらつネットワーク」が形成されています。

その中で信大「青木村えがおクラブ」は、学生教育ボランティア「わこうど」の一員として、青木村の教育に参加させていただいており、子ども・地域に関わる様々な活動を展開しています。

また、この青木村の教育目標は、「心豊かでたくましい子どもの育成＝今こそ子どもに社会力を＝」というものです。

人とのつながりがメディアを媒介としたものとなっている現代では、人との関わりが希薄です。そのような社会において、＜人のことも自分のことのように考える＞ことができ、＜人が大好きな子ども＞を育てる際、その根っことなるものが「社会力」であると考えています。そして、その社会力を培うには、多様な他者との相互行為が必要とされています。よって、私たち学生は、子どもたちにとって多様な他者の一員として、関わっているということになります。ですから私たちは青木村の子どもたちの成長・発達を願う“子どもが真ん中”のプラザであることを念頭に置いて、活動させていただいています。

○一年間の活動

活動日	活動名
5月31日～6月6日	あおきっ子通学合宿
7月17日	通学合宿報告会

7月18日	えがおクラブ企画『ポンポン船を作ろう！』
8月4日～7日	長泉サマーキャンプ
10月18日	図書館フェスティバル
11月3日	ウォークのつどい
11月15日	青木村産業祭
12月5日	子育てフォーラム青木2009
2月20～21日	えがおクラブ企画『冬の大三角』

※他にも、4月に行われたマラソン大会や6月に行われた泥んこ運動会、8月の青木村夏祭り等、多くの村内行事にも参加させていただきました。

○活動内容

1．あおきっ子通学合宿

今年で5回目を迎えた「あおきっ子通学合宿」とは、子どもたちが親元を離れ、学生たちと6泊7日生活するというものです。場所は、青木村の中心的施設である「青木村文化会館」で行います。村の社会力育成事業の一つですが、日程の作成から当日の進行まで、学生が主体となって進めさせていただきます。主に青木村教育委員会と連携して行うのですが、朝・晩の調理にお手伝いに来て下さった食生活改善推進協議会のみなさん、その毎日の食事の栄養価とバランスを見てくださった栄養士さん、小学校の先生方など、たくさんの方々に支えられて初めて成り立つ活動でもあります。

―1日の流れ―　（例）6月2日（火）

5：30	朝食作り（学生）	16：50	学習
6：00	子ども起床	18：00	調理＆自由
6：20	そうじ・配膳	19：00	夕食
6：50	朝食	19：30	片付け＆お風呂
7：30	登校	21：00	振り返り
16：30	下校	21：30	就寝

＊合宿中の子どもたちの感想（原文のまま引用）

・今日、合宿1日目！！楽しいことはすぐに過ぎちゃうから1つ1つ大事にしていきたいです。それとカレーがおいしかったよ♪（6年女子）

・今日、初めての合宿があった！最初はドキドキしたけどすごく…おもしろい！（5年女子）

・今日はぼくたちの班がちょうりでした。ぼくたちは、チャーハンを作りました。まぜるところがすごく大変で右手がいたくなってしまいました。でもおいしくできたのでよかったです。（5年男子）

・今日パーティーの準備をやった後は、いよいよパーティー！！作った物はハンバーガーで、主にオレはハンバーグを焼くのと、パンを切るのをした。楽しくできた。その後はパーティーで、たくさんたべられたし、レクもすごい楽しかった。いいパーティーになった。でもこれでオレは6年だからもう通学合宿には小学生としてできないから、あ～あと思った。でも楽しかった！！（6年男子）

初めて参加する子、3年目の子など、人それぞれですが、その子ならではの合宿の感じ方が

あるようです。１人ずつのふりかえりシートをじっくり読むと、たくさんのことが見えてきます。次は、合宿中に子どもたちが掲げた目標です。

「あした　がんばりたいこと」(原文のまま引用)

・みんなにやさしくしたい。(４年男子)　　・他の人の名前を覚える。(５年女子)

・お手伝い。(４年男子)

・朝早く起きて大きい声ではなしてて他の人にめいわくをかけてしまったから明日は、早く起きてもふとんの中にいたい。(５年女子)

・ほかの班といっぱい遊んでなかよくなりたい。(４年女子)

・今日は遊ぶ時間がなかったので、明日は遊びたい。(５年男子)

子どもたちの“がんばりたいこと”は、どれも本当に立派なものでした。これを読むと、私たち学生の目に映る子どもたちの姿は、ほんの一部分でしかなかったようにも思えます。子どもたちはいま何を思い、何を目指そうとしているのか。それを汲み取れるのがこのふりかえりシートであると思います。30 人を超える子どもたちを相手にするわけですから、全体で共有する時間があってもよかったのではないかと、反省致しました。来年度は、このふりかえりシートをより活用できるような機会を作っていってほしいと思います。

２．通学合宿報告会

「あおきっ子通学合宿」後の子どもたちの様子などを保護者さんからお聞きしたり、合宿の感想や意見を寄せていただいたりしました。また、合宿中の写真を用いて学生が作成した通学合宿の DVD を上映し、子どもたちにプレゼントしました。

＊保護者さん方の声

① 感　　想

・初めは乗り気ではなかったので心配だったが、笑顔で帰ってきて安心した。

・家に帰ると２時間くらい泣いていました。

・あんまり手をかける子ではなかったが、離れてみると「今何してるのかな」など考えてしまい、その存在の大きさに気付きました。

・子どもが、帰ってきてすぐ「来年も行くからね」と言いました。楽しかったみたいです。

② 子どもたちの変化・成長など

・荷物整理、料理を手伝ってくれるようになりました。

・お手伝いは前からやってくれていたのですが、パーティーで作った唐揚げの作り方（下味の付け方）などを教えてくれました。

・祖父が「変わったね」と言っていました。我慢強くなったというか、以前より怒らなくなったような気がします。

・料理を積極的にやってくれるようになりました。また、わたし（母親）が家へ帰ってくると、食器が片付いているようになりました。

中には「目立った変化は見られなかった」といったような感想もありました。この合宿も今年で５回目ということで、子どもたちの中でマンネリ化があることも考えられます。この合宿

で本当に大切にしていかなければならないことは何なのか。学生内でしっかりと考え、それを子どもたちとも共有していくことが必要だと感じました。また以下は、来年度合宿に向けての意見・要望です。

③ 意見・要望

・６年生を主体にして何かできたら良いと思います。６年生がのびるきっかけの場にしてほしい。

・高学年生になると、体調が悪くても大勢の前では言いにくい。

・合宿に行くことで子どもたちも成長できます。熱意のある学生がいるから成り立っている合宿なので、ぜひこれからも続けていってほしいです。

たくさんのご意見を御寄せいただきました。まだまだ多くの改善点や問題点があるかと思います。無論、完璧を目指すのは困難ですが、学生が常に何かにぶつかって悩み、向上心を持ち続けることが大切なのかな、と思います。そのときはあくまで、「子どもが真ん中」という当たり前のようで見失いがちな意識を大事に、企画・運営できたらと思います。

３．学生企画「ポンポン船を作ろう！」

学生企画ということで、映画「崖の上のポニョ」に出てきた、宗介のろうそくで動く“ポンポン船”を作りました。当日は、低学年の子どもを中心に約30名が参加してくれました。

アルミ缶をくり抜いて、アルミパイプとろうそくを設置し完成する船です。「ポンッポンッポンッ……」と音を立てながら進む様子に、子どもたちも保護者さんも学生も歓声をあげていました。

最後、学生が手作りをした二層ムースゼリーをふるまいましたが、そちらも大好評でした。

＊参加した子どもの感想（原文のまま引用）

・同じ所をぐるぐる回っていたけど、ちゃんと動いた。とけたろうそくの量がすごかった。（６年男子）

・作るのは難しかったけど、遊ぶのが楽しかった。（４年男子）

・作れたことがうれしかった。（１年男子）

当日は信大の学生だけでは人数が足りず、長野大学のふくろうずのみなさんが６名駆けつけてくれました。信大生にはない、新しい風を吹き込んでくださったように思います。特に、参加してくれた方に対する感謝の気持ち、また自分から気付き行動を起こす姿など、学ぶことが多かったです。

また、活動場所が変わると参加する子どもたちの年齢層や顔ぶれも変わり、ほぼ初対面の子どもたちとの活動となりました。よって、初めは緊張感に満ちた雰囲気でしたが、「ポンポン船を作って、走らせる」という一つの目的がはっきりとしていたので、みんなすぐに打ち解けていたように感じました。船が走るか不安でしたが、本番はどの船も試行錯誤をして見事に走ることができました。

４．長泉サマーキャンプ

静岡県長泉町で、２泊３日のキャンプを行いました。長泉町は、青木村と姉妹都市連携を組

んでいる町です。この事業はすべて青木村教育委員会の企画・進行で行われ、学生はお手伝いという形で参加させていただきました。信州大学と清泉女学院短期大学の学生が参加しました。地震や台風など、ハプニングも多々ありましたが、子どもたちも大学生も思いっきり楽しむことのできる活動でした。

＊参加した学生の感想

・海という、滅多に行くことのできない場所へ、子どもたちと一緒に行けて良い経験ができた。班付きをやらせてもらったが一人だったのでいろいろと難しいこともあり、勉強になった。(信大３年男子)

・あれほどのアクシデント（台風、地震）に見舞われたことによって、予定外のことにも落ち着いて対応できる力が身に付いたように思った。合宿という場でしか、子どもたちと宿泊体験をしたことがなかったので、こういった楽しい活動の中での宿泊はとても楽しかった！（信大３年男子)

・いつもとは違う、学生参加型の企画だったので、運営されていた教育委員会の方の姿からたくさんのことを学ばせていただきました。また、長泉町の方々との交流もあり、充実した３日間を過ごすことができました。(信大３年女子)

今回、初めて学生も参加させていただいた活動です。バーベキューや富士登山、キャンプファイヤーや水族館など盛りだくさんの３日間でした。途中、アクシデントにも見舞われましたが、楽しく無事に過ごすことができ、滅多にできない経験をさせていただけたように思います。学生は肝だめしの企画を担当させていただきましたが、事前の準備不足や練習不足もあり、子どもたちにとっては物足りない内容だったかも知れません。また、バーベキューの時など、学生が進んで動くべき場面もあったように思います。来年参加させていただく際には、今年度の反省を活かしてほしいと思います。

５．図書館フェスティバル

10 月 18 日、青木村図書館にて行われました。伊那から来たパパ４人組の絵本ライブのお手伝いということで、大学生も絵本や音楽に合わせて歌ったり踊ったりし、楽しいライブでした。また、塩田平民話研究所の方々による、民話の語りも聴くことができました。青木村に関する貴重なお話もあり、とても勉強になりました。

＊参加した学生の感想

・パパ's プロジェクトの絵本ライブは、音楽に合わせた読み聴かせで、まだ内容の把握が難しいような赤ちゃんでも楽しむことができるようなものでした。ただお話を読むだけでなく、音楽を演奏しながら「歌う感覚で読む」という発想に感動しました。お手伝いで参加させていただいたのですが、子どもたちと一緒に楽しませていただきました。

(信大３年女子)

・民話を聴き、学生として関心を持つことができました。また小学校の先生やお父さん方が活動をしていることを知って良かったです。段取りの難しさをとても感じ、自分にはそういった力がまだまだ足りないと感じました。(信大３年男子)

・パパ's のみなさんが本当にすごかったです！伝えたいものがはっきりとしていて、またその伝え方を知っているというような感じで、とても感動しました。民話は勉強になり、特に姨捨山の話はこれからにも活かせると思いました。(信大３年男子)

６．ウォークのつどい

11月３日文化の日に、青木村や上田市の文化遺産に触れながら全長16㎞のウォーキングをしました。地域の方のガイドに沿って、多くのお寺や神社を訪れました。中には青木村が誇る“国宝大法寺”もあり、文化と自然にめいいっぱい触れることのできた一日でした。

＊参加した学生の感想

・１年生のうちは、地域の人と関わる機会がないのでとてもいい経験になりました。青木村の素敵な自然を感じることもでき、本当に楽しかったです。遠くても行く価値があると思いました。また参加したいです。(信大１年女子)

・青木村ウォークのつどいは残念ながら子どもは１人だけの参加でした。ですが、地域の方が大勢参加されていてお話することができました。また、先輩方ともたくさんお話ができてとても良かったです。１年生から参加できてとても良かったと思います。

(信大１年女子)

・人生で初めて、文化の日を満喫できたように思います！地域の方々と共に、秋のきれいな紅葉の中、たくさんの歴史的建造物や遺産に触れることができてとても幸せに思いました。歩き終わった後は足が疲れていましたが、「参加した全員で歩き切った」という達成感があり、強く連帯感を感じました。機会があったらまた参加したいです。(信大３年女子)

今回は子ども１人の参加でしたが、地域の方とも交流しながら、ウォークできました。また、松本から信大１年生が２名参加してくれました。初めての青木村ということで、緊張や不安があったかと思いますが、そんなことを感じさせないくらいの若さとパワーで、場を盛り上げてくれました。

地域の方と学生、学生と子ども、子どもと地域の方など、本当にたくさんの関わりがあった、ウォークのつどい。来年はより多くの学生で参加させていただけたら、と思います。

７．青木村産業祭

青木村産業祭とは、道の駅で毎年開催されます。例年同様、「えがおクラブ」はブースを出店しました。内容は「松ぼっくりでクリスマスツリーを作ろう」と「わりばし鉄砲で的あてゲーム」の二つです。クリスマスが近かったこともあり、ツリー作りには小さい子どもからお年寄りの方まで、幅広い年齢層の方が多く参加してくださいました。

＊参加した学生の感想

・青木村の人たちはとても温かくて、心から楽しい！と思えました。様々な世代があんなに集まる瞬間は滅多に見られないから新鮮であり、楽しかったです。(信大３年男子)

・初めて参加しましたが、とても楽しく過ごすことができました。青木村の方々、活動に参加していた皆さんのあたたかい心にふれることができ、よかったです。主にプラバンをやらせていただきましたが、縮む様子をじーっと見る子どもの真剣な表情や、完成した時の嬉しそうな表情を見ることができ、エネルギーをもらったような気がします。初めは話しかけてもなかなか反応してくれなかった子が、段々話してくれるようになり、最後は似顔絵まで書いてくれました。嬉しかったです。(信大２年女子)

・前回の活動の時よりも、子どもたちと話すことができたので良かったです。青木村はとっても元気！青木の人たちは明るくて気さくだな、と感じました。とても楽しく参加できてよかったです。(信大３年女子)

今回の活動ほど、青木村の方々と交流できた活動はなかったように思います。学生の感想からも分かるように、青木村は私たちに言葉では言い表すことのできない素晴らしい何かを与えてくれています。人と出会い、つながることがこれほどまでに温かいものであると実感できることは、他ではなかなかできない経験だと、感じました。

8．子育てフォーラム青木 2009

青木村の保育園、小学校、中学校の先生方をはじめ子どもに関わる地域の方々、また青木村で活動させていただいている信州大学、清泉女学院短期大学の学生も一堂に会しました。フォーラムの前半では「進んであいさつ、元気な子どもを育てるために」「学ぶ意欲のある児童・生徒を育てるためにはどうすればよいか」「子どもたちの人間関係づくりについて考える」という３つの分科会に分かれて、子どもに関わるそれぞれの立場から意見を述べ、話し合いをしました。

＊参加した学生の感想

・初めて行ったが、良い経験をさせてもらったように思う。小学校や中学校の先生方、地域の方が集い、その真剣な姿を見させていただくことで、「村で子どもを育てる」といった理念を改めて実感することができた。(信大３年男子)

・とにかく学校の先生と地域の方の話し合いに自分も加わることができ、うれしかった。今年は青木村だけでなく、様々な地域に赴いたことによって、青木村の子どもたちを客観的に見ることができた。教育は実践だけでもだめ、理論だけでもだめだ、と感じることができた。(信大３年男子)

・地域の保護者さんや学校の先生方が「青木の子どもたち」について熱心に語り合う姿を見て、“子ども一人を育てるには村一つが必要”という信念が、地域に深く根付いているのだなということを実感しました。また、私たち学生を、村の一員として子どもたちへの教育に参加させていただけているのだ、ということを改めて感じ、何だかとても不思議な感覚でした。これらの経験を当たり前に思わず、これからもずっと学び続ける心を持っていきたいです。(信大３年女子)

学生にとって、とても良い学びの場となっていることが感想から分かります。「信大青木村えがおクラブ」が発足してから今年で５年目。少しずつではありますが、地域の方や子どもたちとの信頼関係は着実に築かれていると思います。今後も、青木村の教育に携わらせていただいている者として、このような機会を大切にしていきたいと思います。

◇他大学から見た「青木村えがおクラブ」

青木村には、学生教育ボランティア「わこうど」があります。信州大学の他にも、長野大学、文教大学、清泉女子短期大学が参加しています。そこで、「えがおクラブ」の活動に参加してくださった他大学の学生２名の感想を記載します。また、「えがおクラブ」プラザ長の感想を〈実践から得た「臨床の知」〉として記載します。

青木村での「えがおクラブ」の活動に参加させていただきました。初めて参加したのは、８月に行われた青木村の夏祭りでした。当日は悪天候で目的の活動はできなかったのですが、青木村の文化や村民の方の温かさに触れることができました。初めて青木村に行ってこのような

場に参加できたことは、青木村を知るためにふさわしかったと思います。その後に大学生同士の交流会をして、信州大学や文教大学、長野大学の学生と関わり、共に青木村で活動しているので共感することも多くあり、良い刺激になりました。

また、「えがおクラブ」の学生の方々には、青木村に行く時に何度も誘っていただいたり、他にも様々な活動の時に声をかけていただいたりしました。皆さん気さくで明るくて、すぐに仲良くなれたので、楽しみながら活動できました。私は学生生活が残りわずかですが、皆さんともっと一緒に活動したいと感じました。そして後輩にも、様々な活動のことを伝えて、今後も信州大学の皆さんと共に活動していけたら良いなぁ、と思いました。

（清泉女学院短期大学２年　矢澤ひかり）

今年度、信州大学の企画に参加させていただき、ありがとうございました。小岩井先生のご縁から、信州大学の方を通して、自分が関わっている「地球クラブ」を少し離れて、活動に参加することができました。

青木村の子どもたちと一緒に崖の上のポニョに出てくるポンポン船を作る企画、小岩井先生が校長先生をしていらっしゃる大岡村での大根プロジェクトに参加させていただきました。

企画を通して自分たちとは違い、しっかりと計画が立ててある企画を知ることができました。ポンポン船を作る企画では、きちんと事前にやり方を確認し、決まった時間の中で楽しくできるのかということが感じられました。「地球クラブ」では、なかなか時間内にやるということはないので、私にとっては新鮮なことでした。そして、時間の中でいかに楽しく遊べるかということを知ることができた企画でした。そして、信州大学の企画を通して、「地球クラブ」だけでは知り合えることができない方にたくさん出会えることができました。いろんな縁ができてとても良い年になりました。企画を通してさらに、人の温かさにふれ合うことができ、嬉しかったです。

来年度も今年度よりもっと信州大学の人と交流し、お互いの意見交換をし、お互いを高め合えるようないい関係作りができればいいなと思っています。今年度はありがとうございました。来年度もよろしくお願いします。　（長野大学３年　佐藤静香）

◇実践から得た「臨床の知」

“再会の喜び”が“絆”を生む

市川香織（教育実践科学専攻３年）
中村恵理（芸術教育専攻３年）
宮尾　亘（教育実践科学専攻３年）

「青木村えがおクラブ」へ参加しはじめて２年が経ちました。子どもたちや地域の方との絆の深さ、愛情だったら、どこのプラザにも負けていないと私は思います。長野市からは少し距離があり、あまり多く足を運ぶことができないからこそ、一度の出会いがとても貴重な青木村。だから私たちはそこへ行く度に、子どもたちや地域の方々との“再会の喜び”を全身で感じ取ります。

私の名前を呼んで、抱きついてきてくれる子。

「通学合宿にいた子じゃないかい？」と声をかけてくれる地域のおばあちゃん。

青木村へ行くと、自分の居場所があることの幸せが、噛み締められる瞬間の連続です。しか

し、活動を振り返ってみると、多くの反省点があります。活動や個人的な言動に対しても、挙げ始めたらきりがありません。けれど青木村は、私たちにそういう場を与えてくれています。叱ってくれます。そう考えると私たちは、青木村の子どもたちの教育に参加しているというよりもむしろ、教育してもらっている立場でもあることが分かります。青木村で活動していて学んだ多くのこと。感謝やお陰さまの気持ち、ご縁、お酌の文化、社会力など、どれもこれからの人生をもっともっと幸せに生きていく秘訣だと思っています。

最後になりましたが、青木村教育委員会のみなさま、学生のことをいつも気にかけてくださり、本当にありがとうございます。その支えがなければ、私たち「えがおクラブ」は成り立ちません。他にも小学校・中学校の先生方、食生活改善推進協議会のみなさん、くつろぎの湯の方々、青木村児童センターの先生方、そして地域のみなさんや子どもたちなど、本当にたくさんの方に支えられて、今年度も充実した活動を無事に終えることができました。これから先もずっと、この「えがおクラブ」がたくさんの人に愛され、また成長し続けることを心から祈っています。一年間ありがとうございました。

◇地域の方からの評価

「豊かな放課後、ありのままの子どもたちと過ごす時間」

青木村児童センター所長　**髙田玲子**

「先生、さようなら。」

学校の玄関を出た時から、子どもたちの大好きな放課後が始まります。

青木村児童センターは、青木小学校の敷地内にあります。距離は子どもたちの昇降口からわずか50メートルほどです。子どもたちはこの50メートルを走って帰ってくる間に、規則正しく生活する小学校の児童から、放課後のギャングへと大変身を遂げます。

青木村児童センターの放課後は、近くを流れる浦野川に飛び込み魚やカニを捕まえる子、サッカーや野球のボールを追いかけ走り回る子、天に届きそうなくらい高くブランコをこぐ子、ひたすら水路を掘りバケツで水を流して歓声をあげる子、折り紙やお絵かきをする子など様々です。

ここでの放課後は、それぞれが好きなことを好きなだけやる時間です。男の子、女の子、違う学年が入り交じり、くっついたり離れたりしながら遊びに熱中します。こんなふうに時間を忘れて子どもらしく遊ぶ時間を、大切にしてあげたいと思います。

児童センターには様々な立場の大人もやってきます。お迎えに来るお父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん。地域の方が講師になり、たくさんのことを教えてくれる水曜クラブの先生方。それと、「青木村えがおクラブ」の皆さん。うれしくて体ごと気持ちをぶつけてくる子どもたちに、びっしょり汗をかきながら体当たりで関わってくれています。こうして子どもたちが多くの人と関わりを持つことは、人として生きていく上でとても大切なことだと思います。

青木村へ来てくれた学生さんと一緒にいるとき、子どもたちは本当に楽しそうにしています。子どもたちの笑顔は何よりも嬉しいものです。児童センターで過ごす時間は、学校が終わって家に帰るまでのわずかなすき間の時間です。でもこの時間がとても大切だと感じています。忙しい時間の合間を見つけて、子どもたちのために遠くからかけつけてくれる「えがおクラブ」

の皆さん、本当にありがとうございます。

青木村のありのままの子どもたちと過ごす時間が、教育の道を目指す皆さんにとって勉強の場になればと願っています。

◇青木村教育委員会からの評価

子ども、大学生、そして自分

青木村教育委員会事務局　上原博信

「青木村えがおクラブ」の大学生のみなさん、平成21年度も大変お世話になりました。お互い今年の活動を振り返ってみましょう。

あおきっこ合宿、長泉サマーキャンプ、図書館フェスティバル、ウォークのつどい、産業祭、YOU 遊フェスティバル、冬の大三角、児童センターボランティア、一年を通じて青木村の子どもたちのために青木村まで足を運んでいただき感謝いたします。

特に新規事業もなく、内容を大きく変更もしていませんが、どの事業、活動も新鮮で、様々な思い出が書ききれないほど思い出されます。大学生も代替わりをし、市川さん、宮尾さんを中心に新たなメンバーも多く参加いただき、子どもたちももちろん、私にとっても大学生のみなさんが青木村へ来る日が楽しみです。大学生のみなさんも楽しいですか。

しかし、楽しいばかりではいけません。大学生のみなさんが、青木村へ来るときは、それ以前、当日、青木村の人が影で支えていることを忘れてはいけません。くつろぎの湯のみなさん、学校の先生、児童センターの先生方、食生活改善推進協議会のみなさん、文化会館の清掃のおばちゃんなど、多くの青木村の人々がみなさんを見守っていることをぜひ頭に入れておいてください。そうすれば、自然とあいさつなどができると思います。青木村では信州大学だけではなく、他大学の学生も多く活動しています。比較をする人もいると思います。「さすが信大生！」と言われるよう学生のみなさんも一年の振り返り、活動の振り返りをしてください。かといって周りばかりを気にして萎縮してしまわないでください。どんどんみなさんが考えたこと、感じたことを、青木村の人たちにぶつけてきてください。きっと話を聞いてくれるとおもいますよ。みんなでよりよい活動を作っていきましょう。元気よく、はつらつと、お互いに取り組んでいきましょう。

今書いたことは、すべて私自身に対して書いたことでもあるのです。私が同じ信大生だったことでみなさんに親近感が強く、気づくと学生の皆さんと一緒になっていることが多々ありました。みなさんに遠慮して言えなかったこともありました。二日酔いで迷惑をかけたこともありました。私自身学生のみなさんや子どもたちに何かしてあげられたか、伝えられたかと反省をしています。ただ、唯一言えることは、自分自身の精一杯をだしたということです。みなさんも大学、青木村、様々な場所で学んでいると思いますが、その時その時の精一杯の自分を出し切ってください。この大学生活を大切に過ごしてください。眠くても起きて講義に行ってください。寝ていても、大学で講義を受けても同じ時間が流れていきます。一瞬一瞬、一日一日、の積み重ねです。ひとつでもあの時やっておけば、ということがないよう私も日々過ごしていきたいと思います。大学生のみなさんと精一杯あおきっこのため、自分自身のため、多くの支えていただいている皆さんのため、協働していきたいと思います。

今年度もありがとうございました。平成22年度もよろしくお願いいたします。

麻績村 dE 遊ぼう！（5年目）

プラザ長　布山　朋和（教育実践科学専攻３年）
副プラザ長　田畑隆太郎（教育実践科学専攻３年）

○学生スタッフ名

布山　朋和（実３）	田畑隆太郎（実３）	伊藤　香澄（実４）	吉池　潤奈（実４）
小西　　舞（実４）	平野　　結（障４）	高池　亮輔（保４）	宮川はるな（言４）
三浦　裕子（社４）	市川　香織（実３）	小林　智子（実３）	渋谷美奈子（実３）
宮尾　　亘（実３）	飯島　理沙（理３）	島田英一朗（理３）	鈴木　　梢（理３）
鈴木　裕香（理３）	滝沢雄太郎（理３）	西澤　直城（理３）	塚原　昌裕（社３）
藤田　裕介（社３）	肥野沙也加（野３）	島崎　涼子（芸３）	東野　千尋（芸３）
中村　恵理（芸３）	岩本　芙美（障３）	荻原　知子（実２）	柴田　　計（実２）
丸山　絹代（実２）	髙見沢　誠（理２）	三石　梨沙（理２）	竹中麻由子（生２）
山越　　俊（社２）			

○参加者数

子ども約 80 名　おみ図書館運営委員会の方約 15 名　麻績村教育長
昔遊びの会の方約 30 名　保護者の方約 40 名

○連携団体

麻績村立麻績小学校　おみ図書館　麻績村教育委員会
昔の遊びの会　古遊会　G-kid's わくわくクラブ

○プラザの概要

東筑摩郡麻績村。私たち「信大 YOU 遊世間」が、この場所で「麻績村 dE 遊ぼう！」として活動を発足してから５年目を迎えました。麻績村は信州大学から少し離れた場所にあるのですが、多くの学生が麻績村で行われる活動に参加しています。その理由としてはやはり、麻績村のゆったりとした雰囲気、麻績村の方の温かさ、まだまだ半人前な私たち学生を受け入れて下さる寛大な心持ちがあるからこそであり、そんな素敵な麻績村に学生が魅力を肌で感じている、感じてみたいからだと思います。このプラザは、活動の主な拠点地である「おみ図書館」で、運営委員会の方々を中心に活動を行っています。麻績村での活動は幅が広く、特に地域の方々・教育委員会の方々などの協力のもと行われる、昔の遊びや麦まきといった伝統的な文化に触れることができる企画や、「寺子屋道場」という麻績村の郷土を学ぶことができる企画などがあります。このなかに、私たち「信大 YOU 遊世間」も企画者・参加者両面の立場で参加させていただいています。

今年度の学生企画は「麻績村ウォークラリー」、「ハロウィン」などを行いました。文面上は簡単に述べることができますが、麻績小学校の先生方、地域の方々、教育委員会の方々、保護者の方々、といった大変多くの方の協力があってこその活動となっていることは、決して忘れてはいけないものだと強く感じます。特に、今年度の学生企画は、麻績村を回る活動が占めていたので、安全面も含め、より多くの方々に支えとなっていただきました。このような協力は簡単に言うほどできるものではありません。先生方、地域の方々、教育委員会の方々、保護者の方々、各々の中で、“自分が子どもにしてあげられること”を意識し、少しでも子どものために提供していきたい、協力したいといった子どもに対する強い“思い”が

あるからこそできるものではないでしょうか。この思いを感じながら、私たちは活動しています。

「麻績村 dE 遊ぼう！」にはもう一つ大切な活動があります。「G-kid's わくわくクラブ」さんとの活動です。こちらは麻績小学校に通う子ども・特別支援学校に通う子ども、合わせて十数人が参加する活動です。活動は主に保護者さんが企画してくださり、月に１回程度のペースで活動が行われます。図書館で行われる企画と比較すると、一人ひとりの子どもとじっくり関わることができる活動でした。

このように、麻績村では“子どもを思う気持ち”があふれていることを実感することができ、そのなかで私たちは多くの方と連携・協力し合いながら活動を展開しています。

○一年間の活動

【おみ図書館との連携企画】

活動日	活　動　内　容
５月16日	学生企画①（麻績村ウォークラリー）
６月６日	昔の遊び①（竹馬作り）
20日	昔の遊び②（麦刈り、山菜採り）
８月７日	夏休み寺子屋道場（講師：宮下健司先生）
10月24日	学生企画②（ハロウィン）
11月７日	昔の遊び③（麦蒔き）
１月20日	木採り（たたきごま用）
１月23日	昔の遊び④（たたきごま作り）
２月３日	放課後子ども教室（たたきごま大会）
２月６日	学生企画③

【G-kid's わくわくクラブとの連携企画】

活動日	活　動　内　容
４月25日	紙ひこうき大会＆お花見
10月24日	ハロウィンパーティー（夕方）
12月23日	クリスマスパーティー in シェーンガルテンおみ
１月	新年会
２月	信大４年生を送る会
３月22日	卒業式＆映画鑑賞

◇実践から得た「臨床の知」

子どもの主体的な姿を大切に

布山　朋和（教育実践科学専攻３年）
田畑隆太郎（教育実践科学専攻３年）

１．はじめに

昨年度の「地域の方々との積極的な関わり」という新たな取り組みを基礎として、私たちは今年度活動を行う際に“柱”としていきたいことを考えました。それは「子どもの主体性」で

す。そして、それを柱に据えた上で、「互いに影響し合い」、「伝統の架け橋」になれることを意識した１年にしていこうという意気込みで、活動をスタートしました。

まず、「子どもの主体性」について、昨年度までに様々な活動を展開してきたのですが、ほとんどすべての活動でこちら側が準備を行い、単に子どもが参加しているという、どちらかというと受動的な活動を行っている印象を受けました。確かに、子どもが一から企画して活動を行うことは“子ども発信”であり、“子どもの主体”的な姿を見ることができるかもしれません。しかし、そういった活動には私たち学生だけでなく、麻績村の方々の大きな負担にもなってしまい、相当しっかりした土台がない限り、簡単にはいかない活動であると感じます。そこで私たちは、極端に考えるのではなく、私たちが用意する活動のなかでも、その中で子ども自身が主体的に発見し、取り組めるような工夫をしていこうと考え、今年の活動を進めていきました。

私たちはこの“柱”を大切にし、さらに「互いに影響し合い」、「伝統の架け橋」を意識して活動を行いました。はじめに「互いに影響し合うこと」ですが、“互い”というのは「麻績村・子ども・学生・地域の方々・保護者の方々・先生方」です。一つの活動を行う際にも、様々な立場の人間が関係し合います。そのなかで、立場に関係なく一人ひとりの行動が周囲の人に影響し、新しい発見・学びを得ることが大切であると感じます。例えば、子どもの姿を見る際も、直接子どもと関わっている時と、保護者さんなどの大人と関わっている場面を第三者として眺める時とでは見え方が変わってくると思います。また、子どもの姿について保護者の方々や先生方と意見の交換をすることによって新たな視点で子どもを見ることができるのではないでしょうか。こうした互いの影響を大切にしていこうと私たちは考えました。

次に、「伝統の架け橋」ですが、「子ども・地域の高齢者の方々」という関係のなかで、私たちも共につながり、伝統的な文化を共に学び、共に伝えていきたいという思いから“柱”として据えました。例えば、昔の遊びである「たたきごま」の活動を行う際、今までであれば子どもと一緒に参加するという立場でした。しかし私たちは、子どもと共に学ぶことを大切にしながらも、地域の方々から直接的に伝統的な文化を学び、地域の方々と共に子どもに伝えられるように、準備段階（木を採ること）から参加させていただくことにしました。

こうした３点を活動の中心に据え、私たちは麻績村での活動を互いに関わり、楽しむことができるようにつくっていきたいと考えました。

２．伝統的な遊びのなかから学んだもの

麻績村での活動には、時期に合わせた様々なものがあり、行われていますが、その中の１つとして「昔の遊び」が活動として位置付けられています。今年は特に、“麦”を子どもたちの身近なものとして展開していくという目標のもと、活動を行ってきました。2009 年６月 20 日、晴天に恵まれたなかで「麦刈り」が行われました。子どもたち・学生ともに普段味わえない貴重な体験であったため、最初は麦を刈る難しさ・大変さに苦労する姿が見られました。しかし、地域の方の丁寧な説明によって少しずつ自分自身の身体を使いながら学んでいるように思えました。それだけでなく、今回が２回目・３回目…という子どもも参加していて、子どもから子ども、また子どもから学生へと方法を教える姿も見ることができました。地域の方から教えていただくだけでなく、それを他の子どもにも教えていくという、少し幅の広がる活動になっていたように思えました。

他にもこの活動のなかで印象に残る体験をすることができました。ある子どもに、「この麦を使って、何を作ることができるか知ってる？」と聞いてみた時がありました。私は、そこまで深く考えずに聞いたのですが、その子は「虫カゴを作れるんだよ！」と自分の知識に自信を持ち答えただけでなく、丁寧に作り方まで説明してくれました。さらに、「おばあちゃんと一緒に麦茶も作ったんだよ、あとパンも作ってみたい！」と語ってもくれました。私は、その子どもの麦に対する知識をはじめ、興味・関心を自分自身で持っている姿を見て、“麦”の与える影響は相当大きいものなんだなと実感させられました。

そして 11 月7日、麦まきが行われました。今年は麦を育てる段階から活動を行い、麦に対する愛情や、一年を通して麦に触れていく連続性・達成感を大切にしてきました。そのため、この麦まきは、より重要な役割を担っているということが言えると思います。実際に活動を見てみると、麦刈りの時のように、自分自身の体を使い一生懸命に取り組み、子ども間・学生間で楽しく且つ農業の大変さを味わいながら活動を行っていました。参加した子どものなかで、麦まきを経験したことがあるという子どももいたのですが、大半が経験したことがないという子どもでした。私が不意に「これがホントに麦になるんだね…」とつぶやいたときに、「えー、ふっくん知らなかったの！？来年になったら大きく育つんだよ！」と教えてくれました。この時、麦まきを経験していなくても子ども自身、何かしらの形で知識を得ているんだなと感じました。さらに麦まきをすることによって、無意識的に、その先（育っていく過程、結果）を意識するようになるんだなと思いました。その意識をするという経験をした後の麦刈りと、ただ麦刈りをするだけとでは、相当な違いが生まれてくると思います。改めてある一つの事柄に注目し、連続した体験を行う大切さを学ぶことができたように思います。

さらに欲を言えば、約 80 名（参加者数）の子どもが1年間を通して行う“麦”の活動に参加してくれたら嬉しいのですが、伝統を守るという意味だけでなく、麻績村全体が連携して子どもを育てていくという大切なことを意識しながら、私たち学生も「昔の遊び」に関わっていきたいです。

３．学生企画のなかから学んだもの

≪麻績村 dE ウォークラリー♪≫

今年最初の活動を何にしようかと悩んでいた時、まず自分たちが麻績村のことをもっと知りたい、子どもたちと一緒に麻績村を探険したいという声が上がりました。昨年もそうだったのですが、春の気持ち良いこの時期に外で活動したいという思いもあり、そんな所から、「ウォークラリー」をすることが決まりました。

事前に調べなくてはならないことが多くあったので、図書館の先生方に協力していただき、実際に麻績村を回りながらどんな所に行くかを検討しました。安全面、時間的な距離、ポイントになりそうな場所などを考慮してコースを決定し、コース上の自然物や建造物に関するクイズを考えました。チェックポイントを回りながら、いかに多くそのクイズに正解できるかというスタンプラリー形式にすることが決まりました。当日になるまで参加する子どもの人数がわからないので、大人数にも対応できるように、学生の人数確保や物品の準備を前日までにしっかり行い、当日を迎えました。

当日は急に雨が降り出し、屋内で名札づくりやレクをやることにしようかとも考えたのですが、子どもたちは合羽を着てでもウォークラリーをやりたい様子であったので、決行すること

になりました。雨で濡れた地図を握りしめながら、チェックポイントを見つけると駆け寄っていく子どもたちの様子はとても生き生きとしていました。

参加した学生からは、

・「雨の中だったが、子どもたちはとても元気で、引っ張られるようにしてコースを回った。時間調整が難しいところだが、班の中にはもっと歩きたがる子どももいた。」

・「短いコースだが、子どもに対する学生の人数が少なかったので安全面が心配だったけれど、図書館の方々も協力してくださり、要所要所でしっかり注意しながら回れた。」

・「即席で作った班なので、普段はあまり話さない友達と一緒になってしまう班もあったが、その班の中でリーダーが出てきたりして、子ども同士の関わりも見られてとても良かった。」

・「学校の本当に近くのコースだったのに、子どもたちも全然気にも留めなかったポイントがクイズになっていたりして、私たち学生にとっても子どもたちにとっても麻績村を知るいい機会だった。」

などという感想があがりました。

当日になっての悪天候や班ごとの時間調整など難しい場面もありましたが、何よりもまずは全員が安全に回れたことが良かったです。地図や賞状などの物品準備や、図書館の先生方との連絡、学生が事前にコースを回っていたことなど、前日までの準備がしっかりできていたことが子どもたちの生き生きとした笑顔に繋がったのだと思います。また、このウォークラリーという外に出る活動を通して、初めて参加した学生も、麻績村に触れることができました。一人ひとりが麻績村で活動させていただいているということを感じることができたものであったと思います。

≪ハロウィン☆≫

毎年続いているこの活動は、一年の中でも子どもたちが一番楽しみにしている活動です。内容は、仮装した子どもと一緒に村の地域の高齢者のお宅を回りお菓子をもらい、そのお礼に事前に作っておいたメッセージカードを渡すというものです。

昨年度の活動で外に出ることを始めたので、今年もその流れを引き継ぐことになりました。ただ、昨年での反省で、お礼づくり・家回り・交流などやりたいことを詰めすぎたために時間的に窮屈になってしまったということがあったので、今年はお礼づくりを簡略化し、お菓子をもらう入れ物は作るのではなくこちらで用意した袋を渡すことにしました。その分の時間を交流にあて、地域の方へのお礼のメッセージカードを渡した後に写真を撮り握手をすることを計画しました。

事前の準備では、学生が集まる機会をなかなか作ることができず、当日にほとんどを説明する形になってしまいました。参加した学生はそれぞれがしっかりと衣装を用意し、当日も臨機応変に考えて行動してくれましたが、事前に全員が内容をきっちり把握しておくことも大切な準備の一つだと知りました。

当日、予想の 40 人をはるかに上回る 70 人の子どもたちが活動に参加してくれました。谷口先生も「嬉しい誤算だった。」とおっしゃるように、子どもたちみんながこのハロウィンをとても楽しみにしていたということが、仮装からも伝わってきました。しかし、大人数になってしまったことでメッセージカードやお菓子袋が足りなくなり、学生が焦ってしまい、子どもた

ちの意識を集めずに話をしてしまうなど、落ち着いた行動・判断ができなくなっていました。橋渡先生も「人数と時間を見て、切っていくところは切っていかなくてはいけないし、子どもの心をギュッとつかまないと説明も指示も通らない。」と指摘してくださったように、その時々の状況を見て、柔軟に対応していく必要がありました。

グループごとにお宅を訪ねる場面では、子どもたちの大きな声での「トリック・オア・トリート」という声が響き、お菓子を下さる地域の方もとても嬉しそうでした。子どもたちから握手を求めたり、写真を撮ろうと呼びかけたりする姿はとても微笑ましく、素敵な光景でした。ただ、交流をメインにすえたのですが、時間的な余裕がなく、どうしても希薄になってしまう部分がありました。地域の方と交流する少ない機会の中で、「少ない時間の中で何をするか」を明確にするべきだという反省もあがりました。一つのグループに子ども 15 人程に対して学生が２人だったので、安全面でも先生方や保護者の方々に大変お世話になり、改めて外に出て活動することの難しさを感じました。子どもたちにとっては普段できないような活動で、図書館に帰ってリフレクションをしながら「楽しかった！来年も絶対出たい！」と満面の笑みで話してくれていました。

学生の感想として、

・「縦割りのグループだったので、地図を持った一年生に六年生がサポートしたりする姿があった。決められた範囲の中で自由に回れたことは、子どもの主体的な活動に繋がっていたと思う。」

・「お菓子を渡すときの地域の方の表情、もらうときの子どもたちの表情、とてもキラキラしていて、そういう姿を見れたことが良かった。先生方や保護者の方が協力して臨機応変に対応してくださったから良かったが、安全面から考えると事前にしっかりと連携してこちらの意図を伝えておく必要があったかもしれない。」

・「初めて参加してみたが、これが連携っていうものなのだと思った。自分も将来教師として、このように本当に三者が連携した企画に関わりたい。」

・「一軒目では握手を忘れていたのに、一人の女の子が思い出したのをきっかけに二軒目から自然に握手するようになっていた。とても素敵な姿だと思った。」

というものが出ました。

この活動を通して、自分たちがたくさんの人の支えに立って活動しているのだと実感しました。図書館の先生方には、村内からハロウィンの訪問が可能なお宅を探していただき、お菓子の用意もしていただきました。協力してくださったお宅の方は、活動前に挨拶に伺った際も嫌な顔一つせずに迎えてくださり、子どもたちにも笑顔でとても丁寧に接してくださいました。保護者の方々にも路を歩く際、安全面の管理に大変協力していただきました。どんな活動にするかを考えるのは学生だが、それはたくさんの人の支えがあってこそできるもので、その人たちは「学生が企画する」ということに対してもいい経験になるようにとあたたかな目で見守ってくださっています。活動することだけに集中するとすぐ忘れてしまいがちだが、自分たちはたくさんの支えてくださっている方々の存在があって、初めて麻績村で活動することができているのです。今年のハロウィンでそのことに気付けたことは、自分たちの財産になると思います。そして、この財産を次の代にしっかり引き継ぎ、来年のハロウィンは、是非「感謝」の気持ちがこもった活動になってほしいと願います。

4．G-kid's わくわくクラブとの関わりのなかから学んだもの

私は図書館企画と共に、Gキッズの活動も大好きです！両者にそれぞれの素敵な面があり、日々学ばせていただいています。Gキッズでは、十数人の子どもが参加し、学生とほぼ1対1の形で関わり合いながら活動を展開しています。この1対1という形からなのか、毎回気がつくことや思うことがあります。「この子はこういう話題の時にいっぱい話してくれたなぁ」とか、「今日は、ゆっくり座りながら会話を楽しむことができたなぁ」など。G キッズとは別の機会にも様々な活動をさせていただいている立場からすると、このようにバタバタせずに、じっくり子どもについて考えられる活動は、私たち学生にとって大変うれしいことであるし、そのことが子どもの新しい見方にも繋がってくるように思います。多数の子どもと一度に関わることが少なく、余裕がある分、一人の子どもでも様々な方向から関わることができ、それによって気がつくこと・学べたことも多々ありました。

さらに G キッズでは、保護者の方と1日中関わることができ、会話を楽しみながら、お子さんの話を聞くことができるということも魅力の一つだと思います。特に私たちは、学校に通う子どもと接する機会なら多少はあると思うのですが、その親御さんと関わる機会は極端に少ないように感じます。また関われたとしてもほんの一瞬で、保護者さんの抱える悩みなども、聞きたくてもなかなか聞くことができません。Gキッズに参加する保護者さんからは、普段の子どもの姿を生の声で聞かせていただいています。

私たちは普段、子どもの姿に注目して活動を行っていますが、保護者さんの考えていること・悩みに耳を傾けることはなかなかできないし、あまり意識できていないのではないでしょうか。Gキッズの活動は私たちに、じっくり考え、新しい「子どもの姿」を発見させてくれる場であり、保護者さんの温かさに触れることができる場でもあります。これからも感謝の気持ちを忘れずに、“身近に触れ合える関係”を大切にしていきたいです。

5．来年度へ向けて

今年は、1年を通して「子どもの主体性」を考えながら活動を行ってきました。子どもが企画することはできなくても、こちらが準備したものの中で子どもたちがどれだけ主体になって取り組んでくれるか、ということを大事にしてきました。とても難しいことで、すぐに成果が出るようなものではなく、来年以降も継続してやっていかなくてはならないと思います。

また、「YOU 遊世間」として、麻續村での活動を通して子どもたちに何を願うのかがもっと明確にする必要があると感じました。今年の「子どもの主体性」というものも、学生の中での共通した軸になりきれていなかったように思います。村の「教育への思い」の中で、1年間どんなことを軸に据えて活動するかを、明確に位置付け取り組むことが必要だろう。そして、6年目となる来年は、この5年間で培ってきた土台の上に「麻續村だからこそ」や「麻續村らしい」が加わった活動が乗っかれば、学生・子ども・地域の方々にとってもより充実したものになるのではと思います。

6．終わりに

1年、経つのは早いです。この実践記録を書いていると、麻續村であった出来事を思い出します。1つの活動の準備なのに、こんなに大変なんだと実感したこと、活動当日に緊張して声が震えてしまったこと、活動前・当日共に学生スタッフや運営委員会の先生方、地域の方々に

協力していただいたこと、一人じゃ活動は作れないということ、麻績村って温かいなぁ大好きだなぁと思うこと、子どもの笑顔がたくさん見れたこと etc.…

毎年、毎回感じている「支え」。今年も多くの方々に支えていただきました。ずっと活動をしていると、それが当たり前のように感じてしまう。学生が、自分たちの考えた企画で子どもたちが楽しそうにしていたり、笑顔が見れると自信になります。しかし、それが自分自身の力だと過信してしまうことで、麻績村の方々の“支え”があったことさえも忘れがちになってしまいます。支えていただいていること、連携していきたいという気持ち。意識するだけで麻績村らしい“温かい気持ちのこもった活動”になると思います。子どもの育っていく姿を、麻績村の方・学生が協力しながら見守り、支えていける幸せな環境を、これからもずっと続いていくことを願います。

最後となりましたが、この１年間支えていただいた運営委員会の先生方、保護者の方々、教育委員会の方々、地域の方々、信大の学生の方々、そして麻績村の元気な子どもたち、本当にありがとうございました！

◇麻績小学校の先生方からの評価

地域・子どもたちを結ぶ活動を振り返って

おみ図書館の活動を「YOU 遊世間」の皆様に支えていただいてから５年目になりました。今年度は、おみ図書館で行っていた活動の「昔遊び」が、途中から子ども教室に移行し、「YOU 遊世間」の皆様には、おみ図書館と子ども教室に関わって活動していただきました。長野から麻績まで遠い距離を子どもたちのために足をお運びいただき感謝しております。

先日、中学２年の保護者の方から、次のような話をお聞きしました。

今年の新年に善光寺へ初詣に行き、以前お世話になった「YOU 遊世間」のお兄さんに出会ったそうです。娘さんは、３年ぶりに合ったお兄さんのところにかけ寄り嬉しそうに話しをしていたということです。時がたっても学生さん方との関わりが彼女の心によい思い出として残っていたのでしょう。本当に感謝です。

１．おみ図書館

子どもたちの姿と成果　　麻績小学校司書　**橋渡久美子**

① 麻績村ウォークラリー

地域に根ざした活動の一つとして、「麻績村ウォークラリー」を行っていただきました。当日前にウォークラリーの場所を事前にチェック、当日もチェックポイントの確認と充分な準備。一生懸命さに頭が下がります。地図を見ながらきらきらした瞳で嬉しそうに、また少しはにかみながら「YOU 遊世間」の方々と遊んでいた子どもたち、回った後の満足げな姿が目に浮かびます。

② ハロウィン

「ハロウィン」は、麻績村で定着した活動になりつつあります。今年は親子参加。しかも、お父さん方の参加もあり、親子で地域を回って楽しむ姿が見られました。ただ、残念だったことは、「ハロウィン」の目的のひとつに、地域の高齢者の方々と関わり方が昨年と同じ課題として残ったことでした。しかし、麻績村行事として定着しそうな勢いの行事として位置づいてきたのも「YOU 遊世間」の皆様あってこそだと思います。本当にありがとうございます。

③　夏休み寺子屋道場

地域を知り郷土愛を育むことを目的とした活動として、今年は、郷土巡りをしました。「YOU 遊世間」の皆様には、子どもたちのサポートをしていただきました。活動に主体的になれない子どもたちをサポートしていただいたと同時に、教員として専門に強いことがどれだけ大切か、情熱を持って子どもたちに関わることのすごさを講師の「宮下健司」先生の姿から感じとって欲しいと思いました。感じていただけたでしょうか。貴重でお忙しい夏休みに一緒に参加していただいて感謝しております。

２．おみ子ども教室

地域の方との関わりのなかで　　おみ子ども教室　**谷口ゆかり**

大麦の活動とたたきごま作りの活動について述べさせていただきます。

この二つの活動は、古遊会・昔遊びの会の皆さんが中心となって進めていただいている活動です。二つの会は、麻績村のパワフルな高齢者の皆さんで構成されている会で、麻績村の知恵袋のような団体です。

①　大麦（麦刈り・麦蒔き）

年度当初、「大麦の活動は日程的に厳しいので今年度はたたきごまの活動を中心に参加する」という計画でしたが、「YOU 遊世間」さんから「できるかぎり参加したい」というありがたい申し出をいただき、「麦刈り・脱穀・麦茶作り・虫かご作り・麦蒔き・麦踏み」とある活動の中で、「麦刈り」「麦蒔き」にご協力いただきました。

学生の皆さんが参加して下さることで、村の方と児童たちのコミュニケーションがよりとりやすくなったり、児童のやる気が増したり、学生さんたちの初々しい反応が村の方たちの喜びや意欲につながっていると、いつも感じます。

古遊会の代表の宮嶋さんは「おめぇたちな、自分でいろんなこと経験しなきゃ良い先生にはなれねぇんだからな」とおっしゃいます。

二つの会の皆さんは、経験の塊です。お話からはもちろんですが、厚みのある手や作業をする無駄のない動き、穏やかな笑顔、それらのものから伝わるものがきっとあると思います。

麦蒔きでは、今年度「YOU 遊世間」さんの畝ができました。児童たちの蒔いた麦と一緒に雪の下で春が来るのを待っていると思います。春にどんな芽が出るのか楽しみです。

②　たたきごま

「今回は、準備から参加する」ということで、雪深い山へ古遊会の皆さんと木を採りに行く活動からご協力いただきました。たたきごま作りのとき、その様子を児童たちに紹介してもらいました。以前から、自分たちのしている活動がどの様に支えられているか伝えていきたいという願いがありました。それが今回、「YOU 遊世間」さんによって実現できたことは大きな成果であると思います。ありがとうございます。

終わりに、木を一緒に採りに行った折の代表の感想を一言。

「今日は、山で大学では教えてもらえない事を沢山体験してきたから、これから他の学生たちや子どもたちに伝えていってもらいたいと思っている。今後に期待しているよ。」

３．これからの方向

村の子どもたちを取り巻く状況が変わってきました。麻績村では、様々な子どもたちへの活動が出てきましたが、残念なことに村としての長期的な子どもたちへの支援がはっきりしないままの状態が続いており、「YOU 遊世間」の皆様も活動しにくい面があったと思います。麻

績村に来てどのような成果を感じていらっしゃるのか、いささか不安に思う面もあります。

また、今年は「YOU 遊世間」が麻績で何をしたいのか、何を求めているのかが、こちらでもつかみにくかったのも事実です。子どもたちと接する時に自主性を尊重する場面と、ここはという時の関わりは、ねらいがはっきりしていると自ずから出てくるものと思います。また、責任者以外のいっしょに活動してくださる方々が、活動のねらいの共通認識が薄かったことを今年度は、感じました。子どもたちに迎合するのではなく、何を求めて活動するか、参加者全員が共通理解できると、更によい活動になっていくと思います。そのためには、私たちもどのように関わっていくのがよいのか課題が残りました。

来年度は、麻績村の子育て支援の全体像ができそうです。そこで、これまでの活動を総括し、「YOU 遊世間」の皆様の子どもたちを思う温かさと若さと感性を生かした、更に有意義な活動ができることを期待しております。来年度もいっしょに活動できることを願います。よろしくお願いします。

おみ図書館は、学校と一般図書館と一緒になった特異な図書館です。今年は、図書館の理念をしっかりお伝えできないまま活動に入ってしまった感があり私の反省です。また、地域の方々と一緒の活動がなかったことも反省です。おみ図書館を軸に子どもたちのために懸命に活動してくださる地域の方々と交流して共に運営していく事業を入れていくことで、子どもたちにとっても、「YOU 遊世間」の皆様にとっても、村の方々にとっても、互いに得ることが多いと思います。

来年度は講座の運営だけでなく子どもたちを一緒に育てていく根っこの共通認識を持ち共に活動できたら幸いです。

4．G-kid's わくわくクラブ

かかわり　　麻績村　G-kid's わくわくクラブ代表　**石田恵子**

今年度で５年目を迎えた「G-kid's わくわくクラブ」の活動ですが、ここにきて今まで参加してくださった学生の皆さんとのかかわり方について改めていろいろと考えることの多い１年でした。

当初から、子どもたちと一緒に学生の皆さんにもいろんな経験をしていただきたいと思っていたこと、活動に参加していただいたときはできるだけ自宅に帰ってきたような気分になってもらいたいという保護者の思いなどがあり、急にかかわり方を変えていくのではなく、今まで通りかかわっていくことにしました。しかし、今年度は大きな活動がなくほとんど学生さんたちの顔を見ることも少なく残念でした。

次年度は、できるだけ元に近い活動を通して、関わり合いながらお互い向上していける関係になれたらと考えています。

いつも皆さんには、ご協力していただきありがとうございます。

信州すざか農業小学校豊丘校（４年目）

プラザ長　西澤直城（理数科学教育専攻３年）
副プラザ長　鈴木　梢（理数科学教育専攻３年）

○学生スタッフ名

西澤　直城（理３）　鈴木　梢（理３）　島田英一郎（理３）　滝沢雄太郎（理３）

○参加者数

子ども 51 名

○連携団体

須坂市教育委員会　信州すざか農業小学校豊丘校

○プラザの概要

(1)子どもたちの健やかな成長に欠かせない自然・体験活動不足の現状を考慮し、子どもたちがたくましい精神力・想像力を身につけることを願い、総合的・自主的な体験活動の場として、年間を通した農業小学校を開設する。

(2)子どもたちが、異年齢の子どもたちや保護者、地域の大人(主に高齢者)と触れ合うことにより、相互の仲間づくりや地域連帯感を養うとともに、地域の文化に触れることにより、ふるさと須坂の良さを再発見する手助けをする。

(信州すざか農業小学校豊丘校開設要項より抜粋)

という趣旨のもと、須坂市豊丘「そのさとホール」及び豊丘地域公民館、農地（田及び畑併せて 1,800 平方メートル）で活動が行われている。

年間の活動計画等は農家先生と須坂市役所の方の決定に基づいて行われる。「YOU 遊世間」としては今年で４年目の活動となるが、昨年から須坂園芸高校も加わり、学生・高校生が共に農家先生と子どもたちをつなぐ役割を果たしている。

○一年間の活動

月　日	授　業　内　容
4月18日	・入学式・オリエンテーション・ジャガイモの植え付け
5月9日	・トウモロコシ、ネギの植え付け・みそ仕込み作業
5月23日	・田植え
6月13日	・サツマイモ苗の植え付け・大豆の種まき・畑の手入れ
6月20日～21日	・第３回シンポジウム
7月4日	・夏の遠足（五味池破風高原）
7月18日	・麦の刈り取り、脱穀・草取り（ネギ、サツマイモ畑）
8月8日	・ジャガイモの収穫・トウモロコシの収穫・そばの種まき
8月22日	・おやきづくり・御射山祭伝統行事
9月5日	・秋の野菜の種まき（白菜、野沢菜、大根など）
9月26日	・稲刈り
10月10日	・稲の脱穀・そばの刈り取り
10月24日	・サツマイモの収穫・大豆の刈り取り・そばの脱穀
11月7日	・小麦の種まき・大豆の脱穀・秋のミニ遠足

11月21日	・野菜の収穫・「ひんのべ」交流会
12月５日	・そば打ち体験
12月19日	・もちつき大会
１月９日	・ものづくり・どんど焼き
２月13日	・卒業式

◇実践から得た「臨床の知」

信州すざか農業小学校豊丘校の実態

西澤直城（理数科学教育専攻３年）
鈴木　梢（理数科学教育専攻３年）

「信州すざか農業小学校豊丘校」にきていた子どもたちが活動を通してどのように感じてくれたか、また、保護者が「信州すざか農業小学校豊丘校」に来ている子どもたちを見てどう思っているのか、簡単なアンケートをおこなった（子ども 30 名　保護者 15 名）。

○アンケート内容

（子ども用）

① 一番楽しかった活動はなんですか？（複数回答可）
② 野菜についてよく知れましたか？（二者択一）
③ 農家先生と仲良くなれましたか？（二者択一）
④ お兄さんお姉さんと仲良くなれた？（二者択一）
⑤ 来年もまた参加したいですか？（二者択一）

（保護者用）

⑥ 子どもを農業小学校に参加させてよかったですか？（二者択一）
⑦ 来年もまた参加させたいですか？（二者択一）
⑧ 信大生の参加によって、子どもたちの活動が有意義になったと思いますか？（二者択一）
⑨ フリースペース（自由回答）

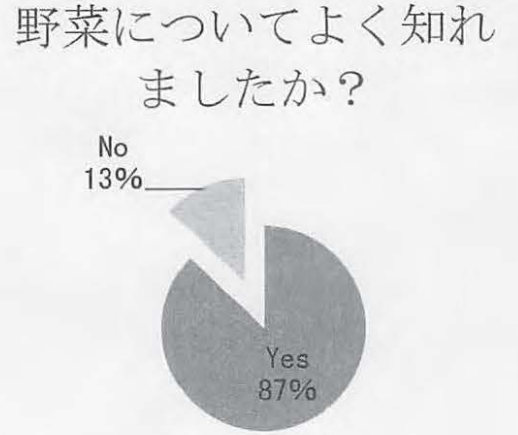
以上の質問内容で、１月９日の活動において実施。

○アンケート結果と考察

① 一番楽しかった活動はなんですか？

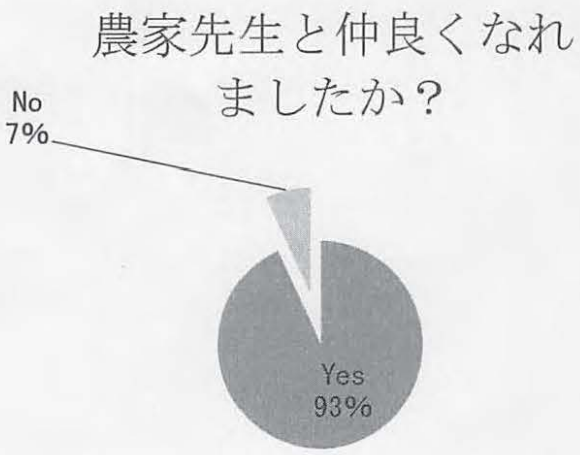
どんど焼　15 名　野菜の収穫　６名　田植え　６名　そば打ち　２名
もちつき　３名　その他　１名

② 野菜についてよく知れましたか？



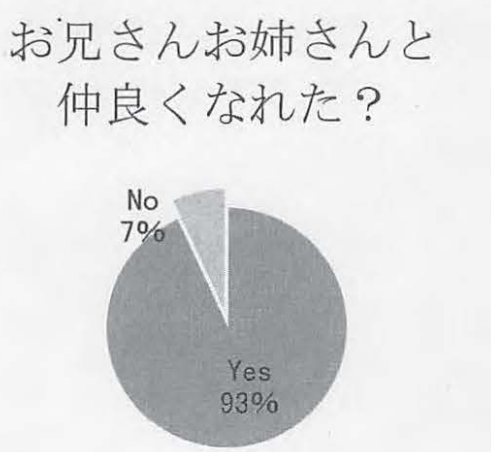
〈考　察〉
30 名中 26 名が Yes と回答。
農家先生の実践のご指導のもと、須坂園芸高校の生徒による活動前の説明やクイズ、また、信大生による劇など、子どもの興味関心を引き付けるような内容ができたのだと思う。興味関心を引き付けた結果、子どもたちの野菜を知るきっかけとなったのだと思う。

③ 農家先生と仲良くなれましたか？



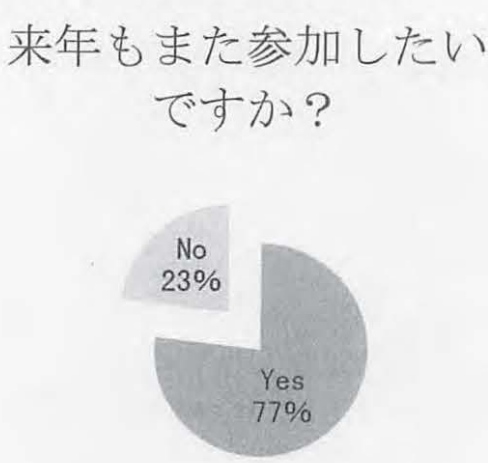
〈考　察〉
30 名中 28 名 Yes と回答。
農作業中は、学生以上に農家先生と子どもたちの交流が盛んだった。農家先生の知識の豊かさから子どもたちは農業以外のことでも伝統文化など学んだことも多いように感じる。農家先生という幅広い年齢層のおかげで、子どもたちは異年齢交流を十分にできたであろう。

④ お兄さんお姉さんと仲良くなれた？



〈考　察〉
30 名中 28 名 Yes と回答。
農家先生と同じ人数が Yes と回答しているところに注目した。昨年度は農家先生より学生の方が Yes 回答者が多かったが今年度は、変わらなくなった。より子どもたちと農家先生の距離が近くなったのだと考えられる。

⑤ 来年もまた参加したいですか？



〈考　察〉
30名中23名Yesと回答。
Yesの回答がほとんどを占めるが、No の回答が他の質問より若干ながら多くなった。いいえと回答した人に来年度から中学校に進学するという子が僅かにいたが、来年度も参加したいと思う子が更に増えるように今後工夫が必要なのかもしれない。

⑥ 子どもを農業小学校に参加させてよかったですか？
〈考　察〉 15名中15名Yesと回答。

⑦ 来年もまた参加させたいですか？
〈考　察〉 15名中14名Yesと回答。
回答者のほぼ全員が Yes と回答していてくれていることから、保護者は農業小学校に子どもを参加させていることに意義を見出してくれていると感じる。須坂市役所、農家先生、信州大学、須坂園芸高校が一丸となってやってきたことが目に見えた結果だと感じる。

⑧ 信大生の参加によって、子どもたちの活動が有意義になったと思いますか？
〈考　察〉 15名中15名がYesと回答。
信大生は、農作業の知識が農家先生、園芸高校生に比べて浅かった。しかし、子どもたちに楽しんでもらうために劇を工夫していれたりなど、子どもたちに喜んでもらうために工夫、努力をしてきた。それが保護者にも伝わった結果だと思う。

⑨ フリースペース（自由回答）
・大学生と接する機会がないので、子どもたちはいつも大喜びでした。みんないつも本当に優しく接してくれて遊んでくれてありがたかったです。
・色々な子どもたちと接して将来に役立ててほしいと思います。
・積極的に子どもたちと関わってくれてありがとうございました。
・これからも色々な活動に参加し、地域と親密になることを期待しています。
・よく遊んでくれているのでとても喜んでいます。親よりも学生のとこに行ってしまうほど嬉しいようです。
・農家先生や、市の方、学生の苦労のおかげで、子どもたちが楽しめました。
・朝の劇がおもしろかったです。
・信大生の中には子どもとふざけ過ぎている人もいた。参加している子どもたちに皆平等に接してもらいたかった。

〈考　察〉 上記のような意見感想をいただいた。中にはとても手厳しい意見をいただいたが、氷山の一角にしか過ぎないと判断したけれども、学生は反省し今後に活かして

いかなければならない。しかし、温かい言葉をいくつも頂戴して活動は地域や保護者に見守られてこそ行えることなのだと再認識した。

◇学生の感想・反省

（1）信州すざか農業小学校を振り返って

私は今年度「信州すざか農業小学校」のプラザ長として1年間やらせていただいたのだが、1年間を通して収穫はたくさんあった。昨年度はただ参加しているという立場だったから、長としての立場に戸惑いを感じつつも1年間やってきた。

このプラザの特徴として他プラザと異なることは、学生企画ではないというところにある。学生企画ではない分、学生は運営の補助という役割ではあったが、他プラザでは得ることのなかったことも多かったのではないかと感じる。例えば、活動時に自分たちが運営ではないので子どもと関わる機会も多かったし、運営の方に気を取られ過ぎないということもあった。朝の集まりでは寸劇をやらせていただいたのだが、毎回工夫をして子どもたちにわかりやすく楽しんでもらう為にはどうするか考えて、子どもの反応が薄かった時には帰り道に皆で反省会をしながら帰るなど、毎回の活動で構想して、実践して、評価・改善をしてきた。この一連の流れはとても有意義な時間だったと思う。

そして、1年間を通して一番感じたことは須坂という土地の素晴らしさや、須坂の人たちの温かさを感じられたことがなによりの収穫であったのだと思う。活動回数を重ねる度に、子どもだけではなく農家先生、保護者、市の方々との距離も縮まり交流がしてこられた。「YOU遊」＝「子どもと関わる活動」と感じていたが、今では「YOU 遊」＝「地域と関わる活動」なのだと感じるようになってきた。地域と連携をとり子どもたちに提供していく、こんなにも素晴らしいことに身をもって気付くことができたことは、とても幸せなことである。今日の学校現場の在り方の理想も考えることができたし、自分の教育理念の具体化をすることもできた。教員を目指すものとして、今後の夢への糧としていきたい。そして、1年間学んできたことを教員になったときに最大限に活かしていくことができればと感じます。　（西澤直城）

（2）すざか農業小学校に行って

私にとって「すざか農業小学校」や、須坂という土地は、第二の故郷のような場所でした。月に2回の活動で行く「すざか農業小学校」が、いつの間にか私が肩の力を抜いて、子どもたちと本当に同じ目線で話をしたり、一緒に活動したりすることができる、大切な居場所になっていました。「すざか農業小学校」では、農家先生が農業を教えてくださいます。私も、農業のさかんな土地で育ったにもかかわらず、この農業小学校で初めて学ぶことがとても多かったです。一番驚いたのは、そばと大豆の脱穀でした。たたいたり、踏んだり、稲の機械をつかった脱穀しか知らなかった私は、そのような脱穀の仕方を見て本当に驚きました。でも、昔ながらの手法で、昔の人は本当に作物のことを理解し、作物に合っている方法を考え出していたのだなぁと感心しました。農業小学校の子どもたちはみんな最初はおとなしく見えるのですが、仲良くなってくると自分のことをたくさん話してくれたり、去年の活動の様子を話してくれたりなど、私のほうが「すざか農業小学校」の子どもたちに癒されていました。でも、今年は活動に参加できる学生の数が少なく、子どもたち全員と関わりきれなかったことが反省点です。もっと子どもたち全体とかかわれるようにしていけたらなぁと思いました。そのためには、信

大生の役割をしっかりと理解し、その都度子どもとどのように関わるか考えて活動していきたいと思います。「すざか農業小学校」の活動や、須坂という土地が本当に好きでした。また、子どもたちも、農家先生も、教育委員会の方々も、本当によくしてくださり、お会いするのがとても楽しみでした。また、来年も須坂の活動に参加したいです。本当に学びの多い時間を過ごすことができました。（鈴木　梢）

（３）農業小学校に参加して

私は「信州すざか農業小学校」に参加して２年目になります。１年目は子どもとの関わりはもちろんありましたが、それと同じくらい私にとって初めての田植えや、野菜の収穫であり、それに対して感動していたのではないかと振り返って思います。しかし、２年目になり目線が変わりました。子どもが種をまいている姿、子どもが田植えをしている姿、泥が嫌で田植えを拒んでいた子ども、おやきを包む子ども、たくさんの子どもの姿が見られ、子どもとたくさん関わることができました。私が印象に残っていることなのですが、白菜の収穫でとても大きな白菜に子どもが「でけー、これが白菜なの？」こんな言葉が聞こえました。子どもが知っている白菜はお店の白菜です。店に並んでいる白菜は周りの堅い葉っぱは取られ、きれいな状態なもので置かれています。子どもが野菜にじかに触れ、収穫することで、野菜本来の姿や、新たな発見、収穫する楽しさ、もしかすると収穫する大変さもわかったかもしれません。一つの体験から子どもは多くのことを感じたのではないでしょうか。私も子どもから多くのことを学ばしていただきました。また、幅広い世代の人と関われる機会あまりないなか、子どもだけでなく地域協力者である農家先生方や、保護者の方とも交流ができました。農業を通して、とても充実した活動をさせていただいたと思います。ありがとうございました。（島田英一郎）

（４）信州すざか農業小学校を通して学んだこと

私は昨年度に引き続き「すざか農業小学校」に参加させていただきました。昨年度は初めての参加ということもあり、農業の面、子どもとの関わりの面などで不安や戸惑いがありましたが、今年度は２年目ということもあり、ゆとりをもって広い視野で活動に参加できました。広い視野で活動を行えたことにより、昨年とは違った多くのことを農業小からは学べたと思います。その学びの中でも特に成長が実感できた教育的観点を３つ挙げたいと思います。

１つ目は、自分たちの役割を常に自覚しながら活動を行えたことです。様々な年代の方々の交流によって成り立っている農業小で、私たち大学生にしかできないことは仲介役という役割です。仲介役は農家先生の言っていることを噛み砕いてわかりやすく子どもに伝えたり、一緒に収穫をして生きた体験を共有したりなど多岐にわたります。特に、始めの会でやる演劇には非常に力を入れました。農業の知識では農家先生や園芸高校生にかなわないので、『端的に、わかりやすく、おもしろく』をモットーに劇を計画し実行しました。子どもの反応がよくなかった時には、帰りの車内で反省をして次に活かしました。何度も寸劇の機会をいただいたことで、声量、トーン、間、ジェスチャーなど、教師として身につけていかなければならない資質や、課題を次につなげていく反省的実践者としての姿勢を知らず知らずのうちに獲得できた気がします。その他にも、演じることで得られた農業の姿勢や道具の使い方もありました。学生という立場だからこそできた経験だと思うので、ここで得たものをこれからも大事にしていきたいです。

２つ目は、多くの方との関わり方です。昨年は子どもたちと交流するのが精一杯で、保護者さんや農家先生、高校生と関わる機会があまりありませんでしたが、今年は積極的に交流ができたと思います。保護者さんには子どもの実態のことを、園芸高校の先生や農家先生には農業のことを、行政の方には教育現場について幅広い話を伺うことができました。また、子どもの教育は学校だけで行われるものではなく、社会性を育てるために、地域や保護者との連携が大事と言われている現在において、連携を通して活動できたことは教育現場に立つ人間として貴重な交流の機会をいただけたと思います。

３つ目は、目的を持った接し方です。教師は広い視野で子ども全体をみて、常に教育的価値のある行動をとることが大切だと言われますが、今年度はその姿勢を身に付けられてきたのかなと思います。ただ単純に子どもたちに応じて遊んだり、道具の使い方を教えたりするのではなく、例えば、「あの子が動いてくれるにはどうしようか」、「あの子は１人で頑張っているから声を掛けよう」という目的意識や教授方略のことも考えながら接していくことができました。そうすることで自分自身をも客観的に見つめ直すことができ、有意義な活動となったと思います。

すべて教育的視点からの感想となってしまいましたが、個人としても活動を楽しむことができました。また、作った野菜を自分たちで食べる『地産池消』の精神や地域の伝統農業を伝えていく農業小は、これからもずっと続けていってほしいと思いました。　　（滝沢雄太郎）

◇地域の協力者・須坂園芸高校の先生・同校生徒の感想と反省

（１）学生スタッフのパワーに感謝して

農業小学校は農業の大切さと、食べ物に感謝する気持ちを育む目的で、平成 17 年度に須坂市豊丘地区に開校し、今年で５年目を終了しました。この農業小学校のある豊丘地区は、須坂市の東部に位置し、東は上信国境の山々にくぎられ、北側山寄りの川に沿ってほぼ東西に集落が連なる農村地域です。水稲・野菜・酪農などの小規模農家が多いことが特徴でもあり、高齢化や後継者不足による遊休荒廃農地の解消が課題となっている地区でもあります。

そんな中、今年は、51 名の子どもたちが入学し、１年間活動してきました。低学年の子どもたちが多く、畑の作業も初めてなので大変でした。当日の天候によって授業が予定通りの内容にならない時もありましたが、信大の学生さんと園芸高校の生徒さんに助けられながら、農家先生とともに協力して授業を進める事ができました。大変ありがとうございました。１年が経過し、子どもたちは、鍬や鎌の扱い方が上手になり、たくましく成長したと思います。

子どもは体験の中で育つことから、これからも、楽しく豊かな経験をできるだけ多くさせてあげたいと考えています。信大の学生さんには、毎回授業の際の説明や各班の指導など、高校生と協力しながら、農家先生との間にはいって、色々苦労があったのではないかと思いますが、学生さんたちの若いパワーが、子どもたちの記憶に、楽しい農作業の経験と思い出として残すことができたと感謝しています。

また、市内外で農業小学校も少しずつではありますが知名度も上がり、今年は、市外の児童が入学してきました。豊丘まで来るには、時間がかかりますが、「大学生や高校生のお姉さんとお兄さんが、いつもそばで一緒に作業をしたり遊んだりしてくれたので、とても楽しみに参加できた。」というお話も、保護者からお聞きしました。

このように、多くの様々な立場の人たちの協力があって、ますます異年齢の子どもたちの交

流の場が広がっていくように思います。この一年間、ご支援ご協力をいただいた農家先生、応援してくださった保護者の皆様方、信大学生・園芸高校生徒・先生、皆様方の今後の活動に期待し御礼を申し上げます。誠にありがとうございました。

（信州すざか農業小学校豊丘校事務局　友田一江）

（２）農業小学校から学んだこと

・こんな私も実は、暗い中学時代があります。その頃の私は学校を休みがちになり、家にこもっていた時期がありました。そんな私に祖母は、「明日香、ごろごろしてねぇで畑にいくど」と、声をかけました。そして、嫌がる私を畑に連れ出したのです。祖母の畑には、たくさんの野菜たちが空を向き、力強く育っていました。その姿に元気をもらいました。「野菜たちは素晴らしい、土はなんてすごいんだ。」心から感動しました。未来の自分の姿が描けず暗いトンネルの中にいた私は、このことがきっかけとなり、少しずつ学校へ通うようになりました。そして、私を救ってくれた土の素晴らしさと農業の持つ力を、沢山の人たちに広めたいと考え、農業小学校の活動に参加したのです。

農業小学校は私にとって、大切な居場所であり、かけがえのないものです。私を成長させてくれたり、農業の大きな魅力、そして、多くの笑顔に出会うことができました。農家先生のみなさん、信州大学のみなさん、市役所のみなさん、保護者のみなさん、そして小学生のみなさん。農業はすべての人が笑顔になり、そして、大切なことを学べる場所です。

農業小学校の活動が大きく広がることで、地域の、そして日本の農業の未来を変えていく希望になると思います。農産物だけでなく、人も地域とともに生きていく、これこそが本当の意味での地産地消ではないかと私は感じています。

この活動を通して、私自身が本当に成長できたと実感しています。農業小学校と出会ったことで多くの人と触れ合い、積極的に行動ができるようになりました。そして、はっきりとした目標をもつことができました。それは、保育士になることです。今までは漠然と考えていた職種ですが、この活動を通じ、子どもたちと触れ合っているうちに、「絶対になりたい」という決意に変わりました。私も子どもたちと一緒に成長していきたいと考えるようになったのです。私は、私を救ってくれた農業、そして農業小学校に感謝し、野菜作りの楽しさや素晴らしさ、そして一番大切な感謝の気持ちを伝えていける保育士を目指し、これからも学んでいきたいと思います。

（長野県須坂園芸高等学校３年　藤沢明日香）

・私たちは初めて農業小学校に参加して、小学生から年上の方までたくさんの人と接することができてとても勉強になりました。今まで、小学生とは、遊びの中でしか交流してきませんでしたが、農業を通した交流をすることができました。そして、普段体験できないことを体験できる農業小学校の活動に、来年も頑張って取り組みたいと思います。

(同校　野菜クラブ　１年

北村拓巳、鈴木信生、矢坂浩樹、大島安理沙　成澤勇斗、奥山加奈子、髙橋葵)

・子どもたちと一緒に農業を学ぶことで、私たちにとっても多くのことを学ぶことができました。周りの方と協力することや、自ら進んで行動することの大切さでした。学校以外で、とても貴重な体験ができました。来年も、信大生のみなさんと連絡を取り合い、合同で発表できた

らと考えています。農業小学校のような活動がもっと増えてほしいと思います。来年もよろしくお願いします。　　（同校２年　中島美里、佐藤ちひろ、富永莉緒、丸山志織）

・私たちは、農業小学校への参加が今年で２年目になります。昨年は、人数が少ないこともあり、多くの子どもたちと交流できなかったことや、発表も伝わりにくいものになっていることがありました。この反省を生かし、今年度の活動に参加しました。今年は野菜クラブ員が、昨年の倍以上の人数となり、多くの子どもたちと積極的にかかわることができました。発表も、実物、等身大のものを利用し、より小学生に分かりやすい説明になるように心がけました。

２年間農業小学校に参加して、多くの方と交流することができ、農家先生や大学生、小学生と、幅広い年齢層で活動することの大切さを知りました。その中で信大生のみなさんと一緒に農業を教えることができ、とても貴重な体験になりました。これからは、今まで学んだことを生かし、今後の進路につなげていきたいと思います。これからも、農業小学校にできる限り参加して行きます。ありがとうございました。　　（同校３年　小布施美奈、掛川梢、松田茜）

・１月の農業小学校でのこと、正月の伝統行事であるどんど焼きで焼いて食べる繭玉づくりの説明で、羽生田校長が「ただお団子作るんじゃなく手のひらをこう使ってくびれを作って繭の形にするんだよ」と話されたのを聞いて、「校長、繭なんて言ったって子どもたちはたぶん見たこともなくてわからんぜ」と私が話していると、三木市長さんが「それなら私が実物を持って来て子どもたちにみせてやろう」と、市内に車で戻られ実物を持って来て下さいました。

自然界の実物、本物を見る、触るという体験がなかなかできにくい今日、農業小学校は、そうした体験ができる現場であると思います。豊丘の畑や田んぼ、野菜や稲、麦、大豆、等々。本校の生徒からすれば、本物の小学生、農家のお年寄り、大学生と接することができるということが、もっとも貴重な体験になっているように思います。

農家先生と打ち合わせをする、大学生と相談する、小学生に農作業の説明をする、小学生とともに農作業をしたり、遊んだりする。その一つ一つが貴重な体験です。昨年からの参加で、特に３年生は信州大学の皆さんとの距離が縮まったようです。大学生の皆さんとともに一つのことに取り組める。そしてアドバイスをいただいたり、ほめていただいたりする。この事が参加生徒の励みや次回への意欲につながっているように感じます。１年間ありがとうございました。引き続き、高校生ともつながりを持っていただけるようお願いいたします。

（長野県須坂園芸高等学校　野菜クラブ顧問　北原昌司）

信州大岡ふるさとランド（２年目）

プラザ長　宮尾　亘（教育実践科学専攻３年）
副プラザ長　市川香織（教育実践科学専攻３年）
藤田裕介（社会科学専攻３年）

○学生スタッフ名

中出　智章（理４）	金子　寿予（実４）	中川　茜（信４）	新開　夏実（実３）
松下さち子（実３）	田畑隆太郎（実３）	橋本　千里（実３）	鈴木　梢（理３）
早川　和宏（理３）	渋谷美奈子（実３）	小松　静（障３）	中村　恵理（芸３）
東野　千尋（芸３）	島崎　涼子（芸３）	阿部　由季（芸３）	室岡　聡也（生３）
井上　知洋（障３）	石原加奈子（実３）	岩本　芙美（障３）	黒澤はるか（生３）
飯島　理沙（理３）	後藤ともこ（理３）	萩原　知子（実２）	山越　俊（社２）
丸山　絹代（実２）	柴田　計（実２）	服部　直幸（理２）	田澤　岳哉（理２）
佐藤　静香（長３）	原田　圭祐（長４）	小出　智博（長４）	前嶋ゆうこ（長４）
二条　友美（長１）	齋藤　瑞恵（文４）	西森　絵美（文３）	植原　朝成（文２）
山室　達紀（文２）	南島　彩乃（文１）	塚本　真波（文１）	岡澤　沙季（県短２）
土井　嘉穂（県短１）	野池　成子（県短１）	佐藤　梓（県短１）	根石ゆり恵（県短１）
矢澤ひかり（清短２）	二本松雄太（松ＯＢ）		

○年間活動計画

〈大岡小学校との活動〉

５月７日（木）	職員にあいさつ
６月８日（月）	総合、大豆２年生
６月24日（水）	総合、大豆２年生
８月19日（水）	大根・畑整備
８月25日（火）	大根・種まき
８月31日（月）～９月５日（土）	大岡小学校にて活動
９月１日（火）	大根畑の成長観察
９月14日（月）	大根間引き
９月19日（土）	大岡小運動会
10月５日（月）	稲刈り
10月23日（金）	１、２年生と山歩き
11月10日（火）	総合、大豆２年生
11月14日（月）	大根収穫
11月15日（火）	大根出荷
11月22日（月）	大根の販売
12月７日（月）	大根収穫祭
３月18日（木）	小学校卒業式（予）

〈わらわらクラブとの活動〉

４月13日（月）	わらわらで遊ぶ
４月23日（木）	わらわらで遊ぶ
５月７日（木）	（小学校あいさつ後）わらわらで遊ぶ
５月20日（水）	わらわらで遊ぶ
６月10日（水）	わらわらで遊ぶ
６月19日（金）	わらわらでゲートボール
７月25日（土）	学生企画スポーツ大会
７月31日（金）	（そばまきの後）わらわらで遊ぶ
８月７日（金）	わらわらで遊ぶ
９月14日（金）	通学合宿希望者説明会
９月24日、25日	プレ合宿
10月４日（日）～10月10日（土）	第１回わらわら通学合宿
１月16日（土）	雪遊び
２月25日（木）	わらわらにて遊ぶ（予）
３月24日（水）	学生企画（予）

〈農村女性の方々との活動〉

6月14日（日）	竹の子採りツアー
7月31日（金）	そばまき
10月17日（土）	そば収穫・脱穀
11月1日（日）	聖三千石祭り

○連携団体

放課後子どもプラン「わらわらクラブ」　長野市立大岡小学校　農村女性ネットワーク大岡支所

○プラザの概要

1．大岡での活動を始めるにあたって～0を1にすること～

私たち「信州大岡ふるさとランド」は、今年度新たに立ち上がったプラザです。昨年度は今年度プラザを立ち上げるにあたり、農村女性ネットワークの方との活動や「わらわらクラブ」と通学合宿の話し合いなど少しずつプラザを立ち上げる準備をしてきました。しかし、初めて行うことも多く、まだどのように進めていったらいいのか、正直、悩んでいました。そんな中で今年の学生のテーマとして、「挑戦」という言葉が浮かんできました。私たち自身にとっても、大岡の方たちにとっても今年行う新しい活動は「挑戦」であると思います。また、私たち自身も挑戦を繰り返すことで、子どもたちにも挑戦し続けることの大切さを伝えていけたらいいと思います。そして、挑戦し続けることを通して、大岡の方々や、子どもたちに新しい風を吹き込んでいけたらいいと思い、活動してきました。

2．今年一年の活動の様子

▷・「わらわらクラブ」の方々との連携◁

（1）スポーツ大会　はじめての学生企画～7月～

7月、いよいよ私たちの活動は幕をあけました。今まで、「わらわらクラブ」のほうに何回か遊びにきたり、小学校や農村女性ネットワークの方と活動したりする機会はありました。私たちが主体となって企画することは、この企画がはじめてです。また、「わらわらクラブ」の方にとっても土曜日の開館は初めてのことだったので、どのくらい人数が来るのかなどまったく検討がつかない中で企画を立てていきました。

ただ、そんな中でも、大岡に行ってまず私がやってみたいと考えたのが、このスポーツ大会でした。なぜかというと、大岡小学校には全校児童が 51 人しかいません。そのため、なかなか、多くの人数が必要なスポーツがあまりできないのです。また、子どもたちのところへ遊びに行った時、子どもたちから「大勢で野球をやりたい。」ということを聞いていたので、今回は大学生や大人も含め、大スポーツ大会を開くことにしました。

種目は、野球、バレーボール、バスケットボール、ドッジボールを行いました。低学年から大人まで、みんなが参加できるルールにするにはどうしたらいいのか。それぞれ種目の担当が考え、アイデアを持ち寄り話し合いました。もちろん、なかなかルールを決めても難しいスポーツもありましたが、多くの種目で子どもから大人まで楽しみながらスポーツすることができました。また、当初の予定でできなかったサッカーや大縄跳びについても、「えー、やりたい。」、「また、今度やろう！」という子どもたちの声が聞けました。

（2）第１回「わらわら通学合宿」～信州大学教育学部ブログ掲載部分（一部改訂）～

〈第１回「わらわら合宿」希望者説明会〉

９月15日に第１回「わらわら通学合宿」の希望者説明会を行いました。「わらわら合宿」とは、１週間学校に通う子どもたちを預かり、合宿をして子どもたちにゲームのない生活や親から離れて友達との共同生活を行う合宿、みんなで協力する楽しさ、いつも当たり前にいる親の大切さに気づき、社会を形成していく力「社会力」を身につけようという目的のもと行われます。

「YOU 遊」では青木村での通学合宿に引き続き、これが２か所目となりますが、大岡は全校児童が約50人の小規模校です。青木村の参加者は30人であるのに対して、大岡では14人。こじんまりした小さな合宿です。私は青木村の合宿に２度参加していますが、毎日がドラマの連続で、日々子どもたちから学ばせてもらいました。そして、合宿全体が一つの大家族のように感じました。

今回、大岡では初めてで、どうやって進めたらいいのか全く分からなかったのですが、「わらわらクラブ」の方々と小岩井小学校長先生と話し合いながらだんだんと進めてきました。しかし、こんな時に新型インフルエンザが大流行。これに感染すると合宿ができなくなる！！どうか、大岡にインフルエンザがはやりませんように。そして、無事合宿が成功しますように。こちらも万全の準備をしながら、当日まで頑張っていきたいと思います――という状況でした。

〈９月24日、25日プレ合宿〉

いよいよ大岡で初めての通学合宿「第１回わらわら合宿」まで、あと１週間となりました。そこで……、合宿の前に１度施設の様子をつかむべく学生だけで泊まる「プレ合宿」を行いました。

24 日　　午後１時に大岡に到着。小学校に行き小岩井校長先生とお話をした後、学生用の畑に行き大根の間引き、草取りを行いました。

大岡小学校では今、大根作りを通して地域の人や出荷先の大根を食べてくれる人とつながりたいという「夢の種プロジェクト」を行っていて、私たちも子どもたちと一緒に大根を育てています。いろいろな思いが詰まったこのプロジェクトは本当に楽しいです。

その後、大岡の湧き水を飲み、小学校、「わらわらクラブ」で通学合宿の打ち合わせ。だんだんと迫ってくる合宿に焦りを覚えながらも、ひとつずつやることを確認していきます。

夕方、買出しと布団搬入。そして、来週からの合宿に備えてわらわらで子どもたちと遊ぶ。私が帰ると「なんでいなかったの？野球一緒にやりたかったのに。」と怒られたり、「今から少し遊ぼう！」と誘われた。でも、ここのところの私の返事はいつもこう。

「ごめん、つっくんは忙しいからまた今度ね。」……。本当に子どものみんなには悪いと思ってるし、遊びたいのを我慢していた。だけど、何かを犠牲にしないと、自分の本当にやりたいことはできない。そう思いながら、通学合宿の準備をした。

子どもたちとお別れをした後は、布団を合宿を行う老人福祉センターに移し、すぐに合宿中使う大岡温泉に！大岡温泉はとっても気持ちよく体がぽかぽかした。合宿中、毎日この温泉に入れるのは本当に贅沢だ。

温泉の後は帰宅組みと別れ、夕飯を買いすぐに合宿所へ移動し、掃除をする。ここでは合宿に参加する子どもの保護者の方々が一緒に掃除を手伝ってくださり、本当に助かった。おそらく私たちだけでは、１時間だけであれだけ隅から隅まできれいにすることはできなかったと思う。本当に感謝の気持ちでいっぱいになった。そして、それとともに、保護者の方々のこの合宿に対する期待を感じた。私たちもがんばらねば……！掃除が終わると、学生で話し合いを

し、この日は終了。

25 日　朝起きるとやはり少し寒い。布団からなんとかはいおき、朝食作り。朝は、前日に取った間引きした大根とうちの実家から持ってきた自家製のみそや野菜を使った味噌汁と野菜炒め、そして卵焼きを作った。調味料が、油、塩コショウ、みそしかなかったわりにおいしくできた。その後は片づけをして、実際の合宿の会場を作ったり、各係りで話し合ったりして合宿に備えた。

いよいよ来週に迫った合宿。「0を1にすることは1を 100 にすることよりも難しい。だが、やりがいがある」。こういわれてやりたいと思い始めた合宿がついに迫ってきた。ここまでくるのに、「わらわらクラブ」の方々、保護者の方々、小学校の先生方をはじめ本当にいろいろな地域の方のご協力をいただいた。また、この2日で子どもたちと会い、また地域の方々と出会い、ますますやる気がおきた。あと1週間、私たち大学生もしっかりと準備をしてこの合宿に望みたいと思う。

〈第1回「大岡わらわら通学合宿」〉

第1回「大岡わらわら通学合宿」。初めての大岡での合宿ということで、いろいろなことが新鮮な合宿でした。大岡小学校の3年生から6年生までの希望者 14 人と、信州大学の大学生 10 人の合わせて 24 人の小さな合宿。大学生のうちの6人は、今回が通学合宿は初めてのメンバーでした。

合宿本番を迎えたとき、私の方針はシンプルに2つ。「命に関わること」と「ほかの人に迷惑をかけること」に関しては叱る。とにかく、できるだけ自由な中で子どもたちの考えを引き出すこと。今回、幸いにも 14 人の子どもに対して 10 名の学生がつけることで、本来なら手がかかり、できないような自由時間が取れたことが今回の合宿ではよかったです。

たとえば、帰ってきてすぐの時間と、夜に自由時間を取り、その中で好きな時間に宿題をするようにしました。しかし、ほとんどの子どもたちは、帰ってからすぐや夕食後すぐに宿題を終わらせてくれたため、夜の自由時間が多く取れました。そして、その多くなった自由時間に、いろいろな遊びもしました。1日目の夜に行った肝試し、2日目から始まった布団でのハンドスプリング練習、ランニングマシーン、4日目の体育館で行ったラグビー、そのほかにも1週間を通して行った「大根ぬき」など、その遊びのほとんどが子どもたちから出た遊びでした。また、台風で急遽1日休校になって大学生が焦っていたときも、「1発芸大会をやりたい」と、子どもたちから言い出したため行いました。すると、これが大成功！男の子たちは、全員がエントリーして前で演技してくれました。また、学校では見られないような普段の子どもたちが見られた場面でもありました。

今回の合宿で私が特に意識したのは、一緒に合宿を作り上げている仲間、家族として合宿に参加している、そんな感覚を子どもたちに感じてもらえるような合宿にしたいということでした。だから、今回このような行動が子どもたちの方から見られたことは本当にうれしかったです。

ほかにも、私が大根を洗っていたら手伝ってくれたことや、慣れない手つきながら調理に挑戦していた姿、家族に会いたい気持ちを抑えがんばる姿など、本当に子どもたちみんなのいい姿がいっぱい見られた合宿でした。

ただ、もちろん、いいことばかりではありません。お風呂の送迎時間をオーバーして地域の方に迷惑をかけてしまう面や、食材の発注の件、学生の共通の意識についてなど、改善すべき点はたくさんあったと思うので、来年度以降に生かしたいと思っています。

しかし、第1回「大岡わらわら通学合宿」は台風もきましたが、無事何とか成功に終わりました。また、子どもたちがお母さんたちから離れてがんばって生活したこと、それに対し、学生が本気になって子どもたちと1週間向き合ってきたことは、子どもたちにとっても、私たちにとっても心に大きな財産を残してくれたと思います。

▷・農村女性の方々との活動◁

〈聖三千石祭り〉

11 月になり、大岡は本当に紅葉がきれいです。11 月1日に聖三千石祭りに参加してきました。今回参加の学生は、県短生、信大生合わせて 17 人！昨年までは、農村女性ネットワークの方のお手伝いで祭りに参加していましたが、今年からはこちらのほうからお願いして、昨年のお手伝いに加えて、自分たちのブースを持ち、ステージでソーラン節を踊りました。ブースではプラバン作りと「割り箸ダーツ」、「万歩計で何万歩？」というゲームを行いました。ゲームでは、大岡小の子どもたちが何回も自分の記録に挑戦していました。

私は午前、農村女性ネットワークの方のお手伝い、野菜を売りました。「いらっしゃいませ、いかがですか？」。慣れない仕事でも、元気にやっていれば慣れてだんだん楽しくなってきました。ほかにも、お客さんに食券を売る係りやそばをお客さんに提供する係りなど、仕事内容はさまざま。そんな中、おばあちゃんたちに喝をいれられながらも仕事をマスターして、それぞれの場所で学生が活躍してくれました。

そして、お昼のソーラン節。学生 17 人と土井先生の 18 人で踊りました。ここまで練習をしてきて、筋肉痛の足にむちを打ちながら踊るみんな……。終わった後の地域の方からの大きな拍手が、とってもうれしかったです。

午後は午前の仕事分担を交換！私は大学生ブースへ。そして、みんなと一緒に割り箸ダーツとプラバンを楽しみました。そして、恒例のビンゴ大会！！こんなに盛り上がるビンゴ大会は他に見たことないぐらい盛り上がります。私はこれまで大岡での2回のビンゴ大会、両方で景品をいただいてきました。そして、今回は……、いつも通りリーチになり！隣の子もリーチ、あれっ前の子も……。

前「ねぇ、何番ならビンゴ？」、私「俺、７番」、前「えっ、俺も７番だけど！」、隣「僕も７番！（笑）」。

……みんなで、「７番こーい」と言っていると、本当に７番が！！……無事、３人とも景品をもらいました！！

まぁ、こんな感じでお祭りは終了。今回は子どもとだけでなく、地域の人と深く楽しく関わる活動でもありました。大岡は限界集落で、高齢化率は 60 パーセントを越えています。その大岡という地域を学生のパワーで盛り上げたい、そんな思いで臨んだこのお祭り。おばあちゃんたちから、「ソーラン節よかったよ」、「ありがとう」と言われたことが、すごくうれしかった活動でした。

▷・大岡小学校との連携◁

「夢の種プロジェクト」～大根を育てる活動を通して～

〈畑の整備、大根の種まき〉

8月 19 日、私たちは、子どもたちが種を植える予定の畑に、先生方と地域の方とともに足を踏み入れました。学校から歩いて 20 分の山の中にある畑は周りを木々に囲われ、鳥たちの

歌声が響きあう自然豊かな場所にあります。畑はすでに地域の方によって耕されていましたが、まだ畝などもありません。まだ、何も植わっていないこの畑でいったいどんな夢が生まれていくのだろう……。その畑を見ているだけで、なんだかわくわくしてきました。ここに子どもたちの畝を作ることが私たちの仕事です。地域の方、小学校の先生方、大学生が協力しながらどんどんと畝を作っていきます。木々によって日光がさえぎられているところは木を切ります。地域の方が切ってくれた木を私たち大学生は運んでいきます。すると、切られた枝からは、クワガタやカブトムシが何匹も何事かと顔をのぞかせてくれました。そんな自然の豊かな場所で子どもたちとともに大根を育てていく。そして、育てるのは子どもたちだけれど、それを取り巻く地域の皆様、また、学校の先生たちの影の努力があるからこそ、このような活動は成り立っているのだということを強く感じた活動でした。

8月 25 日の種まきは、私たち大学3年生は教育実習とかぶってしまい行くことができませんでした。しかし、他の学年や他大学と協力しながら、子どもたちとともに大根の種を育てていきました。

〈収穫、出荷、販売（前出ブログより、一部改訂）〉

11 月 16 日、17 日と大岡小学校では、大根の収穫と出荷が行われました。

16 日はまず大根の収穫。全校児童 51 人と先生方、地域の方々や保護者の方々と一緒に、学生も 10 名参加させていただきました。ただ、大岡はとにかく寒い！標高が高いのです。しかしながら、大岡の子どもたちはみんな元気！収穫始めの会が終わるとさっそく大根を抜き始めます。大学生や、大人の仕事は子どもが抜いた大根の葉っぱを切ること。どんどんと切っていきます。葉っぱを切られた大根は掘った子どもたちと残りの大学生が一緒に川の水で洗います！この作業がまた冷たい！みんなで手を真っ赤にしながら大根をきれいに洗いました。自分の大根を買ってくれる人のために、みんな泣き言を一言も言わずに一生懸命洗いました。ここまで終わると本日の作業は終了、1日大根を乾かします。

そして迎えた出荷をする 17 日、この日も子どもたちとの活動！大学生は授業の関係で2名の参加。大根をサイズ別に分けて箱詰めの作業、そして最後に思いを込めた手紙を箱に入れていざ出荷！食べてくれた人が返事をくれるように返信用のはがきを添えて送りました。しかし、そんなことを思っているとなんとアクシデント発生！なんと大学生の収穫した大根が多すぎて、とても2人じゃ出荷の準備が終わらない！これじゃあ出荷が間に合わない……。教頭先生からも、「またあとで出荷すればいいよ。」と言われて、半分あきらめていました……。しかし、子どもたちが大学生の作業している保健室にみんなで押し寄せてきて手伝ってくれ 20 分で作業が終わり、無事子どもたちの大根と一緒に大根を送ることができました。本当に手伝ってくれたみんなには感謝の気持ちでいっぱいです。

また、23 日には、大根の直売をしました。今回は「YOU 遊フェスティバル」の翌日ということで、学生の参加者は1人。2、3、5年生と共に大根を売りました。子どもたちの隣で大学生の大根を売ることになり、子どもたちと同じ大根を1人で売るなんてとても無理なんじゃないかなぁと思っていました。しかし、この日も5年生の男の子たちを中心に、みんなが自分たちのお店だけでなく大学生のお店を手伝ってくれました。おかげで、最後は少しだけお母さんたちに同情も買いながら協力をしていただきましたが、無事すべての大根を販売することができました。

今回小学校の大根の活動を通して、大岡の子どもたちの素直さ、優しさを強く感じることが

できました。「お願い、助けて！」の一言で10人近くの子どもたちが手伝ってくれる……。本当に大岡の子どもたちの優しさを感じさられた活動でした。

◇実践から得た「臨床の知」

挑戦することから見えた伝えることの大切さ

宮尾　亘（教育実践科学専攻３年）

私のプラザ長が決定したのは、雪が深深と降り積もる１月のことでした。月日の流れは速いもので、あれから１年が過ぎようとしています。この１年本当にいろいろなことがありました。通学合宿を立ち上げることも、プラザを立ち上げることもすべてが初めてだった私は、やりたいことがある反面、何をしたらいいのかまったくわからなくなることも多くありました。通学合宿の日程調整から始まり、わらわらでの学生企画、小学校の大根プロジェクトの参加、農村女性ネットワークの方々との活動……。今振り返ると、本当に多くの活動を行ってきたことを実感します。そして、そのどれもが私たちにとっての「挑戦」でした。

通学合宿の日程調整では、なかなか議論が進まず何をどのように進めていったらよいのかわからず議論が進まないこともありました。しかし、回を重ねるごとに話し合いの仕方、連絡の伝え方などを工夫し、自分なりの要領をつかみ軌道に乗っていきました。大根プロジェクトもそうですが、私は学生全体の長だったため、多くの人に活動を伝えなくてはならない場面が多かったと思います。その連絡が不十分だったら連絡した人の責任です。そのため、「どうしたら人に伝わるのか」を常に考えながら行動しなくてはならず、その点で特に今回勉強になったと思います。また、伝えるという面では今回通学合宿で合宿長として、子どもたちに伝えることが思いを伝えることが多くありました。そんな時、私の伝え方はあんまりよい伝え方じゃないなと感じ、なんとか思いを子どもに伝えようと努力していきました。結果的には、私の思いを伝えることはあまりうまくはいかなかったのですが、子どもたちが感じてくれ、全員が「挑戦」をしている、いい合宿を送ることができました。

このように、通学合宿をはじめ今年１年大岡で活動してきたわけですが、本当に、学校の先生方、「わらわらクラブ」の方をはじめ、地域の方々のご協力があって活動してくることができました。１年間の活動の様子にも書きましたが、本当に大岡はすばらしい地域であると思うし、子どもたちもみんな素直でいい子です。このことを、次の学年にも伝えていきたいと思います。

大岡の魅力

市川香織（教育実践科学専攻３年）

今年度、「信州大岡ふるさとランド」の副プラザ長をやらせていただきました。大岡小学校校長の小岩井彰先生とのご縁で、０から始まった大岡。その地に足を運ぶ度に新たな出会いがあり、楽しい思い出が増えていきました。大岡はわたしにとって、かけがえのない場所となったのです。

大岡の魅力はなんといっても、“人の温もり”だと思います。「会いたい人がそこにいるから」というのが、大岡へ来ている一番の理由です。子どもたちの愛溢れる攻撃、地域のおばあちゃんたちお手製のこんにゃく、学校の先生方との飲み会など、私たち学生を心の芯からあた

ためてくれる愛情が、大岡には溢れています。「絶対また来よう」。そう思えるのが、この大岡です。そして、今の私の一番の願いは、より多くの学生が大岡に足を運んでくれること。なぜなら、この「信州大岡ふるさとランド」がずーっと続いていってほしいからです。それは地域の方たちの願いでもあると、私は自負しています。この感動を、素晴らしさを味わいに、ぜひみなさん大岡へ来てください。そして大岡のみなさん、来年もお世話になりたいと思います。よろしくお願いします！！

大岡プラザを経験して

藤田裕介（社会科学専攻３年）

私の出身地である沼津市にある大岡と長野市大岡は姉妹提携を結んでいて、中学生の時、交流を行ったこともあります。信州大学に入学する時、ぜひとも大岡村に足を運んでみたいと考えていた私にとって、大岡村で新しくプラザを立ち上げるという話はとても魅力的なものでした。副プラザ長となり、今年一年活動をし、活動のたびに子どもたちの元気に圧倒されてばかりでした。山間部で生活していることと、学校の方針で「外でよく遊びよく歩いている」ことが起因しているとは思いますが、運動不足の私には大変こたえました。その一方で、山間部の学校に通い、野山を駆け回っている子どもたちがうらやましく思え、少年時代に戻りたいと思いました。今年１年プラザとして活動してきましたが、「辛い」・「大変」といったことを思うことはありませんでした。また来年も、それ以降も、大岡には足を運びたいと思います。一年間本当にありがとうございました。

◇連携団体からの評価

通学合宿を終えて

大岡子どもプラザ施設長　**金澤　仁**

平成 21 年 10 月、「信州大学 YOU 遊世間」の皆さんのおかげで、大岡小学校の児童 15 名が参加した通学合宿が無事に終わりました。日頃から小学校や子供プラザなど学生さん達と遊ぶ機会があったため、子供達は何の不安も持つこともなく６泊７日の合宿に臨めたようです。もちろん初めて家族から離れる子供達にとっては寂しいときもあったとおもいますが、それ以上に学生の皆さんの存在が大きく、全員が楽しく思い出に残る経験となりました。私は地元の人間としてお手伝いをさせていただきましたが、買い物の手配やお風呂の手配といったことだけで、子供達と関わることや日常のことはすべて学生の皆さんと子供達だけでやり通した素晴らしい合宿だったと思います。途中、台風の影響で休校になり、突然朝から一日中子供達と過ごすことになったこともあり、学生の皆さんにとっても特別な合宿になったことでしょう。

大岡小学校は全校生徒 51 名の小規模校であり、子供達に起こる出会いというものも極端に少ないと思います。登校・下校もスクールバスという環境の中で育つ子供達は、家に帰れば１人遊び、あるいは、祖父母や親との関わりしか経験がない子供もいます。そんな環境の中で、学生の皆さんとの出会いや遊びということは、子供達の将来にとっても大切なことです。そして、これから教職を目指す学生さん達にとって大切なことは言うまでもありません。まして、７日間をともに過ごし生活するとなればなおさらです。子供達はすでに来年の通学合宿を待ち望んでおり、毎年の恒例行事とするための準備も進めてゆきたいと思います。

これからも、子供達にとって良いお兄さんお姉さんとして明るい笑顔で接していただき、近い将来、多くの子供達に勇気や努力の大切さ、人を愛することや思いやることなどを伝えられるような先生になっていただきたいと思っています。大学の授業の合間の活動は大変だと思いますが、これからも子供達のため、そして自分自身のために精一杯頑張ってください。

よい縁のつながりを ―「縁尋機妙」と「多逢勝因」ということ―

長野市立大岡小学校長　**小岩井彰**

悪戦苦闘しながら求めていると、ふっと自分を励ましてくれる人や言葉に出会わせてもらうことがあります。題に書いた「縁尋機妙」（えんじんきみょう）と「多逢勝因」（たほうしょいん）という言葉もその一つです。縁尋機妙は「よい縁がさらによい縁を尋ねていく仕方が実に奇妙である」という意、多逢勝因は「よい人に交わっていると、気づかないうちによい結果に恵まれる」という意味だそうです。なるほど、皆さんとの出会いはまさにそのとおりでした。

私は、平成 16 年から４年間青木村で勤務しましたが、そのときに、多くの学生諸君の若い力をお借りして「社会力」をキーワードに村の教育の活性化に取り組みました。そのとき皆さんとのご縁をいただきました。平成 20 年、青木村から大岡小学校の現場に異動になりました。大岡は長野市唯一の僻地一級の学校で、全校児童 51 名の小さな山の中の学校です。縁とは不思議なもので、私が赴任する前年から土井進先生は大岡とのつながりの中に皆さんの教育の場を創造しようされていました。私は、そのご縁の中にまた入れてもらうことになったのです。

「信州大岡ふるさとランド」の宮尾亘プラザ長の強靭な肉体と精神がさらに若いエネルギーを大岡に引き連れてきてくれました。今年の一番の成果は、大岡の子どもたちのために新たな通学合宿を創造したことだと思います。少人数の固定化した人間関係の中で生きている子どもたちに、さわやかな風を吹き込んでくれました。真摯な皆さんの取り組みに感謝です。６泊７日の通学合宿を大岡で創るということは大変な作業です。青木村の基礎があるにしても、通学合宿がどういうものか何もわからない大岡の子どもや保護者、そして、地域の中で新たな活動を形にする。それは、まさに「０（ゼロ）」を「１（イチ）」にする活動です。しかし、それが苦労であればあるほど、創造的でやりがいのある最もおいしいところになるはずです。

皆さんは、自分たちで考え、自分たちで交渉し、自分たちで創り上げてきた。行政的な支えや金銭的な支援がほとんどない中、皆さんは人とつながり、新たな活動を創り上げてきたのです。その力こそ「社会力」そのものです。そして、子どもたちはもちろん、保護者からも、地域からも「とてもよい取り組みだった。また来年も是非お願いしたい」との声が届いています。皆さんの本気な姿が人と集い、学び、つながり、広がっていく原動力になったのだと思います。皆さんの真摯な取り組みは美しい。純粋に伸びようとするその気持ちは尊いと私は思います。そういう皆さんに少しでも関わらせていただけたことに心より感謝します。そして、これからも本気で向かっていこうと思います。

縁尋機妙とは、ただ待っていてもそうなっていくのではないと思います。悪戦苦闘する、不安や困難の中で本気になって汗する、本気になって動く、そういう姿勢の中でこそ「ご縁」が生まれるのだと思います。そして、その縁に対しておかげさまの気持ちを感じることで、縁はさらに広がります。「縁」は「円」でもあります。皆が丸くつながっているのです。これからもこのつながりの中で新たな「１」が生まれることを期待しています。

第8回YOU遊フェスティバル

実行委員長　早川和宏（理数科学教育専攻3年）

○実行委員名（7名）

早川　和宏（理3）　肥野沙也加（保3）　三石　梨沙（理2）　松井　遥（理2）
小賀坂佳子（理2）　太田　香子（社2）　藤浦　修司（社2）

○講座長名

鈴木　祐香（理3）　宇賀地由里（理2）　小西　陽一（生2）　高池　亮輔（保4）
飯島　理沙（理3）　片原　範子（理2）　米山　幸恵（言2）　坂本明日香（言2）
鈴木　梢（理3）　宮尾　亘（実3）　服部　直幸（理2）　東野　千尋（芸3）
中川　茜（生4）　福田　朱里（障2）　国澤　結子（生2）　半田　裕（工4）
矢土　裕和（地3）

○参加者数（総勢　約867名）

子ども約120人　保護者約100人　学生スタッフ約200人

○プラザの概要

「YOU遊フェスティバル」とは、年に一度、教育学部のキャンパスに子どもを集めて講座を開き、1日子どもたちと共に活動するイベントである。けれども、「YOU遊フェスティバル」で行う内容は毎年異なり、学生が毎週開かれる実行委員会でこの「YOU遊フェスティバル」をどのようにするかという話し合いから始まり、内容を決めていく。

さて、昨年大成功を収めた「第7回YOU遊フェスティバル」に引き続き、今年も「YOU遊フェスティバル」を行いたいという学生の願いから、7月に7名による実行委員会が発足した。実行委員会が発足してから、週に1、2回の話し合いの中で、今年の「YOU遊フェスティバル」をどのようにしていきたいのか話し合っていった。そして、実行委員で今年のこのフェスティバルのテーマを「無限大∞の可能性」とした。これは、このフェスティバルを通じて、楽しみながら多くのことを学び、私たち学生のできる可能性、子どもたちのもっている可能性を広げていきたいという願いから決定したテーマである。また、今年の実行委員7名のうち3名は「YOU遊フェスティバル」に参加することも初めてであったため、何事にも挑戦していこうという気持ちをこめたテーマとなった。

今年の「YOU遊フェスティバル」では昨年同様、日程を2日間にして行った。1日目においては、講座の準備だけでなく、学生レクレーションや前夜祭を企画した。これは、学生同士の交流の時間を設けることで、講座以外の学生とも交流したりして、多くの人とのつながりができればという願いを込めた。また、昨年までの「YOU遊フェスティバル」と大きく異なる点として、今年の「YOU遊フェスティバル」は信州大学60周年記念事業として開催されることとなったことである。そこで、50周年記念のときに植樹をした木の剪定を参加した学生で行うことにした。ただ剪定を行うのではなく、学生レクレーションの中で、グループごと協力し、1つのチェックポイントとして行う形をとった。また、ウォークラリーの問題の中にも信州大学にまつわる問題を取り入れたりして、60周年事業としての工夫を行った。

更に、この「YOU 遊フェスティバル」には多くの他大学にも参加を促すために声をかけた。その結果、信州大学の各学部生以外にも、長野県短期大学（13 名)、清泉女学院短期大学（８名)、上越教育大学（１名)、岐阜聖徳大学（４名)、文教大学（２名）横浜国立大学（１名)、松本大学（１名）の学生が参加してくれた。他大学の学生が参加してくれることにより、信大生にとっても普段関わることのできない人との関わりがもてたり、体験をすることができた。

このように過去の良い伝統を残しながら、少しずつ新たなことにも挑戦し、信州大学 60 周年記念事業第８回「YOU 遊フェスティバル」が開催された。

以下は当日の日程・内容の詳細である。

＜平成21年11月21日（土）＞

9：30～	学生集合
10：00～	学生レクレーション（間伐作業を含む）
12：30～	昼食
13：30～	講座ごとにわかれて活動・準備
17：30～	前夜祭、夕食会

＜平成21年11月22日（日）＞

8：30～	子ども受付
9：00～	開会式
10：00～	講座ごと活動（昼食を含む）
14：20～	閉会式
15：00～	子ども完全解散・片付け
16：00～	リフレクション
17：30～	後夜祭
20：30	解散

○会計報告

収　入

学生	588,700円
子ども	31,350円
お祝い金	10,000円
小　計	630,050円

支　出

学生食事・備品	493,814円
準備・事後報告	116,736円
保険	4,500円
生協お礼	15,000円
小　計	630,050円

○講座一覧

２日目に行われた講座は以下の 12 講座である。

	講　座　名	講　座　長	子どもの数	学生スタッフ
①	クリスマスリースをつくろう	鈴木　祐香（理３） 宇賀地由里（理２）	10名	16名
②	あがれ！ボクの気球、わたしの気球	小西　陽一（生２）	４名	19名
③	トレジャーハンター	髙池　亮輔（保４）	16名	23名

④	本日開店！ミニパンやさん♡	飯島　理沙（理３） 片原　範子（理２）	22名	19名
⑤	HEROES　～とらわれの姫を救え～	米山　幸恵（言２） 坂本明日香（言２）	22名	21名
⑥	冬でもできる!! 流し○○メン	鈴木　　梢（理３） 宮尾　　亘（実３）	９名	20名
⑦	はりがねカンパニー	服部　直幸（理２）	９名	15名
⑧	冬のドタバタ大運動会！！	中川　　茜（生４） 東野　千尋（芸３）	19名	22名
⑨	日本縦断！！ グル巡り	福田　朱里（障２）	12名	16名
⑩	いざ、ソーラン節 ～大漁目指して～	国澤　結子（生２）	10名	33名
⑪	あそび屋　わにわに	半田　　裕（工４）	３名	10名
⑫	旭山に登って秋を描こう	矢土　裕和（地３）	４名	８名

○一年間の活動

７月上旬	第８回「YOU 遊フェスティバル」実行委員会　発足
７月下旬	講座長募集、講座長顔合わせ
10月上旬	学生スタッフ募集　　締め切り
10月上旬～	不定期に講座長会
10月中旬～11月６日	子ども募集
11月21、22日	信州大学60周年記念事業　第８回「YOU 遊フェスティバル」

○講座内容

1　講座名　クリスマスリースをつくろう

講座長　鈴木　裕香（理数科学教育専攻３年）
講座長　宇賀地由里（理数科学教育専攻２年）

○学生スタッフ名

西澤　直城（理３）　滝沢雄太郎（理３）　黒木　李紗（芸３）　田中　亜季（理２）
斎藤　文音（理３）　水谷　正尚（社２）　玉井　瑞紀（理１）　山口　千晴（理１）
久保田歌穂(清短２)　倉島嘉子（県短２）　宇野早織（岐聖２）　堀菜津希（岐聖２）
小池　陽愛（文３）

○参加者　　子ども 11 人（うち欠席３人）　保護者３人

○講座の概要

つるを使って、「一から自分で作るリース作りを楽しんで欲しい」という思いで講座を開いた。リースを作るだけでは、一人の作業だけで終わってしまうと考え、作ったリースをツリーにみんなで飾り付けることを最終目標とした。まつぼっくり、ビーズ、マカロニ、モールなどを使って、自分だけの素敵なリースを作った。

○当日の活動日程

10：15　朝の会（スタッフ紹介、子ども自己紹介）
10：25　アイスブレイク（なんでもバスケット）
10：35　学生による導入の寸劇、作り方説明
10：40　リース作り開始
12：30　昼食
13：30　リース作り、ツリーの飾り付け
13：55　サンタ登場
14：00　帰りの会
14：05　写真撮影
14：10　体育館へ移動

○当日の子どもの様子

はじめは表情が硬かった子どもたちも、段々時間がたつにつれ、表情が柔らかくなっていった。リース作りには、一人一人の子どもたちが驚くほど真剣に取り組んでいた。こちらが予想もしなかったような豊かな発想で、リース作りに取り組んでいた。リースに一つ一つ飾りつけをしているときの「これをここにつけようかな、やっぱこっちかな」と考えている子どもの表情はとても生き生きとして、輝いて見えた。とても楽しそうに取り組んでいた。また、リースを作りながらも、自然と学生と打ち解けていっている様子であった。時間に縛られることなく、自由な空間で自由な発想で自分だけのオリジナルリースを完成させた。作ったリースはツリーに飾っていき、全員でクリスマスツリーを完成させることができた。

○反　　省

この講座では、自然のつるを使ってリースを作るというものであったが、つるを用意することが案外大変であった。大学の周りも自然に恵まれているので、山の近くや川に探しに行ったのだが、なかなか適当なつるを見つけることができず、不安を覚える日もあった。教授や農家の林部さんに相談を持ちかけたところ、林部さんにつるがある場所を教えていただき、なんとかつるを集めることができた。また、前日準備では、スタッフと共にツリーに見立てた木を教室の中に立てるという作業を行った。当初の予定では、土が詰められた袋に木を立てて縛る予定であったが、倒れて来る危険性があるのではないかという心配が出てきた。すると、スタッ

フの一人が「ペットボトルに水を入れてしばってみてはどうか」という案を出してくれ、スタッフみんなで試行錯誤しながら、無事ツリーを立てることができた。このことでスタッフの中でまとまりが生まれ、とてもいい雰囲気で当日を迎えることができた。

・講座を開くにあたって「こんな風にしたい！」と思っていても、それを形にしていくことの難しさを感じました。ツリーの木を立てる場面では、スタッフのみんなが知恵と力を合わせて試行錯誤し、なんとか木を立てることができました。改めて人の力のすごさと大切さに気付かされました。今回は、リースを夢中で作って楽しんで欲しいという思いが強すぎて、少し見えていなかった部分が多くあったように思います。その1つに、参加した子ども同士の関わりがあまりなかったということが挙げられます。「YOU 遊フェスティバル」で集まって来て、偶然出会うことができたのだから、もっと周りの子どもと関わりながら取り組めるような工夫が必要だったと感じました。しかし、子どもたちだけでなく、保護者さんも学生も、自分のリースを夢中になって楽しそうに作っている姿が見られたので、大満足です。(鈴木裕香)

・講座を運営することの大変さや下調べや準備の重要性を学びました。大変だったけど、終わった後の感動がなんとも言えませんでした。私たちでは考えつかないような、つるの巻き方や飾り付けをする子どもたちの発想の豊かさに驚かされました。子どもたちのこうしたいという思いを叶えてあげられるよういろいろなことを考えて用意することが大切だと感じました。(宇賀地由里)

2　講座名　あがれ！ボクの気球、わたしの気球

講座長　小西陽一（生活科学教育専攻2年）

○学生スタッフ名

木村　　僚（生4）	小松　裕貴（生4）	小林　和仁（生4）	今村　貴之（生4）
黒岩　佳奈（生4）	松島　理恵（生4）	山口　奈奈（生4）	志甫　知紀（生3）
小島　一生（生3）	室岡　聡也（生3）	松澤　　茜（生3）	原山　康則（生2）
増田　千秋（生2）	牧春　　香（言1）	武井　理美（言1）	池尻　亮介（心1）
佐藤彩音（清短2）	山口葉月（県短2）		

○参加者　　子ども3名（1名欠席）　　保護者2名

○講座の概要

気球が飛ぶ原理を学び、自分オリジナルの気球をビニール袋で作成。その後 W 館横で作成した気球を飛行させる。

○当日の活動日程

午前　気球の原理を学ぶ、ビニール袋とゴンドラに絵を描く

午後　気球の組み立て　全員で飛行　改良

○当日の子どもの様子

予定していた人数よりもかなり少なく、始まる前はかなり心配だったのですが参加してくれた子どもは寒さにも負けず自分の気球を作り楽しそうに飛ばしていました。最後に子どもたちに感想を聞いた際も、皆楽しかったと言ってくれたので、少ない人数でしたが良かったと思い

ます。

○反　　省

気球をより高く飛ばすために改良を重ね、何度も気球を作成しました。安全面に気をつけ時間内にできる気球を作成するとともに、子どもたちが飽きないように簡単に作成できるもので、遊ぶ時間を十分に取れるようなタイムスケジュールを作成しました。

人数は少なかったけれど、少ない人数でしかできないことが数多くあり、楽しい時間を過ごすことができたと皆感じていました。１年生や他大学の方の感想では、「大学に入ってから教育学部らしいことがあまりできていなかったが、１日とおして子どもたちと接することができ、良い体験ができた」、「先輩や他大学の知らない人と一緒に１つのプロジェクトを成功させることができてとてもいい経験になりました」というものがありました。

３　講座名　トレジャーハンター

講座長　高池亮輔（保健体育専攻４年）

○学生スタッフ名

笠井　悠太（理４）	原　　耕平（理４）	宮川はるな（生４）	平野　　結（障４）
齋藤有希（言Ａ１）	常盤千明（言Ａ１）	小林良太郎（理４）	大橋　正章（社４）
土屋　和毅（心３）	園田　　泉（実３）	佐藤　悠司（心３）	布山　朋和（実３）
町田　香帆（実１）	内川　舜也（実１）	原科　勇希（理１）	小谷　竜平（理１）
谷屋　　俊（社１）	齋藤　瑞恵（文４）	柴田　　計（実４）	青木智博（実ＯＢ）
小林　武郎（経５）	岩月芳恵（清短２）		

○参加者　　16名

○講座の概要

子どもたちが、グループごとに課題を解決しながらキャンパス内をまわる。

○当日の活動日程

① アイスブレイク・導入
② Ｒ団から鍵を取り返すために課題解決ラリー（午前）
③ 昼食
④ 遺跡探検（午後）

○当日の子どもの様子

子どもたちは遺跡を探検したいという気持ちから、午前中の活動では班のメンバーで協力してＲ団に向かっていく姿が見られた。また、お昼の休憩の時には「あいつがあやしい」といったような言葉からストーリーに入り込んでくれているなと感じた。最後に宝物を手に入れたときは、とてもうれしそうな表情をしていた。

○反　　省

このトレジャーハンターの企画では、とにかく子どもたちがストーリーの中に入り込んでドキドキ、ワクワクして欲しいと思って企画しました。それで、ストーリーや物品の準備には特に力を入れました。学生スタッフも準備やプレに積極的に参加してくれたり、当日来てくれた

1年生、他大生もすぐに講座に溶け込んでくれたり、スタッフ一丸となって当日に望むことができました。しかし、当日は時間がかなり余ってしまうなどして、子どもたちに本当に企画を楽しんでもらうことができなかったと思います。楽しみにして来てくれる子どもたちのことを考えて企画することの大切さを、今回改めて感じることができました。

4　講座名　本日開店！ミニパンやさん♡

講座長　飯島理沙（理数科学教育専攻3年）
講座長　片原範子（理数科学教育専攻2年）

○学生スタッフ名

市川　香織（実3）	中村　恵理（芸3）	島崎　涼子（芸3）	井手上将太（理3）
小林　　洸（理3）	森　三主輝（理3）	浦嶋　宏一（実2）	駒村　美代（実2）
藤森　麻衣（社2）	河住　恭平（理2）	湯本　　哲（理2）	志村　友紀（生2）
武藤　成美（生2）	平澤　里恵（生2）	伴在　　渚（社1）	岡澤沙季（県短2）
太田冴恵（岐聖2）			

○参加者　　子ども22名

○講座の概要

子どもたちの個性や願いを大切にしながら、かわいくておいしいミニパンをつくる。

○当日の活動日程

10:00	始めの会、アイスブレイク	12:30-13:00	お昼
10:20-10:40	生地作り	13:00-13:30	デコレーション
10:40-11:10	生地発酵・パンクイズ	13:30-14:00	終わりの会
11:10-12:30	形作り・焼き・デコレーション	14:00	講座終了

○当日の子どもの様子

6つの班に分かれて、みんなで協力しながらパン生地作りから行いました。初めて会う人たちばかりだったのですが、どの班も仲良く活動できました。生地をねかせているときには、学生が考えたパンに関するクイズで盛り上がりました。パンをただ作るだけではなく、ちょっとした豆知識を知ることができました。そして、いよいよ形作りです。形づくりでは、とてもかわいくておいしいミニパンたちがたくさんできました。熱心に自分の思う形にしようとしている子、デコレーションまで考えて作っている子、チョコをパンの中に入れようと試行錯誤している子…、その子らの個性も出ていたのではないかと思いました。そして自分で作ったパンを食べ、とても楽しんで行ってくれたのではないかと思います。

○学生スタッフの感想

去年も「YOU 遊フェスティバル」では人の力のすごさを感じたけれど、今年も感じました。この講座を成功させることができたのは、参加してくれた子どもたち、保護者さん、学生スタッフさんのおかげであり、そして、何より一緒に企画したのりこのおかげだと思います。当日、子どもたちが楽しそうに、自分だけのパンを一生懸命作っている姿をみて、おいしそうにパンを食べる姿を見て、「よかったなぁ」と、心の底から思いました。お昼に写真の現像をす

るために抜けていた学生スタッフのために、自分たちで作ったパンを残しておいて帰ってきた学生にあげていた子どもたちがいました。初対面なのに、パン作りを通して子どもと学生が仲良くなっていて、その姿を見てすごくうれしくなりました。この講座ができて本当によかったです。ありがとうございました。(飯島)

「子どもたちが思う、子どものころの夢を叶えたい」、そんな気持ちがふと浮かび上がってきて、この講座を開くことに決めました。初めての講座長。正直、本番が近づくにつれて、不安はどんどん高まっていくばかりでした。当日を期待して、楽しみにしてくれている子どもたち。学生スタッフにはスタッフとしてだけではなく、子どもたちと素で楽しんでほしい、という願いから、準備段階では何度も話し合いを重ねて、内容を考えました。料理講座なので、練習がいくら上手くいっても本番で決して上手くいくということは絶対に言えない為、不安も多くありましたが、当日は練習よりも大成功し、子どもたちや学生スタッフのたくさんの笑顔を見ることができました。その笑顔を見たとき、講座長として自分が頑張れたことの理由がはっきり分かりました。たくさんの人に迷惑をかけてしまったけれど、みんなのおかげで、講座が大成功したと感じています。支えてくれる人がいるということの大きさを肌で実感しました。講座長をやって本当に良かったです。(片原)

5　講座名　HEROES　～とらわれの姫を救え～

講座長　米山　幸恵（言語教育専攻２年）
講座長　坂本明日香（言語教育専攻２年）

○学生スタッフ名

龍野　直人（言２）	竹内　陽平（言２）	小池　美貴（言２）	丸山　葉子（言２）
太谷　春花（言２）	清水　香里（言２）	青木友佳里（言２）	山本　渓子（言２）
吉野　一弥（言２）	上野　　大（言２）	登内　恭平（言２）	熊市　真也（言２）
飯山めぐみ（言２）	吉江　成美（言２）	阿藤　　茜（言２）	田中　陽菜（言３）
戸谷　望美（言３）	山田貴子（清短２）	木村綾乃（県短２）	

○参加者　　子ども 16 名　　保護者１名

○講座の概要

魔物に捕らわれた姫を助けるために、７つの試練をクリアして魔法の呪文を集める、オリエンテーリングのような講座。

○当日の活動日程

10:20　プロローグ劇
10:40　試練開始。４つの試練を回る。
11:50～お昼ご飯
12:30～試練再会。残り３つを回る。
13:30～感想用紙記入とエピローグ劇。

○当日の子どもの様子

前日・当日に欠席者が相次ぎ、健康状態が不安だったが、参加した子どもたちは皆元気そうだったのでよかった。高学年の子どもにとっては退屈かもしれない、ストーリーに入り込んでくれないかもしれないという懸念があったが、楽しんでくれているようでよかった。真剣な顔

で試練に取り組んでいる様子が見られた。感想用紙に記入してもらったが、全員から楽しかったという感想を得られた。

○反　省

全員で集まって準備する時間がなかったので、試練ごとにスタッフを割り振り、準備を進めた。準備の進行状況、内容などは各試練任せであった。

子どもたちが楽しんでくれているようでうれしかった、という感想が多く出た。準備がなかなか進まなかったけど、間に合わせることができてよかった。当日、思ったよりも簡単に試練をクリアされてしまい困ったが、新しい問題を出す、難易度を上げるなど臨機応変に対応できてよかった。劇に出ているため、子どもたちとは直接関われなかったが、子どもたちの笑顔を見ることができてよかった。

6　講座名　冬でもできる!! 流し○○メン

講座長　鈴木　梢（理数科学教育専攻３年）
講座長　宮尾　亘（教育実践科学専攻３年）

○学生スタッフ名

吉田ちひろ（生４）	永谷　嘉浩（実４）	小林　巨樹（保４）	岩本　芙美（障３）
新保亜沙子（理３）	西村　良穂（理３）	井上　知洋（障３）	島田英一郎（理３）
小坂美智男（社３）	塚原　昌裕（社３）	宮尾　　匠（社３）	芦沼菜々恵（理１）
和田佳菜誉（障１）	勝海　公平（社１）	土井　嘉穂(県短１)	小林ちひろ(県短２)
二本松雄太（松４）	石下谷由紀菜(県短２)		

○参加者　　子ども９名（欠席２名）　　大人３名

○講座の概要

夏の親子体験教室で人気殺到、多くの子どもたちが断念せざるを得なかったため、今回「YOU 遊フェスティバル」で新たに「冬でもできる!! 流し○○メン」と名前を変えて講座を開いた。当日は子どもの参加数は少なかったが、アイスブレーク、学生による劇、流すものづくり（水餃子、うどん、白玉）、竹を使ったおわんはし作り、流し台を使って流したものを食べる（お湯を使用）、思い出作り（大根抜き）などを行い楽しんだ。

当日参加した子どもには、記念品として紙粘土で作った名札と、当日撮影した写真をはさんだ竹で作ったスタッフお手製写真たてをプレゼントした。また、インフルエンザのため当日これなかった子には、直接お宅を訪問し、名札と写真たてを手渡した。さらに、12 月下旬にはクリスマスプレゼントとして活動の写真をまとめた DVD を作り、子どもたち（欠席した子も含めて）全員に送った。

○当日の活動日程

10：00　アイスブレイク
10：20　はじめの会
10：40　活動開始
　・流すものづくり（白玉、うどん、水餃子）
　・竹細工（個人のおわん、箸制作）
12：25　流し○○めん開始★
13：05　思ひ出ぽろぽろ（大根抜き）
13：45　終わりの会
14：05　体育館へ移動

○当日の子どもの様子 ――――――――――――――――

はじめは緊張気味の子どもたちも、１年生が企画したアイスブレイクや活動を進めていくにつれ、だいぶ笑顔が見られるようになってきた。流すものづくりでは、子どもたちが楽しみながら調理する姿が印象的だった。特に、高学年のとある男の子を学生が包丁捌きをほめたところ、「そんなことないって、あっちの女の子の方がうまいよ～。女にはかてねぇ。」といいながら、その日初めて会った子を意識しながら、調理する姿が見られた。また、低学年の子も、うどんと白玉を必死にこねている姿が印象的だった。また、「ちょっと、餃子作りが大変だから手伝って！」という学生の言葉に反応し、全員が餃子作りを手伝ってくれた。

おわんはし作りは、普段使わない彫刻等を使い、子どもたちにとっても危険な部分、新たに挑戦する部分であったと思うが、お父さんたちの協力もあり、無事全員がおわんとはしを作ることができた。子どもたちも自分だけのおわんやはしができ喜んでいた。

そして、いよいよ待ちに待った流し台を使って食べ物を流す場面。子どもたちの中から大きな歓声が上がった。流れているものを取ることに夢中でいつの間にか自分のおわんがいっぱいになっていることに気づかない子もいた。そして、何より「おれ、流し○○メンでよかったかも！」と言い出す子もいるくらい楽しんでいた。

食事が終わると、思い出作りとして位置づけていた、ゲームを行った。当初は２つのゲームを予定していたが、時間の関係で１つ削り、「大根抜き」というゲームを行った。みんなで協力して学生を引っ張ったり、子どもたち同士が離れないように手をつなぎ協力することを通して、みんなで遊ぶことの楽しさに気づいてくれたのではないかと思う。

最後に、子どもたちに終わりの会で発表をしてもらった。発表が終わった後、ある子どもはみんなの前での発表が上手にできたことで、とても満足そうな顔をして自信を持って帰っていった。また、「看板持ち帰っていい？」といい、看板を持ち帰る子もいた。

○反　　省 ――――――――――――――――

この講座は、８月に行われた親子体験教室をきっかけに開くことを決めた。親子体験教室で開いた流しそうめんの講座で、50 組の親子が流しそうめんを希望したにも関わらず抽選にもれてしまったので、少しでも多くの人に流しそうめんを楽しんでほしいと、この講座を開いた。しかし、夏の行事を冬に行うということや、新型インフルエンザが流行っていたために、講座がひらけるかどうかも問題になってしまった。しかし、実行委員が全体としての対策を考えてくれ、流し○○メンのスタッフも、講座が開けるようにと必死で対策を考えたり、準備をしてくれた。スタッフがいなかったらこの講座は成立していなかったと思う。

インフルエンザのことや、冬に流しそうめんをやるということが、本当にこの講座を開くことができるのか最後まで不安であった。でも、多くの方のおかげで、「冬でもできる!! 流し○○メン」を、さいごには「冬でもできた!! 流し○○メン」にすることができた。当日の、きらきらした目で竹を見る子どもたちの表情は、流し○○メンのスタッフの宝物になった。本当に思い出に残る流し○○メンができたことに感謝したい。子どもたちに、保護者の方に、実行委員に、流し○○メンのスタッフに心から感謝したいと思った。

７　講座名　はりがねカンパニー

講座長　服部直幸（理数科学教育専攻２年）

○学生スタッフ名

井上　岳人（理２）　大井このみ（理２）　加瀬　智晴（理２）　金箱　仁志（理２）
髙見澤　誠（理２）　田澤　岳哉（理２）　土屋　克明（理２）　山本　郷（理１）
中村　静香（芸２）　小林　美実（生２）　池田　貴広（野２）　峯村　和裕（理２）
坂口聡美（県短１）　熊谷恵美（県短２）

○参加者　年中～小３までのこども９名（うち３名欠席）　保護者３名（見学）

○講座の概要

針金を使い、子どもたちの作りたいものを作り、１人１枚のコルクボードの上に装飾して完成させる。

○当日の活動日程

10:00～10:10　移動（体育館→N203）
10:10～10:30　導入　針金伝言ゲーム
10:30～12:15　製作①（針金）
12:15～12:45　お昼ごはん（N203）
12:45～13:30　製作②（装飾）
13:30～13:45　展示・終わりの会
13:45～13:50　片付け
13:50～14:00　体育館へ移動

○当日の子どもの様子

「意外とあっさりと飽きてしまうかもしれない」、「つくりたいものといっても困るかも？」などの不安があったが、子どもたちも予想以上に針金いじりに食いついていたと思う。最初は平面な製作だったが、徐々に立体も作り出す子がいた。装飾では外に出たりしながら完成させる子もいた。学生は人数に関係なく、自分のできることを精一杯やってくれていた。しかし、教えるではなく、作ってあげるということが多くなってしまったことを反省している学生もいた。

○反　省

とりあえず何かやろうとして始まったこの講座であったが、最後までできたことがうれしい。講座長の声が出ないなどハプニングもあったが、学生のこれまで積み重ねてきた経験で信頼できる仲間の臨機応変さに感謝である。もっともっと準備しておけば、もっと学生も子どもも充実した時間になったと思う。

子どもの発想を大切にするということで、見本など最小限に抑えたが、抑えたことで学生の技術や関わり方が少し雑になってしまったことは反省点である。

8　講座名　冬のドタバタ大運動会！！

講座長　中川　茜（生活科学教育専攻４年）
講座長　東野千尋（芸術教育専攻３年）

○学生スタッフ名

田畑隆太郎（実３）	藤田　裕介（社３）	小松　　静（障３）	佐久　理絵（数２）
山越　　俊（社２）	竹中麻由子（生２）	梅沢　美夏（言４）	小林　知未（生３）
荻原　知子（実２）	小島　菜月（実２）	藤沢　　萌（実２）	丸山　絹代（実２）
武藤はるか（実２）	山口美由紀（実２）	吉田　智美（実２）	関谷　将司（社１）
松田　祐貴（社１）	小髙　大樹（上２）	菅原　功典（横３）	髙橋真依（県短２）

○参加者　　子ども 18 名（内２名欠席）

○講座の概要

いつも悪さばかりしているオラとコラを倒すために、ドタバタ戦隊ドタレンジャーが立ち上がった。ドタレンジャーがオラとコラを倒すには、ドタバタゲージを満タンにして、必殺技を出さなければいけない。そこで、さまざまな競技を通して、みんなでドタバタすることで、パワーをため、オラとコラを必殺ドタバタビームで攻撃した。オラとコラは改心し、みんな仲良くなりましたとさ。

○当日の活動日程

・準備体操

☆午前種目☆

・だるまさんがころんだ
・そらからなにかがふってくる☆
・のっそのっそいもむしリレー
・デンジャラス・トラップ

☆午後種目☆

・あくしゅ大会
・こおりおに
・どーも　どーも
・アブラハムには７人の子
・マイムマイム
・表彰式

○準備段階の話

講座長２人で最初に集まったときに、「何しよっか？」と２人ともノープランの状態から始まった今回の講座は、どの講座よりも、準備時間がかかった講座だと思います。「チームに分かれて、ただ競い合うだけの運動会にはしたくない」という思いから、点数はつけるのか、勝ち負けをつけていいのかなど、話し合うことが満載で、夜中の２時まで話し合いが終わらないこともしばしば…。

また、導入で劇をやりたいという講座長のわがままにより、ドタバタ戦隊ドタレンジャーと、悪役のオラとコラが誕生し、準備スタッフの方が、台本をアレンジしたり、衣装制作を工夫してくれたりしたおかげで、数々の迷言とクオリティの高い劇が完成しました。

しかし、当日スタッフが集まったときも、まだ準備が終わっていないものが多く、学生スタッフの方々には、本当にご迷惑をおかけしたと思います。しかし、そんな大変な講座にもかかわらず、みんなが協力してくれたおかげで、無事本番を迎えることができました。

○当日の子どもの様子

当日は、親と参加するという子どもが少なく、みんな緊張した面持ちで開会式に臨んでいま

した。しかし、そんな子どもたちも、アイスブレイクをしていくうちに、自然と笑みがこぼれ、面識のない子ども同士や学生と子どもが、競技を通して会話をする様子が見受けられました。

○学生スタッフの感想

1人でやるんじゃなくて、みんながいるからできるんだ、ということを強く感じた。1人の頭の中だけで考えるんじゃなくて、みんなの心に響いて、やろうと思って協力してくれるから実現する。運動会は本当に準備の大変な講座だと思った。(中川)　初めて講座長をやって、人の意見を聞き入れることの大切さ、人が協力してくれることのありがたさを学んだ。今までは人の意見を聞かなかったが、みんなの意見を取り入れていくことで、よりよいものが作れるということが分かったし、自分だけじゃどうしようもないことでも、みんなが協力してくれるから乗り越えられたと思う。(東野)　子どもたちが楽しく遊んでいるのはとてもうれしく、その楽しさを作り上げているというのは、すごいと思った。(藤沢)　子どもたちと思いきり走りまわったのが楽しかった。(荻原)　準備の段階から参加したかった。(山口)　遊び場作りの大変さと、子どもの笑顔をみることができたときの嬉しさを学んだ。(山越)　1つの活動を作り、行っていくことの難しさを学んだ。(藤田)　やんちゃな高学年の子が、幼稚園児に優しくしているのを見たとき、手に負えないと思っていた子にも、色んな面があると再確認した。(高橋)　長時間の講座の中で、どこに子どもたちのテンションをMaxに持っていくかが大切なんだなと思った。(菅原)　劇の役をしていて、子どもたちが声をかけてくれたときが嬉しかった。(小松)　自分の担当した競技で、子どもが喜んで動いていたのが嬉しかった。(佐久)　準備で、意見を言わなければと焦ったが、流れにのって当日を迎え、楽しく終われてよかった。(竹中)　当日参加だったのに、活動の仕事をもらえ、主体的に関わることができ、楽しかった。(小髙)もっと多くの人を巻き込み、役割を与えて、全員が共有しなければいけないと思った。(田畑)

9　講座名　日本縦断!! グル巡り

講座長　福田朱里（障害児教育専攻2年）

○学生スタッフ名

石田　育恵（障2）	髙橋奈津子（障2）	鈴木　里帆（障2）	畑　　貴恵（障2）
西垣　伸吾（障2）	伊井　健太（地2）	窪田　郁恵（芸2）	梅津　千秋（芸2）
久保　朝夏（芸2）	早川　侑希（生1）	駒村　瑞穂（社1）	竹花あかね(清短2)
加藤未来（岐聖2）	小林佳奈（県短1）	長屋ちひろ(県短1)	

○参加者　子ども13名（当日9名）　保護者1名

○講座の概要

生キャラメル、餃子、たこ焼き、紅芋タルトと各県の名産をそれぞれの屋台に分かれ作り、最後にみんなで食べる。くじで屋台分けをするようにしていたが、子どもたちに希望を取ったところ上手く屋台分けをすることができたので、希望の屋台に分かれてそれぞれを作った。出来上がりまで待つ時間がある屋台もあるのでゲームをしようと思っていたが、子どもたちが他の屋台に行き手伝っていたので上手く待つ時間を使えたと思う。最後には、みんなで出来上

がったものを食べた。

○当日の活動日程

10:00～10:30　アイスブレイク
10:30～12:00　調理
12:00～13:00　食べる
13:00～13:15　記念撮影
13:15～14:00　体育館へ移動

○当日の子どもの様子

希望の屋台に分かれて活動するようにしたが、１つの屋台でずっと活動する子どももいれば、色々な屋台で作っていた子どももいて、自分の思うように自由に活動していた。子どもたちの手さばきが予想以上のもので、とてもスムーズに活動できた。

○反　　省

参加決定するのが遅くなり、活動の大まかな内容やイメージはあったものの具体的なものは決まっていなかった。試作会などは３週間前に１回行った。屋台の担当を決めたりと具体的なものの決定は１週間前になった。それからスタッフへの連絡は毎日行い、全体の試作会は前日となってしまったので、ギリギリの準備となってしまったが、当日には全員が作った上で活動に取り組むことができた。

準備不足でスタッフには不安なまま当日を迎えてもらうことになってしまったことが講座長としての反省点です。でも、当日は子どもたちやスタッフの的確な行動に助けられ、無事成功することができた。学生スタッフからも、初めに希望をとった時の人数のばらつきには驚いたが最終的にはみんなが満足できる振り分けができて良かった、アイスブレイクで一気に仲良くなれたのでして良かった、子どもたちが自主的に活動し逆に１つにこだわらなかったのが良かった、というような感想ももらった。

10　講座名　いざ、ソーラン節 ～大漁目指して～

講座長　国澤結子（生活科学教育専攻２年）

○学生スタッフ名

邉田　卓馬（心２）	青木　　駿（工２）	小林　亮介（工２）	青木　洋康（工２）
岡本　侑子（工２）	春日井貴統（工２）	小林　佳奈（医２）	後藤　成実(人文２)
稲川　沙良(繊維２)	柘植　陽介(経済２)	牧野　恭宏(理学２)	木内　浩二（理１）
森田　彩虹（野１）	村松　春美（生１）	西山　綾夏(理学１)	岩田真利江(理学１)
堀内　咲紀(人文１)	竹内麻衣子(人文１)	加藤　千沙(工学１)	髙桑　尚樹(経済１)
深川　崇光(農学１)	渋谷美奈子（実３）	石原加奈子（実３）	黒澤　春香（生３）
鈴木　文香（生３）	後藤　知子（理３）	矢野　孝幸(工学３)	宮澤　広樹（実４）
松永弥奈美（理４）	鈴木　里佳（理４）	天谷　美怜（保１）	大日方宏督（保１）

○参加者　　子ども９名　　保護者１名　　欠席１名

○講座の概要

ソーラン節を練習し、全体の場で発表する。

○当日の活動日程

集　合	昼　食
アイスブレイク	ソーラン節特訓2
スタッフによるソーラン演舞	発表準備（着替え、フォーメーション）
ソーラン節特訓開始	全体会発表
	子ども表彰

○当日の子どもの様子

集合時は、スタッフから逃げていく子や、不安そうな子どもがいたが、実際に講座が始まり、スタッフによるソーラン節の演舞を見たら、みんなまじめに熱心にソーラン節を覚えようとしていた。やはり、実際に見たソーラン節は「かっこいい」「すごい」という印象が強く、子どもたちの参加意欲にもつながったのではないかと考えられる。

練習に入ってからは、スタッフの予想していた進行速度を大きく上回るスピードで理解し、また貪欲に質問をしてきたり、進行を促したりとこちらが驚くほど意欲的であった。おそらく、はじめの動機付けがよい方向に働いたのではないかと思われる。同時に「発表」という言葉を使うと、少し不安そうな感じとわくわく感を感じているように見え、より積極的になったように感じた。

実際の発表時には、スタッフとともに衣装（法被、鉢巻）を着、大勢の前で踊るという珍しい機会を楽しんでいるように見えた。

全体会の解散後、子どもたちそれぞれに表彰を行ったところ、みんな満面の笑みで受け取ってくれ、その表情、言葉から強い達成感を感じ取ることができた。目に見える形での自らの成長（発表）と、他人からの評価（表彰）によって自信につながったのではないだろうか。

○反　省

何より、子どもたちが積極的になってくれたおかげで、子どもたちメインに講座を進めることができたところは非常によかったのではないだろうか。子どもたちメインで講座を行うことで、効率は大きく上がったといえる。この結果は、他の場面にも応用可能で重要なことではないだろうか。なにより動機付け、意欲を引きだすことが最大の課題のように思われる。今回は、『初めのスタッフによる演舞』と『発表という目に見えた目標』が効果的に働いたのではないかと思われる。

本講座は、スタッフの所属する学部が教育学部にとどまらず多くの学部からの参加があったため、スタッフとしても子どもと触れ合うという珍しい機会であり、よい経験をしたという意見が多かった。しかし、逆に教育学部の学生だけではないからこそ、準備段階で多少なり子どもとのかかわり方についても話して、各自理解しておく必要があったようにも思われる。

また課題として、本講座は『ソーラン節を教えること』をメインとしていたため、子どもたち同士のかかわりについてあまり考えていなかったことがあげられる。せっかくこの場でであったのだから、もう少し子どもたち同士の関わり合いが持てるような工夫をすべきだったのではないかと思われる。

しかしながら、全体を通して結果的には子どもたち、学生スタッフともに楽しみ、満足して終えることができたため、大成功であったといえる。

11　講座名　あそび屋　わにわに

講座長　半田　裕（工学部４年）

○学生スタッフ名

渡辺　奈央（言１）　羽賀　裕貴（社１）　中澤　洋平（社１）　畑中　奈穂（心１）
斎藤　俊介(武蔵１)　福沢　かほ(清短２)　根石ゆり恵(県短１)　野池　成子(県短１)
大塚　白実(飯短１)

○参加者　３歳児男子１名　小４女子１名　中１男子２名　保護者１名

○講座の概要

プレーリヤカーを使って信州大学を一日冒険遊び場に。子どもたちのやりたい事を引き出し、それを子どもたちと実現する。

○当日の活動日程

自己紹介　作戦会議　豚汁作り　リヤカー探検　ブランコ作り　サッカー
キャッチボール　昼食　ストロー笛　折り紙

○当日の子どもの様子

初めはやはり馴れていないようで、子どもたちからどんどんやりたい事を言ってくれるというよりは、学生側から「なにしよっか？」や「あれやろう」と働きかけることが多かったです。しかし、馴れてくると自分から「あれやりたい」と言ってくれるようになりました。

特に良かった出来事は、「木にブランコをかけたい」と言ってきた女の子と一緒に試行錯誤しながらブランコをかけた場面。初めはただ太いロープを木に向かって投げるだけでちっともかからず、そこから投げやすい細いロープを太いロープの先につける、さらに何回かやってみて細いロープの先に靴をつけてもっと投げやすくする。といったように、子どもたちと学生スタッフが一緒になって試行錯誤した結果、ブランコが完成。完成したときのスタッフも含め子どもたちの満足した顔が印象的でした。

○反　省

当日は子どもたちのやりたい事を引き出し遊ぶということで、事前の物品の準備はほとんどありませんでした。そのかわり、課題となるのは、本番で子どもたちのやりたい事を引き出すことや、それを実現するような関わり方はどうやるかということでした。そのため、事前に若里公園に行き、公園にいる子どもたちと実際に遊んできました。その経験から振り返りをすることで、当日の動きをイメージしてもらいました。

もっと他の講座みたいにこっちからできる遊びをいろいろ用意した方が良いのではと思っていたけれど、今回「わにわに」で遊ぶことでそうやってこちらから提供する遊びの大事さだけでなく、子どもたち自身が何をしたいのかを引き出すことも大事なのだと思った。そして、自分が遊んであげると言うのではなく、子どもたちのやりたい事を実現してあげるというサポートの大切さと難しさが分かった。

はじめは子どもと遊ぶと言っても何をしてよいのか戸惑った。しかし、遊んでいるうちに、子どもたちと遊んであげると言う考え方ではなく、自分も子どものように自分がやりたい事で遊べば良いんだなと思った。そうすることで子どもたちと仲間のようになれたことが嬉しかった。

子どもたちの「やりたい」と言う気持ちがあるからこそ、ブランコをつくる時になかなかできなくても全然嫌にならずに頑張っていたし、完成したときもすごく達成感があったのだと思う。今回のように子どもたちの「やりたい」と言う気持ちから始めるということを大切にして、子どもたちと関わっていきたいと思った。

12　講座名　旭山に登って秋を描こう

講座長　矢土裕和（野外教育専攻３年）

○学生スタッフ名

金澤　史朗（体２）　錦織　啓佑（心２）　志村　大輔（理４）　水間さや香（生２）
矢沢ひかり（清短２）　降旗実貴子（県短１）　佐藤　梓（県短１）

○参加者　子ども３名

○講座の概要

教育学部からほど近い旭山へ徒歩で登山しながら、その際感じた秋を俳句にする。

○当日の活動日程

10:00　学校出発　14:40　学校帰着

○当日の子どもの様子

参加者は３人だったが、３人とも非常に元気のある子たちで、登山も楽しそうに行っていた。ほどほどにきつかったので、無言になることもあったが、基本的には常時元気な状態であった。

○反　省

反省点が多くある結果となってしまった。その中でも大きな反省点としては、２点ある。まず、１点目としては、旭山までの道が長すぎて、子どもに退屈な思いをさせてしまったことである。子どもは山道を楽しみにしていたのであって、歩くことを楽しみにしているわけではなかった。２点目として、時間の問題である。登りは時間どおりに進んだのだが、予想以上に下山に時間がかかってしまった。子どもの体力は、下山時にはほとんど残っていなかったようだ。しかし、よかった点もあった。やはり子どもに楽しんでもらえたことである。俳句と登山という今の子どもがしないようなことを講座として取り上げたわけだが、進んで俳句を書いてくれるし、学生よりも先へ登っていこうという意識が大変あり、この講座に自分から参加していこうという気持ちが見られた。

学生の様子としては、多少怠惰感は途中で生まれてしまったが、最後には大変よかったといってもらえてこちらとしてもうれしい限りであった。

突発的な講座であったため、つぎはぎだらけのような講座になってしまったが、かたちとしては成り立った。もし、似たような講座がまた開かれるのであれば、今回のこの講座をぜひ参考にしてほしい。

○その他スタッフの反省

旭山は大学のすぐ近くにあり、下から見上げると「高いなあ」と感じる。本当に半日で登れるのだろうかと思うかもしれない。しかし、登ってみるとやれてしまうものだ。頂上からの眺めもとても美しい。今日の講座で子どもたちが達成感や楽しさを感じてくれたならば、企画し

た意味があったと思う。(金澤史朗)

秋を描こうと題を取ったからには、より秋を意識させる内容であればよかったかもしれません。道中の秋の季語になりそうな物事を一つ一つ取り上げて、少しずつでも子どもに教えていたならもっと面白い句ができたかと思います。一方で子どもは楽しんでくれてはいたようなので、その点では満足しています。(錦織啓佑)

「YOU 遊」のスタッフとして活躍している友人がいる中で、そういった経験のない私は大きな不安を抱えたまま当日を迎えた。やはり、子どもは難しい。思ったとおりには動いてくれない。うろたえてばかりだったが、終わる頃には半ば体当たりのような勢いで子どもと関わっていけるようになった。自分から歩み寄らなければ、子どもも応えてくれない。こちらが心を開いた分だけ子どもも心を開いてくれる。身を持って学ぶ良い機会だった。(水間さや香)

◇実践から得た「臨床の知」

人と人のつながりの中で

早川和宏(理数科学教育専攻3年)

「YOU 遊フェスティバル」は、年に一度しか開かれないが、「YOU 遊世間」のプラザの中でも一番大きな規模のプラザであると思う。今年はインフルエンザの流行などの影響で、昨年に比べ参加人数は少なかった。しかし、120 人以上の子どもたちをはじめ、多くの保護者の方々、学生、地域の方々が参加していただき、無事、「第8回 YOU 遊フェスティバル」を開催することができた。このフェスティバルが成功したのは、多くの人たちの支えや協力があったからである。学生はこの「YOU 遊フェスティバル」を通じて、何を得たのか、何を学んだのか考えていきたい。

1. 子どもとの関わりの中で

・リースをデコレーションするとき、子どもたちはとても自由な発想でやっていてとても楽しそうだった。子どもたちの笑顔を見ることができてとてもよかった。

(「クリスマスリースをつくろう」参加学生の感想)

・初めは「この子パン作れないのかな?」と思っていた男の子が、中盤からすごく集中してパンを作り、最後に「パン作り楽しいね」と笑顔で言ってくれて幸せ度 MAX でした!

(「本日開店!ミニパンやさん♡」参加学生の感想)

・子どもの発想力には驚かされるばかりだった。お手伝いをしてあげることでかなり上手に作ることができていたと思う。最初は「ハリガネなんて……」とハリガネで作品を作ることであきてしまうと思っていたが、時間いっぱい作ってくれてうれしかった。

(「はりがねカンパニー」参加学生の感想)

・子どもたちと一緒にたくさん走り回って疲れたけど、子どもたちの笑顔や真剣な顔など様々な表情を見たり、一緒に悩んだりできて楽しかった。

(「HEROES〜とらわれの姫を救え〜」参加学生の感想)

私たち学生は、普段このような活動をする上で、様々な企画を考える。そのとき、どうしたら子どもたちが楽しんでくれるだろうか、何を伝えられるのだろうかと子どもたちに何かを与えようと考えて企画していることが多いと思う。しかし、今回の学生の感想からも分かるように、学生自身も子どもたちから多くのことを学び得ているように思える。この「YOU 遊フェスティバル」では、どの講座も学生が何度もプレを行ったり、話し合ったりして、準備をした上で臨んでいるにも関わらず、子どもの発想力やアイディア力に驚かされている学生は少なくない。これは、どの講座も子どもの主体性を大事にした企画だからこそ生まれてくるものではないだろうか。そして、熱心に企画した学生とそれを楽しみに来た子どもたちが関わりあうことで、自分たちの想像を超えた考えができるのだと思う。よって、この「YOU 遊フェスティバル」は、このような学生と子どもたちの出会える貴重な場であるといえるのではないだろうか。一生懸命企画したものも実際に子どもたちと活動してみて1つの形ができる。それは、決して話し合いだけではわからないことがたくさんある。学生と子どもたちがお互いに夢中になって活動している中で、多くの気づきが生まれてきたと思う。

また、子どもたちにとっても自分の学校と異なる学校の子どもたちと出会える貴重な場である。その日に初めてであった仲間同士で同じ活動を行い、協力し合ったりすることは、お互いに良い刺激を受けているに違いない。そして、新たな友情ができている姿もみることができ、子どもたち同士でもこのフェスティバルで得るものがあるのだと気づかされた。

2．学生同士の関わりの中で

昨年、1日目の午前中の時間を使って学生レクレーションを行った。その中でも得られるものがたくさんあり、今年も学生レクレーションを行った。内容としては、60 周年記念事業としての内容を含むなど、今年の色を出した。無作為に選ばれたグループで教育学部キャンパス内をめぐり、同じ講座以外の学生同士の交流を考えた。

・アイスブレイク的な意味で、他の講座の活動などについて、普段話すことのなかった人とコミュニケーションをとることができて楽しかったです。活動の意欲がわきました。

（「冬でもできる!! 流し○○メン」参加学生の感想）

・楽しかったです。みんなで話し合って考えて答えを出すのは面白い。

（「あそび屋　わにわに」参加学生の感想）

・スタンプラリーのように校舎の中を回るのは、1 年生の自分にとって校舎の様子が知れてよかった。クイズもユニークでとても楽しくまわれた。

（「トレジャーハンター」参加学生の感想）

・初対面の人とクイズなど活動できたのは本当によかった。みんなと盛り上がったりできたのが楽しかった。交流を深められる企画だったと思う。行ったり来たりが大変だったけど、おかげで移動中に話したり出来たのがよかった。

（「いざ、ソーラン節」参加学生の感想）

このような 200 人もの学生みんなで1つのレクレーションをするという場はなかなかないと思う。このような機会を設けることで、今までに接したことのない人との関わりが生まれる。学生の感想の中には、「初めはとても緊張していたが、歩き回っているうちに仲良くなれた」といったように、学生レクレーションを通じて変わっていく自分に気づけた人もいた。学生もこういう場を通じて、人との関わりの大切さ、そして同じ子どもたちと触れ合う活動をしてい

る仲間から良い刺激を受けたのではないだろうか。感想の中にも、子どもたちの活動への意欲がわいてきたという人が何人もいた。また、他大学の学生が参加してくれたので、今までになかった考え方、子どもたちとの関わり方を学びあうことができたのではないかと思う。

以上のように、子どもとの関わり、学生同士の関わりから見て、この「YOU 遊フェスティバル」は非常に意味のある良い活動となった。この経験そのものが大切であり、また色々と学び得ることができ、自分を見直し、プラスにできた活動であったのではないかと思う。しかし、この「YOU 遊フェスティバル」の成功の裏には多くの支えがあったことを忘れてはならない。「YOU 遊フェスティバル」をつくりあげていく中で、学生スタッフ、「YOU 世間」の連携団体の皆様、長野市 PTA 連合会、保護者の方々、大学関係者（教職員、生協、学務等）などの多くのご支援・ご協力のもと成り立っている。

3．学生スタッフの協力

今年の実行委員は、実行委員経験者が１人、「YOU 遊フェスティバル」参加経験者３人、フェスティバル自体初参加者が３人の７人であった。まず、「YOU 遊フェスティバル」とはどのようなものかというゼロのスタートから始まった。無事、「第８回 YOU 遊フェスティバル」が成功に終わることができたのは、多くの学生スタッフの協力があったからだと、実行委員一人ひとりが実感した。食事においても、実行委員７人で 200 人分のご飯を作ることなどできない。夜遅くまで、多くの学生が自分たちの講座の準備も忙しいのに、手伝ってくれた。会場づくり、料理の配膳などにおいても１年生、他大学の方もみんな協力して準備をしてくれた。また、子ども募集においても、ビラを小学校や知り合いに配ってくれる信大生がいたからこそ色々なところから子どもたちがたくさん集まった。「改めて人と協力してなにかを作り上げることの素晴らしさを知った。」と実行委員の感想にもあったように、この「YOU 遊フェスティバル」を通じて、人と協力し、お互いを支え合っていくことの素晴らしさ、大切さ、そして感謝する気持ちを忘れてはならないことが実感できたと思う。

4．「YOU遊世間」の連携団体、長野市PTA連合会の皆様の協力

「YOU 遊フェスティバル」では、「YOU 遊世間」でお世話になっている子どもたちの参加が特に多い。これはプラザで連携している地域の方々のご協力のおかげである。地域の学校に募集チラシを配布していただいたり、宣伝をする時間を作っていただいた。これも長年かかわってきた地域と「YOU 遊世間」の関係があるからこそ信大生の企画に信頼を寄せていただいているのだと思う。このような関係や信頼をこれからも私たちは大切にし、感謝していかなければならないと感じた。

また、昨年より長野市 PTA 連合会の皆様にも協力していただいた。平成 21 年８月１日に行われた「親子体験教室」において、フェスティバルの宣伝をさせていただいたり、今年の「YOU 遊フェスティバル」の募集チラシを長野市内の各学校に配布してくださった。私たち学生だけでは決して長野市内の全小学校にチラシを配布することはできない。けれども、学生の活動に興味を示していただき、協力していただけたことに本当に感謝したい。

この「YOU 遊フェスティバル」の中心である子どもたちを集めるにあたって、本当に多くの地域の方々が協力していただき、私たちの活動を支えてくださっていることを忘れず、活動していきたいと思う。

5．保護者の方々の協力、関わり

毎年「YOU 遊フェスティバル」には多くの保護者さんにも参加していただいている。これは学生にとって、来てくれた子どもたちの保護者さんとも関わる貴重な機会でもある。リフレクションシートの中にも、保護者さんとの関わりを持つことができ貴重な体験ができた人もいれば、どう関わるかまだよく分からない人もいた。この「YOU 遊フェスティバル」を通じて、保護者さんとの関わり方について考えられる機会になればと思う。そして、「YOU 遊フェスティバル」に理解を示していただき、大事な子どもたちを学生に預けていただき、当日の会場までの送り迎えや一緒に参加していただいていることに感謝をしたい。こういった保護者の方々の期待や願いを忘れずに、私たち学生は活動を行っていかなければならないのだと思う。

6．学務係・大学生協・会計係の方々、大学教員の協力

この「YOU 遊フェスティバル」は学生の力だけで成り立っているわけではない。会場として、この信州大学教育学部キャンパスを使わせていただいたり、食事を準備する関係において多くの大学関係の方の協力を得ている。大学生協の方には、休日にもかかわらず食堂をあけていただいたり、学務の方には教室やストーブ、暗幕やマイクなどの物品まで手配していただいた。学校側の協力がなければ「YOU 遊フェスティバル」は開催することはできない。私たちは学生だけでやっていると思わず、影でバックアップしてくださっている方々に感謝しながら活動していきたいと思う。

まず、この「YOU 遊フェスティバル」では、信州大学の先生方に多くの理解とご協力を得て成り立っていることを忘れてはならない。調理室を使わせていただく際にご理解いただいたり、授業の日程をずらしていただいたりと大変迷惑をかけてしまった。しかしお願いに行った際、激励の言葉をいただいたりとご理解していただいた。本当に感謝したい。また、担当教員の土井先生のご協力がなければ決してこのフェスティバルが成功できなかったと思う。講座が集まるか不安だった時も、先生も自ら講座長を探していただいた。今年は、実行委員を経験した者が私ひとりであったため、何か抜けているところがあったとき、土井先生が声をかけて下さったり、フォローをして下さった。そして、子どもたちがたくさん集まるようにと、長野市の PTA 連合会や附属小など多くの場所で「YOU 遊フェスティバル」を宣伝してくださり、色々なところから子どもたちが集まってくれた。また、今年は新型インフルエンザの流行により、子どもの欠席の連絡がきたり、他のイベントがインフルエンザにより開催を中止しているとき、私は「YOU 遊フェスティバル」を開催するべきかとても悩んだ。そんな時も土井先生と相談し、私たち学生のできるだけの予防を心がけることで開催するという方針が立てられた。何事にも土井先生は積極的に行動に移されていく。信州大学 60 周年記念事業としての間伐作業を行うにも、どうしたらできるのか考えている中で、先生の姿から私たちも挑戦していくべきだと思い、今年行動に移すことができた。

最後に土井先生の存在があるからこそ、この「YOU 遊フェスティバル」を私たち学生が主体となって開催できた。土井先生への感謝をわすれてはならないと思う。

7．最後に

私は「第8回 YOU 遊フェスティバル」を通して多くの人とのつながり、協力することの大切さに改めて感じることができた。みんなが協力し、お互いを支え合っているからこそこの

フェスティバルが無事に成功したのだと思う。200 人もの学生が、お互いに何かを学び、何かを伝えあえる、そして感謝することの大切さに気づけたのではないだろうか。「YOU 遊フェスティバル」は学生、子ども、大人がみんな揃って活動を行う貴重な場である。人と人とが関わる大切さ、おもしろさ、また大変さを感じ、そしてこれからの人生に影響を与えることができるのではないかと思う。

最後に、まだこの「YOU 遊フェスティバル」は発展途中であり、毎年の色がある。何事も新しいことに目を向けがちであるが、まずは基礎をしっかりと理解した上で、今後新たなことにも挑戦していけるフェスティバルであってほしいと思う。

「第９回全国フレンドシップ活動」（報　告）

切磋琢磨し、感動を共有しあった第９回「全フレ」

土井　進（信州大学教育学部）

１.「義民の里」青木村での歓喜の感涙

平成 21 年３月４日（水）午前７時に信州大学の本部スタッフは、開会式場となる体育館での準備作業に取り組んでいました。そして、長野駅に到着する他大学の参加者を自家用車で次から次に迎えに出ました。

10 大学 70 人の参加者は火の気のないとても寒い体育館にもかかわらず、元気に 10 時からの開会式を迎えました。岩永恭雄教育学部長から歓迎と激励の挨拶がありました。発表された班ごとにアイスブレークを行い、寒さを吹き飛ばしてすっかり打ち解けました。生協で昼食をおいしくいただいたあと、早速活動が開始されました。

私はホスト校の利点を活かして、皆さんの５泊６日にわたる全活動を目の当たりにする機会に恵まれました。皆さんの活動にはどの場面を切り取っても、そこに真剣な学びと温かい友情が満ちあふれていました。叡智が輝き、ユーモアと笑いが一杯で、対話の花が咲き香り、いつも歌声が響いていました。

３月８日の青木村文化会館での後夜祭では、挨拶に立たれた村長、教育長、教育委員長の各氏から共通して、学生の皆さんの将来の発展にかける大きな期待が語られました。また、遙か 50 年前の学生時代を思い出し、青春時代のすばらしさをうらやましいばかりに話されました。

このように学生が集いあい、切磋琢磨し、友情（Friendship）の絆を結んだことは、「一生物」の体験になったことでしょう。ある参加者はこの全国フレンドシップ活動で、「人間としての学びを得たのは 180 度といっていいほどの変化でした」と語ってくださいました。

青木村の村長宮原毅様は、青木村が全国の村の中で唯一国宝を持っている村であることと、「義民の里」であることを紹介して下さいました。青木村文化会館３階の義民資料室には、江戸時代に命を懸けて村人を護った義民たちの尊い遺品が展示されていました。人間の「教育」という尊い偉業に生涯を懸けようとして青木村に集われた皆さんの心にも、義民の不滅の精神

が伝わったことでしょう。

後夜祭は、感動が感動を呼び、共感が共感を呼び、新規開拓への決意が新たな決意を生み、歓喜と歓喜が共鳴する感涙の場となって、午前０時を過ぎても語らいは尽きませんでした。ここには感動がありました。感激の涙がありました。友情の花が満開に咲きました。まさに青春そのものでした。

私は、この事業を陰で支える立場でいられることに誇りを感じました。学生の皆さんと共に歩めることが生きがいであると思えるようになりました。これからも全国の大学の先生方と連携しながら、フレンドシップ活動が発展するように全力で取り組んでいこうと決意しました。

２.「全国フレンドシップ活動」の歩み

いかなる事業も、その精神と伝統を語り伝えていかなければ発展は望めません。私たちが取り組んだ第９回全国フレンドシップ活動も、10 年前に卒業した先輩諸氏ならびに各大学の指導教員の先生方、事務職員の方々等の尊いご努力が、後輩へまた後輩へと受け継がれて第９回目を迎えることができました。

第 10 回目を横浜国立大学で開催することに決まり、次の 10 年への新たなスタートが始まろうとしているこの時に、これまでの 10 年間の歩みを一覧できるように、次のような表を作成してみました。なお、表中の空欄につきましてはそれぞれの大学において資料を確認していただき、わかりましたら下記（表の末尾）へご連絡をお願いします。

表．全国フレンドシップ活動の歩み

回	年月日	ホスト校	参加大学	学生数	特徴など
0①	1999年 11月13日	信州大学	広島・愛媛・熊本・秋田・福島・大分・琉球・高知・愛知教育・鳴門教育・横浜国立・上越教育・信州	約40名	教員養成学部全国学生シンポジウム
0②	2000年 12月９日	信州大学	横浜国立・上越教育・鳴門教育・熊本・信州	約50名	第２回フレンドシップ事業全国学生シンポジウム
1	2001年	鳴門教育大学	横浜国立・上越教育・鳴門教育・熊本・信州		地引き網
2	2002年	熊本大学			
3	2003年	上越教育大学・信州大学	福島・横浜国立・広島・鳴門教育・熊本・上越教育・信州	38名	妙高少年自然の家
4	2004年	横浜国立大学			
5	2005年	広島大学			
6	2006年	福井大学			
7	2007年	横浜国立大学			
8	2008年	上越教育大学	茨城・横浜国立・上越教育・岐阜聖徳学園・福井・広島鳴門教育・熊本・信州		妙高少年自然の家
9	2009年 ３月４日 ～９日	信州大学	熊本・広島・鳴門教育・奈良教育・岐阜聖徳学園・福井・横浜国立・文教・上越教育・信州	70名	青木村 麻績村 長野市檀田

（ご確認後の連絡先：doisusm@shinshu-u.ac.jp）

３．今後の展望

教員養成カリキュラムを、①教員が主体となる「講義系」科目、②附属学校園や各種施設が主体となる「実習系」科目、そして、③学生が主体となる「実践系」科目に分類するとき、フレンドシップ活動は③に該当する数少ないカリキュラムであると考えられます。この「実践系」カリキュラムには、あらゆる学問分野の教員と学生が参画することが可能です。

今回集った 70 名は、それぞれ専攻している学問分野は異なっています。しかし、それぞれの特性を発揮し合いながら、「一」や「輪」「和」「共」を目標として掲げて団結することができました。そのような皆さんの活躍している姿を是非見学させて欲しいと願って、広島、金沢、岡崎、館林、横浜、木曽、佐久、長野などの地から 16 名の全国フレンドシップ活動の先輩たちが訪ねて来て下さいました。この方々は、全国フレンドシップ活動の０回、１回、３回に参加された卒業生です。何よりも嬉しく驚いたことは、16 名の中に赤ちゃんを抱いた３人のお母さんが、元気いっぱいに参加して下さったことです。

３月８日（日）の 10：30〜12：00 のリフレクションの時間は、予定外のことでしたが、先輩と後輩と赤ちゃんが一緒にリフレクションする場となって盛り上がりました。

今後の全国フレンドシップ活動の発展を展望するとき、フレンドシップの中に、①学生同志のフレンドシップや、②学生と子どもとのフレンドシップはもとより、③学生と地域社会の人たちとのフレンドシップ、④学生と卒業生とのフレンドシップ、⑤教員同士のフレンドシップなども、視野に入れていくことが重要であると考えています。その具体策の一つとして、全体会は各大学の活動報告を中心としつつも、そこにフレンドシップ活動に関する卒業論文をまとめた先輩の研究発表や学校現場での実践報告などを取り入れてみることを提案したいと思います。

最後に、皆様の益々のご健康とご活躍をお祈り申しあげます。いつの日か再会できることを楽しみにしています。

「第9回全国フレンドシップ活動in信州」を終えて

実行委員長
理数科学教育専攻4年　笠井悠太

平成22年3月に横浜国立大学で「第10回全国フレンドシップ活動」が行われました。ちょうどその1年前に信州大学がホスト校となって「第9回」目を実施することができました。全フレ（全国フレンドシップ活動）を振り返って思うことを以下に述べたいと思います。

私は、フレンドシップ活動は自分一人でできるものではなく、たくさんの人、学校関係者、保護者、担当教員の方々の支えがあり、そして一緒に企画する仲間がいてはじめて成り立っているんだと強く感じました。だから逆に言えば、それが当然のように感じている人がいるとしたら気づいて欲しいと思い、全フレのテーマに「気づき」×「築き」を掲げました。皆さんは多くの方々と関わって何を感じ取ったのでしょうか。「当たり前のことなんて何もない。協力してくれる仲間、支えて下さっている先生、地域の方々がいるということは、本当に恵まれた環境なんだ」ということに、気づいて欲しかったと感じています。そして、「感謝」という気持ちをこめ、その関係を大切にして欲しいという気持ちでした。

記念講演で小岩井彰校長先生が教えてくださった「人は出会うべき人とは必ず出会う。それも一瞬も遅からず、早からず」という言葉にあるように、意味があるから出会いがあると思います。だからこそ、出会いと仲間を大切にしていきたいと思います。

この他にもたくさんのことを経験し、伝えたいこと、感じたことはたくさんあります。私は「第9回全国フレンドシップ活動」を実行委員長という立場で経験することができ、本当に良かったと思っています。今の自分の姿を知ることや今後の課題などもしっかりと見据えることができたこと、また、全フレという機会を通じてたくさんの人と知り合えたことなど、本当にたくさんのことを得ることができたからです。そして、この経験を自分の大きな糧として、今以上に大きいこと、大きい目標に挑戦していきたいと思いました。

「全国フレンドシップ活動」は、本当に良い活動だと思います。内容はどんなことをやったとしても、自分を見つめ直す機会、他者の考え方、知識にふれ刺激を受ける機会、同じフレンドシップ活動を通じての出会いなど、本当にプラスになることがたくさん詰まった活動だと思います。また、全国の学生が刺激し合い、交流する場があること自体すごく新鮮なものだと思います。

今回は「第10回全国フレンドシップ活動」へと引き継ぐことができましたが、全フレも必ずある活動ではなく、やりたい人がいなければ無くなってしまう活動です。是非、今後も私たちの手でこの良い活動を後輩に伝え、切り開いていけたら良いなと思っています。

最後に、「つながり」「成長」という願いを込めて青木村の公園に植樹した3本の「全国フレンドシップの木」が成長し、花を咲かす頃に皆さんとまたお会いできることを心から念願しています。

「信大 YOU 遊世間」にご協力いただいている団体・個人のご紹介

「信大 YOU 遊」の取組は、平成6（1994）年6月6日の実行委員会開催から始まり、その10年目（平成15年度）から「信大 YOU 遊世間」と改称し、以来、地域社会のさまざまな団体・個人と連携させていただいています。その際、大学側からお願いしていることは、次の4点です。

① 子どもの育成や世代間交流などのふれあい体験ができること。
② 学生も企画段階から参画できること。
③ 1年間単位での継続的な自然体験や社会体験ができること。
④ 子どもの安全等の責任は、その団体において受け持っていただくこと。

これらの条件を規準として両者の間で協議し、合意を形成しながら活動を進めてきています。学生は地域社会のご期待に応えられるよう汗と知恵を発揮することに努めています。

「YOU 遊」の取組をまとめた「報告書」も、本書で第 16 集となりました。この間、学生は陰に陽に地域社会からご厚誼をいただいてまいりました。それらのことは、いづれの「報告書」にも感動を持って記述されております。次に、これまで長年にわたって大変お世話になっている団体・個人の方々をご紹介し、感謝の意を捧げたいと思います。

1. JA 長野中央会・JA ながの・JA グリーン長野・長野市農業公社
   「人づくり」の智慧を「土づくり」の体験学習を通して学ばせていただいています。
   学生はその豊かな感性で、農作業体験から実に多くのことを吸収しています。
2. 長野市茂菅地区農家
   「信大茂菅ふるさと農場」の水利用にあたっては、4軒の農家の輪のなかに入れていただき、水管理のお世話になっています。特に地元農家の林部信造氏ご夫妻には、農場と地域社会の調整役としてお世話になっています。
3. 長野県長野養護学校保護者の会
   お母さん方がお子さんに接しておられる姿を通して、学生は一歩一歩障害児との関わりを学ばせていただいています。
4. 長野市立湯谷小学校保護者の会
   子どもの活動のために保護者と学生がどのように連携すればよいのかを試行錯誤しながら学ばせていただいています。
5. 長野県教育委員会・長野市教育委員会・青木村教育委員会・麻績村教育委員会・須坂市教育委員会
   村や市をあげて学生を受け入れ、伝統文化が息づく環境の中で学生を育てて下さっています。
6. 長野市大岡支所・長野市立大岡小学校・農村女性ネットワーク・放課後子どもプラン
   大岡地区で新たなプラザを立ち上げるためにご協力いただいています。

このほかにも多くの団体・個人の皆様のご協力をいただいています。どうぞ、今後ともよろしくお願い申しあげます。

（土井　進 記）

編集委員会規程

平成18年3月16日制定

第1条　編集委員会の設置

「信大 YOU 遊世間」の実践記録を、学術的価値のある教師教育学研究として高めていくために編集委員会を設置する。

第2条　編集委員会の構成

「信大 YOU 遊世間」の運営委員（運営委員長、副運営委員長、各プラザ長）と「YOU 遊フェスティバル」の実行委員、その他編集委員会において必要と認めた者が編集委員となり、編集委員会を構成する。

第3条　編集委員長

編集委員長、副委員長は委員の互選によって決める。

第4条　編集方針

(1)　各プラザの実状に即した編集を工夫する。

(2)　学生の視点だけでなく、必要に応じて広く地域社会の協力者や専門家の意見も取り入れる。

(3)　第1次原稿の提出は12月25日、第2次原稿の提出は1月20日。発行は3月末日とする。

第5条　執筆要項

(1)　執筆する際は、「信大 YOU 遊世間」の実践と「YOU 遊フェスティバル」の実行を通して、実践的指導力のどのような側面を養成することができたのかが明らかになるように、具体的に記述する。

(2)　実践的指導力養成の側面は、以下のとおりである。

A：子どもへの興味・関心

B：子どもが秘めているパワーへの共感的理解

C：子どもとのコミュニケーション

D：広く豊かな人間力・社会力

E：大学における学問力

F：広場（プラザ）や講座の企画力

G：わかりやすい授業力、楽しくなる実践力

H：学生どうしの協働力

I：保護者、地域社会の人々との人間関係構築力

J：その他

第6条　この規程は、平成18年3月16日より施行する。

第17期「信大YOU遊世間」へ向けて！

第17期「信大YOU遊世間」運営委員長　**片原範子**（理数科学教育専攻２年）

第 17 期「YOU 遊世間」運営委員長になりました。片原範子です。よろしくお願いします。

教育学部へ来て、「YOU 遊」の活動があることを知り、初めて参加した時、子どもが自然と触れあう楽しさや、学生が企画した活動を思う存分に楽しんでくれる姿を見て胸がいっぱいになったのを覚えています。また、子どもたちが喜ぶ姿を想像しながら、先輩方と一生懸命企画当日に向けて、準備することが楽しくて仕方ありませんでした。どんなに土まみれになっても、汗をかいても、寒くても子どもたちが喜んでくれる顔を想像したら、への河童でした。それだけ私たちにとって、参加してくれる子どもや保護者の皆さんの存在が大きいのだなあと実感しました。それと同時に、こんな素晴らしい活動が代々教育学部では引き継がれてきたのだと、伝統の素晴らしさも感じました。先輩方の代を引き継ぎ、もちろん私たち第 17 期のメンバーも、やる気で満ち満ちています。

私は、次年度の「YOU 遊世間」を運営するにあたって目標があります。それは、先ず、この「YOU 遊」の活動をもっと地域に開かれた活動にしたいということです。私たちが何の目的でこのような活動を続けてきているのか、どのようなことを子どもたちや保護者の皆様から得ているのかなど……、もっともっと広げていきたいと思っています。また、運営委員長として、各プラザが常に他のプラザの状況を把握できているというような情報面においても気を配りたいと思っています。そして、みんなで楽しんでこの第 17 期をよりよい活動にしていきたいです。それにあたり、この「YOU 遊世間」を実行するにあたって、とても多くの方々がご協力してくださっているということを常に念頭に置き、感謝の気持ちを忘れずに活動に励んで行きたいと思います。

土井先生をはじめ、代々引き継がれてきた先輩方に、まだまだヒヨコな私たちはいろいろと迷惑をおかけしてしまうと思いますが、代々の伝統を引き継ぎつつも、私たちらしい、私たちにしか作り上げることのできない第 17 期の「YOU 遊世間」を目指したいと思います。これまでに決まった役員は次の通りです。

運営委員会（長）片原範子（理数２年）
（副）髙見澤誠（理数２年）
（副）三石梨沙（理数２年）
（副）藤浦修司（社会２年）
茂菅農場　（長）三石梨沙（理数２年）
（副）土屋克明（理数２年）
（副）松井　遥（理数２年）
湯谷小　（長）髙見澤誠（理数２年）
（副）腰原綾香（理数２年）
青木村（長）荻原知子（実践２年）
（副）駒村美代（実践２年）
麻績村（長）小賀坂佳子（理数２年）
（副）三石梨沙（理数２年）
大岡　（長）山越　俊（社会２年）
YOU遊フェスティバル
（長）藤浦修司（社会２年）
（副）小賀坂佳子（理数２年）

おわりに

土井　進（教育科学講座　教授）

信州大学教育学部から貴重な学部長裁量経費をいただき、また信州大学創立 60 周年記念事業実施委員会から尊い補助費をいただき、ここに『「信大 YOU 遊世間」の教師教育学研究第 16 集』を発行することができました。ここに衷心より御礼申しあげます。誠にありがとうございました。60 周年記念事業は、次のように行われました。

1．事業名：「信州大学創立 60 周年記念事業」

① 50 周年記念事業として植樹した樹木の間伐作業

② 第 8 回信大 YOU 遊フェスティバル

2．事業内容：

① 信州大学創立 50 周年記念事業として、教育学部キャンパスに植樹した木の間伐作業を学生 240 名の参加で実施した。

② 第 8 回信大 YOU 遊フェスティバルを教育学部キャンパスで開催した。12 講座に学生が 240 名、小学生 130 名とその保護者、合計約 500 名が参加した。

学生の参加は、次の大学からであった。教育学部 1 年～4 年、工学部、人文学部、経済学部、理学部、医学部。農学部、繊維学部、長野県短期大学、清泉女学院短期大学、飯田女子短期大学、松本大学、上越教育大学、横浜国立大学、文教大学、岐阜聖徳大学、武蔵野大学。

3．対象者及び参加人数：

小学生とその保護者、学生、地域住民、来賓、信州大学教員　　参加人数　505 人

4．実施日：平成 21 年 11 月 21 日（土）～平成 21 年 11 月 22 日（日）

5．会場：信州大学教育学部

【編集後記】

後期に入り、だんだん残りの活動が少なくなっていく中、『「信大 YOU 遊世間」の教師教育学研究』（第 16 集）の編集作業が始まりました。リーダー会の中で、各プラザ長に執筆を依頼し、各プラザでお世話になっている地域の方々からの原稿を集めてもらいながら、各プラザの原稿が出来上がって行きました。1 次締め切りの 12 月 22 日には、原稿の内容が十分でなかったり、原稿を書いていなかったりしたプラザもありました。内容の構成については、自由に書いてよいということだったので、各プラザの皆さんには多大な負担をお掛けしたと思います。また、「YOU 遊世間」で学生が 1 年間で学んだことを、自分たちの文章で書いてほしいとの願いから、公的な文章としては不適切な部分もあるかと思います。ここでお詫び申し上げますと共に、ご容赦下さいますようお願い申し上げます。

最後に、この実践記録の執筆をはじめ、編集作業をお手伝いしてくださった編集委員の皆さん、そして、この「YOU 遊世間」の活動に主体的に参加してくれた学生の皆さん。出版社の春日さんと連絡を取りながら、私たちに原稿を書くように叱咤激励して下さった土井先生。お忙しい中、地域の様子がよく伝わってくるようなリアリティあふれる原稿をお寄せ下さった地域協力者の方々。私たちの拙い文章を修正し、温かく対応して下さった春日さん。この実践記録に携わった全ての皆さまに心から感謝申し上げます。

2010（平成 22）年 2 月 1 日

編集委員長　東野千尋

表紙解説

私にとっての「YOU 遊世間」は、世代を超えた絆があり、人の笑顔にあふれるあたたかな楽しい場所だと、活動を通じて思いました。そんな「YOU 遊世間」をこの表紙から感じていただけると、制作者として大変嬉しく思います。

絵のバックには春夏秋冬の花を入れ、一年かけて世代間の絆を深めていく様子を表しました。虹色の背景からも色々と感じていただけたらと思います。また、裏表紙は、これからの「YOU 遊世間」への期待を込めて描きました。

この表紙は、土井進先生、上田秀洋先生、そして、「YOU 遊世間」に携わってきたすべての人のご協力に感謝しながら、描き進めてきました。

皆さま、本当に有難うございました。　　(阿部由季　芸術教育専攻　美術分野３年)

＜第 16 集編集委員会＞（◎委員長　○副委員長）

◎東野　千尋（芸３）　○市川　香織（実３）
○早川　和宏（理３）　○宮尾　亘（実３）
安部　由季（芸３）　飯島　理沙（理３）
鈴木　梢（理３）　西澤　直城（理３）
肥野沙也加（野３）　布山　朋和（実３）
土井　進（教員）

学部長裁量経費
平成 21 年度教員養成学部フレンドシップ事業　報告書
授業科目名：「社会体験実習」「社会教育演習」

「信大 YOU 遊世間」の教師教育学研究　第 16 集

2010（平成 22）年３月 11 日印刷 ©
2010（平成 22）年３月 16 日発行

編　集　第 16 集編集委員会
発行人　土　井　進
E-Mail：doisusm@shinshu-u.ac.jp
発　行　信州大学　教育学部　教師教育学研究室
〒380-8544　長野市西長野６一ロ
TEL 026-238-4260　FAX 026-238-4260
制　作　オフィス春日
E-Mail：xmbxp210@ybb.ne.jp

「臨床の知」

信州大学教育学部は、学校、家庭および地域社会の諸問題にコミットし、
他者や事物とのいきいきとした関係や交流を保つ「臨床の知」の理念を核とした
新しい教育体制に生まれ変わりました。